

人物研究

員を籠蓋するの辯と學とあり、政友會に於て異彩を放つ、豈に故なしとせんや。

▼議會閉會後政友會幹事となり、陪審制度の問題を提さげて立ち、司法部の調査部長となり、政友會内に司法上の空氣を注入すること少からず、特に憲法問題、選舉法の問題の生ずることに、花井博士の雄辯宏辭は政友會を惱ますこと少からず。總明鶴澤氏を以てしては、學は即ち之れあるも辯に於て遠く花井に及ばず、於此乎彼の雄辯は法律

問題に於て、花井に對抗すべき政友會の防火壁となれり、聞く彼は大臣を志しつゝありと、今や文官任用令改正せられて勅參の道開く、人は松田勅參を吹聴するも、松田氏自身は尙ほ高く止まりつゝありと、之れあるかな、望みは大なるを要す。

辯護士としての彼は政客としての彼れよりも闊散なり、彼は辯護士として第一流たらんよりは政客として第一流たることの寧ろ捷徑なるを選ぶの考ならん。好漢乞ふ自愛せよ。(白龍學人)

教壇上の人物

大内青巒—加藤咄堂—田中弘之—高島米峰—近角常親—多田鼎—西島義豊
高橋了照—植村正久—海老名彈正—吉田靜太郎

▼日本に於ける佛耶兩教の人物を見渡して、私の云はんと欲する所を一寸云つて見たい。先づ佛教

界の人物に就て述べて見よう。

佛敎界の人物

▼『佛敎の生命は有志佛敎にあり』とは、何人が言ひ出した語であるか知らぬが、全く明言である。今の佛敎の生命は確かに有志佛敎にあるのである。即ち佛敎を代表して通俗敎育の任に當て居る人は誰れであるかと云ふに、本山の役僧にあらざして大内青巒、加藤咄堂の如き居士連である。

青巒今や老いたりとも雖も、咄堂は尙ほ甚だ元氣旺盛にして、一年の演說數平均二百、原稿を書くこと一年平均二千枚、以て専ら通俗敎育の任に當たられて居る。人或は咄堂の平凡を笑ふあれど、笑ふ人々は、彼の天職とせる所を見ず、學者として彼を見て批評するからである。通俗敎育家として見る場合には何人も彼を偉なりと

教壇上の人物

せざるを得ない。

▼佛敎を代表して、時事問題を論ずるものは、之れも本山の役僧、末寺の住職連にあらざして、佛敎界の浪人、田中弘之、若い所では高島米峰等の徒である。

田中弘之氏は大正の大久保彦左衛門を以て任じ相變らず若い者を相手に騒ぎ廻はり悪口屋から問題屋と稱せられて居る。今や翁は東亞佛敎會を興した當時の如き勢力を佛敎界に有して居ないが、浪人の首領としては、年々次第に大きく社會の眼に映じて來て居る。余は翁の任務の甚だ大なることを信じて疑はぬ一人である。

高島米峰氏は新時代の田中弘之とも稱すべき人で、今後佛敎徒を代表して時事問題を論ずる人として、次第に大きく社會の眼に映するに至るであらう。たゞ其の身體の強健ならざるは氣が

かりである、米峯の攝生を祈る。
▼佛教界の眞信仰家と云ふべき人々も、本山に關係ある人々ではなくて、浩浩洞の多田鼎求道學舎の近角常觀の如き人々である。

多田氏は千葉にありて布教に従事せる傍ら雜誌『精神界』に執筆せられて居る。余は『精神界』中多田氏の文を最も愛讀し、常に敬虔の念に打たれて居る。清澤門下の三俊、多田、曉鳥、佐佐木三人の中、佐々木は學者風曉鳥は英雄的で多田が最も眞の宗教家の風ありとは、余が知人間での定評である、思ふに何人も多田氏を斯く觀察して居ることであらう。
折角氏は口に念佛を絶さぬ人である、人と談話中にも、客の歸るを送りて玄關に至るの間にも口に稱名念佛を絶さぬ人である。余は曾て氏を訪問せしことありしが、玄關にて『サヨナラ』

して歸る余は、尙ほ後ろより氏の念佛の聲聞え來れる時『憶念佛の人なるかな』と氏の人格を尊く思ふたことがあつた。彼は全く念佛漬けの人である。或人は『近角はあゝして居るのだ』と冷笑して居るが、余は嘘で斯様なことの出來るものでないと信じて居る。彼は長く監獄の教誨師をもして居られたが、囚人と云へども、氏の熱心に動かされぬものはなかつた嘘の人物に疑ひ深ひ囚人を動かす力などの有り得るものではない。

▼又佛の慈悲の實行者として見るべき人々も、僧侶として位地ある人々には無くて、寧ろ名の知れぬ、本山には餘り重せられぬ僧侶の中に多いのである。例へば四谷寺町西念寺の住職西島義豐の如き、府下南足立郡東淵江村養福寺の住職高濱了照の如きが、ソレで、兩人は世間的には高名でない

が、其の爲しつゝあることは面白い、佛教の僧侶中に二人の行に習ふものが殖へれば、それが將來とれ位佛教の爲めになるかも知れぬ。さう思ふと、余は佛教界の人物を觀察するに當りて、二人を逸することが出来ない。

西島氏は七年前よりお寺を小供の爲めに開放し其の庭は彼等の運動場と爲し、其の實は彼等の圖書館と爲して居るのである。而して尙ほ兒童生長せば其の職業の紹介にも力を致し、更に兒童の家庭のことに就ても世話をして居るのである。

高橋氏も、其の寺を兒童の爲めに開放し、それから始めて村人の心を捉へ、現實の問題に觸れて世話する所から、お寺と村人とを接近せしめ今や大に氏が中心となりて其の村の人情風俗を改善して居るのである。余は二氏の行に習ふも

のが殖へれば、國民に忘れられ、無用視せられんとしつゝある寺々が、再び復活して、國民感謝の中心點となるに至るであらうと信じて疑はぬものである。お寺の開放、二氏は此の問題を全國十萬の僧侶の眼前に提出して居るものである。

▼斯く如何なる點より見ても、佛教の生命は有志佛教にあるのである。老木は倒れても、其の根は必らずしも枯れぬ、根から又新しい芽が出て來ることがある。今の佛教は恰かも其の如くである。余は此の新しい芽の健全に發達せんことを祈りて止まざるものである。

基督教界の人物

▼東京の基督教會の中で、日曜日一番多く信者の集まる所は、何んと云ふても、植村正久氏の富

士見町教會であらう。それに次ぐものは海老名正氏の本郷教會である。植村氏は有名な訥辯家であるが、海老名氏は有名な雄辯家である、訥辯家の雄辯家に優りて多くの聴衆を引きつけて居るのは一つの奇現象である。此の奇現象から、人を引く力の、辯と云ふよりは、それ以外のものにあることが知れる。

▼而して訥辯なる植村氏と、雄辯なる海老名氏とが、最も多くの聴衆を吸引して居るのにはそこに一つの共通の原因がある。それは何にかと云ふに兩氏共に勉強家であることである。植村氏は日曜日の説教の爲めに、毎週、大部の洋書を四五冊づつ讀むと云ふことである。海老名氏も、殆んど何んにもせず六日間説教の用意にのみ忙殺されて居ることである。説教は元より讀書ばかりですべきものではないが、讀書は其の大切な準備

の一つである。其の證據には讀書を廢せぬ植村、海老名兩氏は、何時までも聴衆を吸引して居るが讀書嫌ひの某々等は、日に／＼葬られつゝあるではないか。

▼併し植村氏、海老名氏にはモウ未來がない、基督教界の人物中、最も未來のある説教者は救世軍の山室平氏であらう。余は氏と信仰を同じくせず、又氏の社會意見にも悉く同意することの出來ぬものであるが、併し氏の辯力には敬服して居る一人である。餘り熱し過ぎ早口過ぎて落ち付きのない弊はあるが、引例の多い、言葉に無駄のない咄々人に迫るの概ある説教者として、余は氏の辯舌に敬服せる一人である。

▼余の最も面白く思ふことは、永く基督教界を去て居た、三人物、押川、金森、巖本の三氏が、近頃共に基督教界に復活し來たりしことである。若

しくは復活せんとしつゝあることである。押川氏は神田橋畔の和強樂で月に一回づつ説教を始め居る、彼の辯は眞に落雷の如くである、其の舌端より紫電の閃くありて、時々聴者を氣死せしめずんば止まない。余は彼に面會せざるの前は、押川は墮落した、彼はモウ駄目だとの世評のみを耳にして居たので、自然何時とはなしに、彼はモウ氣死せるが如き有様の人となつて居るだらうと思ふて居た、所が會つて見て驚いた、彼は堂々王者の如き風を備へて居た。更に其の辯を聞くに及んで愈々驚かされた。人は墮落するものぢやない、彼も生長しつゝあつたのだ。

▼金森氏の如きもソウだ、一時政黨にも這入り、相場社會にも這入居たと云ふので、世人からは墮落したとのみ見られて居たが、彼には彼の考へがあつて、一時ソウなつて居たもので、聞いて見

ると、彼の言にも道理がある。而して又、最近彼は説教壇に立ち始めたが、其の説教たるや、實に水が物を濕すが如き説教である、靜かに／＼説き去り説き來りて、其の舌端よりの活ける水で、聴衆の心を濕し盡さずんば止まない。余は氏の説教を聞いて、又人は墮落するものでない、如何なる人物も絶えず生長して止まざるものであるとの信念を深くした。假りに金森氏は一時墮落したものであるとしても、彼の墮落は彼にとりては其の心の肥料であつた、彼は其の所謂墮落によりて尊き經驗を得たのであつた。

▼巖本善治氏も、明年一月よりは、雑誌を發行し又演壇にも立つと云ふことである。氏は何んと云ふても天才である、偉人の素質ある人物である。氏も亦一時押川、金森二氏と同様、他の方面へ行つて別の經驗を積みつゝあつたのであるから、歸

り來りて再び論壇に立つと、其の筆舌には大に社會を動かすものがあるであらう。

▼説教者としての道を單調に歩み來たつた、海老名、植村、宮川氏等は、モウ喋り盡し述べ盡し吐き盡した風があつて、別の方面へ一時ソレて居た金森、押川、巖本三氏の辯に、今や反て力あるのは面白いことである。否、考へねばならぬことである。茲に人間は複雑なものであるから、多種多様な経験を積んだもの程、其の説教に力ありとの教訓が含まれて居るものではなからうか。

▼併し宗教の眞生命は、説教よりは人格にある。されば基督教界にも曾て「サンデー」に紹介された大出萬吉氏の様に、隠れたる眞人物がなかつたらば、トテテ其の勢力を維持することが出来まいと思ふ。佛教が今尚ほ、勢力を得て居るのにも、基督教に今日程の勢力があるのにも、隠れたる萬

吉氏の如き人物が多くなつては出來ぬことである。▼吉田静太郎氏の如きも其の一人である。氏は世間的には左程名高い人でなく、一小教會を牧して居るに過ぎない人物であるが、全く生活問題を超越し、一切を神にまかせて行動せる人物である。學生時代には、自分の學費をさいて同學の貧生を助け、傳道者となつてからは、三度の飯を一飯にして、二飯を以て人を助けしことすらある人である。

▼佛教界の人物にしても、基督教界の人物にしても論せんと欲せば、論せねばならぬ人物が尙ほ甚だ多いが、今回は之れにて擱筆しよう。(四川光天郎)

大正文壇の十二大家

島崎藤村—正宗白鳥—田山花袋—森鷗外—徳田秋聲—泉鏡花—夏目漱石
永井荷風—小栗風葉—上司小劍—徳富蘆花—柳川春葉

島崎藤村

▼文章を通じて見た氏は、何處までも藝術家である。殆ど間然する所のない意味に於ける藝術家である。が、之を雑談の氏、日常生活の氏に見ると、此の風格に加ふるに更に別種の光彩がある。實に氏は實生活の人としても上下社會一般から一理想的人物として許されねばならぬものを持つて居る。道徳式禮習慣の類を、直ちに自由に謬る所なく實行して而も氏の内部の藝術的生活とは常に渾然とした美と眞と熱とを併せ現はして居る。常

大正文壇の十二大家

住坐臥、氏は藝術家の境域を超えて、更に靈界の一偉人として許さるべき人である。

▼とはいへ、謹嚴質實な人であるだけに、群集を怖れる心持も多い。文壇古名家の數ある中にも此程によく群集の心、青年の心に融け込み得る人はなく、又常に善解と尊敬とを以て迎へられる人はない。その風格言動は凡て瞑想的藝術的であつて此の趣は談の如何なる方面、如何なる末葉に到る時と雖同様である。此兩三年の氏は座談の裡によく「魅力」といふ言葉を用ひられた。人格といふものよりも魅力といふものの方が考へ易い。氏は

又、ルツソー以来の愛讀書として一時クロボトキンのMemoir of a Revolutionisを耽讀して、そのボイドレイルを愛讀するに到つたのは、彼の城外出水の年、冬子夫人の死後である。ルツソーの感化はこれを「破戒」に見、クロボトキンの感化は「群」「壁」その他の數篇に見る。されば社會的の氏が技巧は如何なる艱難の立場に在つても、暗示の外には出でない事が證される。此點から見ると、氏が老後の藝術的生涯は、現在の造詣に比して、更に如何なる光彩を載するであらうか。日本人であつて、古來稀有の文人である事を忌み得る者はない筈である。敢て世界的と言ふ事を避ける。

▼吾人は謹んで、彼の巴里ルキサンブルグに近く植ゑられた一本の、やがて吹き送る新果の香氣を期待しなければならぬ。氏の容貌風采には氏が好んで用ひる「幽鬱」といふ文字がよくあて嵌まる

正宗白鳥

それを見てゐると信州の山奥の大森林の濃緑が目

に浮んで来る。記者は嘗て氏が鼻下の美髯を木鼠にたとへた事がある。談話の際に相手の顔を直視する事の少い、その大きな底深い眼は絶えず伏し目で、その邊から出て來る美しくして低く陰氣なテノルは、時に惇々として語り續け、時にはピタリと十五分間も堅く噤まれて、考へ込んでしまふ。蕪かづらに閉ぢ込められた巨屋——それが島崎藤村氏の印象である。

▼初めて逢つてそれきりになつたある新進作家がその時哄笑に打ふるへる白鳥氏の咽喉佛を見たと言つて、逢ふ人毎に話して聞かせた。

▼笑ひたくない人ではない。笑へない人でもないまだ内海の訛こそとれぬが、氏の述作に追憶的分

子の多い程、氏は田舎者の血に乏しい人だ。そして氏が東京兒である分量だけ、氏の身長は縮まつた。瘦せた高島田の妻君に肥つたばあやと同棲する時代にも、氏の書齋だけはあだかも嚴然たる冬に蔽はれた山村に等しい。右顧左視——は氏の身に副ふた影である。

▼文壇に名をなす以前の白鳥氏は、實に分外稀有の空想家であつた事が推定される。自傳小説の開祖、第一人者はいづれ白鳥氏ときまつた。無器用ながらもいゝ文章を書き、荒れたながらに烈しい微動を讀者に投げる、白鳥氏の創作が有する魅力は、凡て眼に入る煩はしさを棄て去て、グサ／＼とした日の湯上りに一寸浮世を眺めまはしたやうな味にある。ある意味から言へば、入り易き弱者の聲であり、又は藝術的懶惰者のかみしめられた欠伸である。そこに白鳥氏の新しい責任は潜んで

居るのであらう。氏自らも告白する如く、白鳥氏は自ら創作家となつたわけではなく、周囲の見物が大家にしてしまつたのである。大局の上から見れば氏は決して社會の言ふ如き『りかう者』ではない。或は取り立て、いふ程のりかう者ではない。氏はうきよの人である。なみの人間である。そしてうきよでは劣敗者である。一度氏と面接した者はその絶えずイラ／＼として無感興な内部生活が肉の落ちた頬、悲哀と疲労とに色づけられた眼、光澤のないエンファシスのない聲と言葉とによつて表象されて居るのに心付くであらう。慕かしくない人、取り端のない人、そして空想に食傷した人、いや／＼ながら生きて來た人、——これ等が氏に今日の盛名を與へた。試みに坐禪を組ませて見たい人の一人である。

▼氏は何れの方面に於ても評論によつて自己を表

現し得る人ではない。説らしい説を氏に求めるのは求める方の間違である。たとへば我國文壇に於ける氏は一個の寶玉である。貴重な物には相違ないが、膝下に伏してその言を傾聴するには足りぬそれが寶玉自身の性質だからである。

田山花袋

▼よく言へば努力奮闘の人、悪く言へば散漫な人である。島崎氏の如くに他を包み擁する程の力なく、過去の煩悶が恐らく一本調子であつた事は否定されない。精力の豊富な事はその創作力とは殆ど比較にならぬ。藝術家といふよりも寧ろ事務家の風があり。創造の力は藝術に於けるよりも却つてその家庭と生活の方面に勝れて居る。機に應じてたちまち『なまぬな』を書く人ではないかと危ぶまれる。

▼後進に對する態度から言つても、島崎氏が何處までも之を一個の人間として對等な扱ひをするに反し、氏は門弟、書生、子分として扱ふに慣れてゐる。之は氏が家庭の主人公としての力量と分別とに於て遙かに前者に勝れて居るが爲であらう。職を求むる青年にして一たびは氏の門を潜らぬ者なく、かくして又一たびは氏と離別乃至反目せぬ者はない、愛憎に強いといふ氏の美點は、對人態度の一本調子である事に助けられる事が多い。とはいへ、我國の自然主義にとつては唯一の恩人であり先驅者である。行く處までその地盤を開拓して行く方が、左右新興の機運に應じようとするよりも氏にとつての得策であると信ずる。之は自然主義隆盛時代の氏の舉止とその文章とによつて明らかに證明される。

▼四十にして感はず、さういふ言葉がよく當て嵌

森鷗外

る程に、創作家としての氏の地盤は落ち著いて居る。周圍から受ける影響と感化とは氏に於て殊に甚だしいのを見る。

▼逢つて見ればまことに心の置けない人で、敷島の吸口を厚い唇に塗りつけながら、少しまがつた眼鏡をその高からぬ鼻柱におしつけて、唾を飛ばしながら、その時々々の理路によつて時事を談ずる處は甚だ殊勝である。そこに別種の魅力もあり、美しい處もあるが、何れにしても藝術家としての印象は薄い人だ。島崎氏とは同時代の人でありながら、新味に於てはとて及ばない。俗流に所謂大家といふ言葉には實によく當て嵌まつて居る。

▼翻譯家である。輓近の氏はその創作の方面に於ても頗る翻譯家の香氣がある。西班牙のエチエガ

大正文壇の十二大家

ルレイ氏等が想像される。終始一貫したデイルツタントである。文藝に遊ぶの士である。氏を文藝院委員とし、之を以て文壇の地位を論はさうとした日本は悲しく貧しい國である。その社制的地位に於て、その博學に於て、その文藝上の心の持ち方に於て、森鷗外氏に羨望の眼を送らぬ青年はないであらう。そしてさういふ眼を持つ青年は言ふまでもなく懶惰者であらねばならぬ。殊にその文藝上の心持を羨む點に於て。新進氣鋭生眞面目な青年の心持では分らないのである。その位階と地位と萬卷の書と而して母國の藝術に對する放縱な心持とを除いた後の鷗外氏は恐らく今日以後の世界には見られぬであらう。それを見やうとするのが鷗外氏に對する現代青年の唯一の希望である。

▼鷗外氏の文章を讀んで、軽く「うまいな」と思ふものはあつても、その創作の全局から一つの感

動といふ程のものを受ける者は恐らくはあるまい
 文章の妙境といふものはあんなに平凡無味なもの
 であらうか、鷗外氏の署名を見ると同時に吾人の
 讀書熱は意外に減退するのである。珍しい事、
 新しい事を聞くといふ點に於て、吾人は遙かに「掠
 鳥通信」を愛讀する。敢て氏の創作を俟たない。
 ▼さりながら、その描寫、話説の手に於ては彼
 の故園喬をきき、圓右をきくやうな心持——即ち
 名人の手續といふ名稱に恰當する。
 ▼鷗外氏は矢張り翻譯家であらう。文體、學識、
 心持、年齢等の諸點から見ても、坪内逍遙氏と並
 んで、海外文藝紹介の信用すべき二大會社である。
 表面に光りのある翻譯には得て間違ひの多いもの
 だ。若い人のした翻譯は、海外大家の創作に於て
 一層眼の毒である。
 「此人なら安心だ」といふ感じが此の第一印象で

ある。氣強く心配がなく、そして何でも知つて居
 る、どちらにしても安心な人である。
 ▼午前九時の白山下に立つと「お醫者は來たり馬
 に鞍」といふ格恰で、軍服に襟を附けず、されば
 黒い顔を殆ど馬の栗毛と等しくして、鞍上の氏は
 ぐらりと首垂れながら、一寸お駒のひきまは
 しといふ形もあつて、馬丁の介抱を受けながら來
 る。秀でた額、秀でた顴骨、廣い肩幅、何さま一
 日二十個の生鶏卵を呑んだ人らしい。兎も角日本
 の文壇にとつてはなくてはならぬ、氣丈夫の叔父さ
 んである。
 ▼文人らしい文人を求めたら、それは吾が徳田秋
 聲であらう。金錢は勿論名譽、形式習俗等に煩は
 さるゝ事なく、窮乏ながらもそれに甘んじ、常に

徳田秋聲



雨後の景色 倉田白羊氏作

心に不足のない洒落な生活に慣れて居る。従つて特に自分の地位を重んずるといふ事もなく又他人に對するに何等の隔ても階級も附けない。代作をさせて後進に資を給し、どうかすると雑誌社に不義理の出来る事もあるが、之等は毎時氏の全生活と性格によつて代償される程に、六ヶ敷くない生活に安住して居る。言はゞ罪のない人である。

▼硯友社出身の人としては、思索の點に於て實に有數の人である。又藝術的良心の先天的に強固な事も希らしい。紅葉氏在世當時の氏の作物は他の諸氏に比べて甚だ流行らなかつたと同時に、當時の藝術として到つて損な陰氣でデミな作物で、而かも餘り名作と思はれるものに乏しかつた。此の陰氣でデミな氣分は現在までも氏に於ける唯一の特色であると共に、又秋聲をして更に一層著實な何篇かの名作を書かせる原因になつた。文人らし

い文人はかくして大正の文壇に尙ほ新しい盛名と實力とを保持しつゝある。

▼物心何れの方面にも、現代の青年をして常に得る處多からしむる人として、島崎藤村、蒲原有明、徳田秋聲の三人は先づ指を屈せらるゝであらう。

▼實際、土の黒く家並の古いドンヨリと曇つたやうな本郷森川町の裏道に、秋聲の姿を見るのは適切である。對座してその沈んだ聲と暗く眠ぼつた顔容に接すれば、誰しも枯れ果てた雑木林の木の梢から淋しく曇つた中秋の冷たい空を覗くやうな氣持になる。氏にとつてはかやうな陰氣な氣分はその本來でもあり、また日毎に原因を作つて落行くやうな境地ではないので、此の物ぐさなヒソメいた生活が氏の生涯の色調なのである。實生活から見ても藝術の方面から見ても、氏は一個の藝術家である。酔いも甘いも噛みわけて氣樂な心持

泉鏡花

に到り、そして自由に考へ自由に述作しつゝあるに過ぎない。政略にも技巧にも到つて乏しい人だ。非常に勝れた瞑想力を有しながら、有名な遑筆でその上に文章に苦心する事夥しい。題のつけ方は昔から拙い。酒を飲めば何處でもかまはず寝込んでしまふ。誘はれれば大概断らぬ。角力がすぎた。帽子をかぶらずに長い鼠色のマントだけで用をたして歩く姿等、如何にもその人らしい。

▼泉鏡花の存在は之を極端に言へば、廣義に於けるロマンテイシズムの存在である。過去十數年に於て抜くべからざる地歩を進め來つた上に、廣き鑑賞界の何れの方面に於ても常に何等かの條件を以て之を魅了し得た此の特異のヴィジヨナリストは、軌近更に新き美と信仰の哲學乃至新進文明批

評家の胸に湧き來らんとしつゝある宗教心理的思索の下に、新しき保護と獎勵を享けやうとしつゝあるマテルランク氏の靈感と信仰、アンドレイエフ氏の幻怪と惡魔的信仰、それ等のものは未だ吾文壇に根底的の共鳴を與へて居らぬ、又そこから出發し、そこに暗と緑色の世界に萌芽せんとする深き内省と信仰とは未だ吾文壇の中心には望見されて居らぬ。鏡花が有する特異の世界には、殆ど内省と名くべき程の内省もなく、又哲學的の向上もない。實に氏にして一たび此の等の微妙なる靈能の世界に一道の眼光を投げ來るならば、今後の文壇に覇を稱するもの恐らくは氏を以てその第一人者たらしむるに違ない。吾人をして言しめば、鏡花の精神生活乃至能動生活の凡ては直ちに此の深甚なる大不可思議界の門なのであるに拘はらず同氏の自己は、惜むべし十年一夜の如くに眠つて

居る。鏡花に囑す、君は此永き眠から醒めて己に君が優先権を有する無数の門の鍵を君の衣囊に探らねばならぬ。

▼十年一日の如くに眠つた鏡花の作品は、又根よくも十年一日の如く單調である。而も此單調は驚くべき特異の内容によつて常にその存在を固うした。

▼巧みなる話説者、天工とも稱すべき文章——古い新しいを言て居る中は文章もまだなまである。故長谷川二葉亭、鏡花、藤村の如きは實際紅葉以來の文章家といはねばならない。

▼舶來のシヤボンの香無して此の人ある事を吾等は母國文壇の誇としなければならぬ。記者は未だ鏡花には一面の識もないものである。言ふ處はたゞ氏の作品を通して、いさゝか氏の内部生活に思ひ及んだに過ぎぬ。

夏目漱石

「我輩猫」まぼろしの橋を書いて一躍當時の流行兒となり「虞美人草」を書き「三四郎」を書き「文學評論」を公にし、朝日社に入り文學博士號を辭退し、桂河畔に頻死の人となり、再び起つて筆を小説に續けつゝある。俳句、禪定、繪畫、彼の赤シャツも坊ちやんも早く思ひ出の人々となつた今日、漱石の筆も少しく老境に入つて來た。最近の「行人」に見るに、昔、二十日、草枕等を書いた頃の潤澤はない。然しかゝる微細な變遷によつて漱石の今後を占ふは勿論早計であつて、眼目一番從來氏が辿られた經路を思へば粘土のまゝの未開地はなほ墨々として氏の四周に在るのである聰明にして多才、兼ぬるに博識、森氏と伯仲する。博士號を辭退する人程あつて、迎接常に牆を設け

ず、腹中何等の滯る處なき、純粹の江戸兒である。師弟の關係はさながら叔父甥のやうな有様であり氏の門を潜る青年藝術家も亦少くない。江戸兒の所謂俠氣的素質があり、同時にキレイサツパリ過ぎた處もある。趣味の廣いことは恐らく文壇隨一である。近く文壇の途説子が傳ふる如く、津田青楓によつて丹青の研究に就き、特に濃厚な綠色を愛するといふ。さもあるべき事だと思ふ。「まぼろしの橋」をかき「草枕」をかき「夢十夜」を書いた漱石の前途には、必ずや濃綠色の新世界が開けねばならぬ。

▼生活上の聰明と藝術上の傑出とは、氏の過去半生に於て殆ど瑕疵を示して居らぬ。少くもその文章上の表現には一點の隙もない。たゞ夏目氏にとつては之等が尙その生涯の半途四半途である。夏目氏の前途は洋々として永い。

永井荷風

▼情誼に於て、藝術的思索に於て、進退去就に於て、趣味に於て、體質に於て、氏は徹頭徹頭純粹の江戸つ子である。

▼絢爛無比と言はれた此人の創作力も近來はとんと衰へたかのやうに見える、ともすれば饒舌に過ぎた氏の作風はその饒舌と傾向を等しくして個性の狭い經驗と徳徊とを充たすに過ぎぬ一片の嗜好に墮し、そのイリュージョンから生活の裏書の別たれて居る事が多い。かう言つては失禮かも知れぬが、氏はその境遇性格等の點から言つて、物心何れにも未だ幼稚な餘裕の却々に棄て難いものがあるのではなからうか。一口にデイレツタントと言つても森氏のそれとは全く凡ての條件を異にする。たとへば森氏のデイレツタントイデオムは確乎たる

藝術的の内部的背景を有し、そこに渾然たる自己と群集との安心が成立して居るに反し、永井のデイレクタンテイズムにはさういふ堅實な地盤はない。デイレクタントの社會的立場の定まるのはここである。一富豪の息として生れたのが、或は藝術家永井氏の不幸であつたのだ。遮莫かゝる比較的單純な頽廢と高價なる安逸とが單にその反照として生み出すセンテイメントは時には得易からざる架空の美であり、時には興味を中心とする單純な鑑賞者の憧憬を誘ふ事になる。その綿々として語り盡せぬ如き文章は、あだかも細い刺繻の絲の如く都會情調を描出するに於て特に効果が多し。

▼一見嬌々たる貴公子、應接亦濃厚を極め、何れは世上の波のあと少き一美丈夫である。氏を藝術家家として叫ぶ事は或は氏自身の態度に反するものであるかも知れぬ。文壇は氏に囑すべき何物をも

持たぬ。傑作劣作並び出づるとも、彼自身は全然係はり知らぬ事であると言ふであらう。永井氏の社會的立場、藝術的境遇には昔から一貫したある孤獨の色調がある。孤獨とデイレクタンテイズム、文人永井氏は常に風のやうに去り、風のやうに來る。周囲は之をどうする事も出來ない。永井氏の向上は永井氏自身の内省努力乃至氏と態度を等しくするもの、精査鑑賞に俟つより外はない。

小栗風葉

▼技巧の天才とでもいふべきであらう。生活の人としても家庭の主人公としても、藝術家の人としても實に手際のい、行き方をする人で、それで居て暗く濁つた批難の聲をきく事の少い人である。誰しもその邪氣のない童顔に接しては、そこに七六ヶ敷い批評や生真面目な議論を持ち出す事に躊躇

する。熱の人情の人であるには相違ないが、それも新しい熱情の人でなく、何處か浪人組の旗頭といつた處がある。硯友社出身の中でも殊にその人らしい人である。紅葉の金色夜叉に續篇を附け加へた程、その文章は豊麗流暢を極めたものだ。最近執筆の「黙從」あたりでは餘程滋味を加へたやうであるが、昔ながらの話し上手に、理論的ならざる眼に映り來る世相の味を泌々と噛みしめた所を見る。決してヒラ一遍の通俗小説家とは斷じ難い特色と言ふべき程の特色をその創作の上に認め難いだけ、文壇に於ける氏の名聲は永く、又消長の甚しいものがない。大した問題にもならないかには氏に對して惡感情を抱く者も恐らくあるま

5. ▼斗酒よく辭せず、醉へば論舌止まるところを知らぬ。文壇の批評、新運動に對する氣焰、新進作

家の月旦にまで及び、議論縱横、話柄百出、元氣な剛腹な人であるが、それでも肯綮奇抜などいふ議論は聞いた事がない。文章家でそして通人である、醒めれば、物わりの早いイキな叔父さんである。

▼小栗風葉の名は今、文壇からは忘れかけて居る。恐らくは通俗小説の大家としても、または貸本屋の柳からも忘れかけて居る。それで居て全體の文壇から激烈な蹴飛ばしを食ふ程の惡評は受けない。殊に近來創作の發表數の極めて稀になつた爲めか、出る毎に當らずならぬ好評を受けて居る。その裏面には一種の文壇の恩人扱ひをする處もあり、また全體の感情から來た客分扱ひもあるのである。之をたとへば田山花袋氏の創作熱の消長に比較したならば、そこに甚しい相違があるして見ると小栗氏は、時代の新舊は敢て言はず、と

うしても小説家としてある安心な一道を有つて居るものといつてよい。兎に角小栗氏のやうな藝術家がかかゝる長いきをするやうになつたのも一つには吾が讀書界の一進運的現象である。況んやその器の大小に於て、一門の秀才眞山青果等の小とは比較にならぬ。

上司小劍

▼迷信かもしれないが、その出て来た様子が、正宗白鳥に似て居るやうである。勿論讀賣社に居ること、自然派の新進である事等に於て酷似はして居るが、人間にも何處が共通な處がありはせぬか小劍氏の藝術乃至内部生活に對して白鳥氏の影響がありはせぬか。但白鳥氏に比べるとまことに煩悶の少ない人のやうに見える。白鳥氏の顔が骨ざわりのする稜々しい想像と鋭利な感心を起させるに

反して、小劍氏には何處もかも圓い、その上何の變哲もなく近より易い。その創作にしても何の屈托もなしに手に執り上げて讀む事の出来るやうな感じがある。記者は中學時代に於て、氏の讀賣紙上に連載しつゝあつた「その日」を愛讀したものだ。しかし此の人は餘程長上の、即ち年配の人であるといふ考へを離れる事は出来なかつた。その創作の二つ二つと數多く讀まれて行くに従つて、さういふ感じは益々深く明らかになつて来た。用心深くコツ／＼と仕上げたやうな、努力といふよりも興味の豊からしい筆致と布置とは一方に於ては小劍氏の道の一貫を、良い意味に於て證明するものであつたし、又一方に於ては小劍氏の藝術的生涯が、他の或る人達よりは權威の少ないものである事が、當然であるやうに考へられた。

▼小劍氏の原稿を見ると以上の感じは直ちに浮ん

徳富蘆花

で来る。落著いた興味の豊かな根のいゝ、それで平凡な刺戟の少ない文字の工合や配列には、殆ど若年者か老年者かを判じ難いやうな處がある。

▼小劍の作物では就中奈良を書いたもの、印象が最も深かつた。寂として蟠まる緑林がボカ／＼としたやはらかな日光を吸ひ、程よく乾いた大地の白色を映して、平和な空には白雲の影もない。緑から流れて来る鐘の音が長く／＼尾を曳いて、人聲もない森閑とした世界の上いつまでもくたゞよつて居る。

▼隠れた人——隠者といふ意味ではない——堅實な人、努力の人、圭角の少ない人、常識の人、そして最後に太陽を見た人、これがその藝術を通じて觀望された上司小劍氏である。

▼その地位と風格とに於て、英のベアリングを想像させるやうな人である。大きくて、眞面目で、圓満で、通俗的で、理想家で、そして古い人である。不如歸、思出の記、寄生木、順禮紀行、自然と人生、みゝずのたはこと、——不如歸が百二十版といふ日本開關以來の盛況を示したことは、その數に於て多少の偶然もあるが、その廣く讀まれた事は決して偶然ではなかつた。通俗小説の獨創としては事實、斯界に一新時期を劃すべきものであつた。さういふ廣い目から見れば「不如歸」も亦優秀なる日本の一クラシックである事を明らかにせなければならぬ。たゞ嚴正なる藝術的立場から見ると、徳富氏はむしろ一般民衆の讀書力の増進に大きな功績のあつた人といふべきである。これは單に「不如歸」のみでなく、その他の諸作に於てもさういふ性質はゆきわたつて居る。

衛 復

復 衛

人物研究

▼言つて見れば、徳富氏は要するに舊代の自然詩人である。ウワヅウリスのやうな行き方をする人である。「不如歸」の英譯が賣れるか賣れないかは前から分つた話であつたのである。

▼氏には又非常な旅行癖がある。また旅行をするやうに出来た人である。敢てその藝術的に得る處の多少に拘はらず、氏の生涯には、人為に慣れぬ清らかな處がある。北方の一寒村ヤスマナ、ポリアーナに故トルストイ伯を訪ねて、歸京直ちに「順禮紀行」の著ある處などは、徒らにガツたりガラレたりして、お互ひに嬉しがつたり駄味増の上げつこをして居る現代青年には、甘い話とも思はれやうが、事實に於ては、不足は却つて言ふ方にある。他の迎合一點張の通俗小説家、通俗文士とは自ら非常に選を異にして居る。

▼藝術と言ふものが、極端な藝術愛好者又は藝術

實行者の考へて居るやうな、自己満足、獨斷の弊を以て自ら誇りとするやうな架空的なものでない限り、徳富氏の藝術的權威の落つる日はなく、また一般鑑賞の上から見た藝術の大局といふ事に就て考へらるゝ處が少くない一存在である事も明らかである。

▼唯、然しながら安逸と満足とに豊富な徳富氏の生活にはともすると悪い意味の藝術上のディレッタントイイズムがある、そしてそれが徳富氏の藝術の存在の意味でもあり、又徒らにポヒユラーならんとする創作の、時に冥想と藝術的氣分とに乏しい安閑な涙と感嘆とを買ふ事に墮して行くといふ缺點でもある。

柳川春葉

▼尾崎紅葉在世當時の柳川氏も、その後の柳川氏

もそれから現在の柳川氏もその藝術上の覺悟に於ては殆ど同じであるといひ得る程に實に十年二十年一日の如くに、甚だ感服のし兼ねる作品のみを公にして居る。氏は藝術家乃至作家といふよりもむしろ一種の才子風の茶人である。

▼假に硯友社出身の人々を以て、故の尾崎紅葉に當りては藝術的冥想を秋聲氏に、文章の妙を風葉氏に、彼の洒脱と江戸式性格の沈鬱な一面を鏡花氏に分つとすると春葉氏はさしづめ、その紅葉氏が現在生きて居たら先づ第一に棄て去るべく想像せらるゝ戯作者的の茶氣と懶惰と、迎合一遍の俗才の遺跡を亞いだと考へられる。その名のみ大にして古色を帯びながら、その作品の終始一貫して下らないのは、かつては「虚無」をも書いた三島霜川の劣悪凡庸な藝術的生活に匹敵する。それでも實生活上にはそのキレイな點に於て、巧みな點

大正文壇の十二大家

に於てまだしも春葉氏に關扇は上らう。悟つたわけでもなく、自己の力量と創作的天才を自覺したわけでもなく、文壇の中流に溺れやうとしたわけでもなく、むしろそんな事には無消息無交渉で、何れの方面から見ても藝術的價値の貧弱を極めた作物のみを以て盛んに貸本棚の親分たらんとする▼氏の最も大きな好尚は骨董いかりである。凡ての意味に於て記者には此の人の美點といふものを見出す事が出来ない、我國創作界の發展の上に非常な迷惑をかけてゐる人の一人として残念ながらこゝに柳川春葉氏を品評した。

▼謂ふ所の大家といふものは、藝術的偉人、古參、頭目(此の頭目の中には、金錢によつて名を賣つたものもあり、政略によつて一方の陣笠を集め得た不自然なものもある)の三種を出でない。中に就

て眞に藝術的偉人として敬意を拂はしむるものは實に九牛の一毛にも足りない。

▼某氏かつて言へる事あり『所謂今日の大家は十年後に於けるヒラの文章家なるべし。これ今日の大家の下れるに非ず、今日の小家中家の凡てがさまくの意味に於て同等のレヴェルに上るべけれ

ばなり。而して此のレヴェルを越ゆるもの、之を新時代の眞の大家となすべし』と、こゝに於てか、前の古参頭目の輩は當然地を拂つて消滅すべき、又は更らに髪を剃り髯を剃つて禿をせしめなほさなければならぬ運命を有つて居るのである。

(M A 生)

現代作家對照評論

鈴木三重吉と森田草平—小川未明と水野蕨舟—小山内薫と徳田秋江—中村星湖と長塚節—木下幸太郎と秋田雨雀と吉井勇—谷崎潤一郎と長田幹彦—有島生馬と志賀直哉—加能作次郎と島村民藏と田中介二—田村俊子と尾島菊子と水野仙子—與謝野晶子と長谷川時雨と野上彌生—其他特色ある新進作家

▼文壇は再び萎微と混沌とに落ちて来た。それも何故に續きつゝあるか、此の理を明らかにする、う久しい事である。かゝる文壇の寂寞と衰弱と事は、堂々たる氣宇と縦横自在の戰略とを有し、

豊麗無比なる藝術の大殿堂を背に控えたりと各自確信しつゝある、日本文壇の中心主腦の心事とつて、餘りに恥しく、餘りに安つばい結論に甘んずる事を覺悟して貫はねばならぬ。要するにそれは文壇の威權問題である。全局的の魅力問題である。然り而して此の現状は我大正の日本文壇の威威の如何に低くつまらなく鼻糞同然物のやくにた

る。見給へ、かゝる時にいつもコケおどかしの場所ふさげをするナグリ翻譯の大流行を。とはいへ文藝の歩みは必しも片時も止まらない。之を要するにき批評とよき解釋とよき暗示が掲げられなからである。ある原因によつて今の文壇は甚だ不信用な立場に居る。よくその大局を觀望しその中核を見定め、よく之を包括的な暗示に上せて教を垂れ、指し示すものがない。文壇はそれ自らの努力に於て、而して周囲の刺戟に於て、知らず知らずの間、眠つて居たのである。愚劣極まれる低級雜誌、深い思慮の道に動かうとして迷つて居る新時代の人間をいゝ馬鹿にして、公然の詐偽をしてゐる出版業者、雨後の筍、五月雨の微の如くに身儘吾儘な幽霊のやうにフラ／＼のさばり歩く、之を稱して劇界の事務所横町—といふ意味は彼の帝劇の横町あたりにウヂヤ／＼して居る、立て

は消え消えては立つ創立事務所のその如き——
 ともいふべき新劇の看板主、其實雷同と迎合に急
 なるがため自分の立場はとうの昔に潰れて居る猿
 芝居同然の連中がドサクサ立てる砂煙り、之等の
 墮落極まりなき人心の鑑賞慾に應せんがために、
 假面を被つて舌を出して、かまい手のない婆さん
 やおちやつびいをいゝ事にして、女名前を美人と
 読ませる目算の賣物にされる女流作家とやらのや
 かましき、フランク文士も男だからには「え、面
 倒くせえ、騒がしとけ。」で、こゝもとは當分、藪
 蛇の「藝術々々」が、助平となり、退屈まざれと
 なり、妙な脂下りとなり、藝術的私娼の跋扈とな
 り、氣のいゝ文壇の若武者連は、皆々一足あとに
 下つて、ポカンと開いた口がふさがらず、「何だい
 こりや。」といふ見得である。唯併しながら、こゝ
 で串藏にしてしまつては、吾輩の責任は愚かな事

眞實文壇は暗といふものだ。淋しい屈托に沈んだ
 文士諸君、樺をしめなほしたまへ、要は波瀾を捲
 き起すにある。吾輩また一臂を叩いてこゝに文壇
 の對照批評といふものを試みやうとしつゝある。
 但、謂ふ所の對照に深い意味はない。寧ろ記述に
 も便利であるし、も一つにはその方が比較的自
 然ではなからうかと思つたからの事である。
 讀者之を諒せよ。

鈴木三重吉——森田草平

▼明るい、ハデな、蒸々する感じは此の二人に共
 通なものである。之は主としてその作物から得る
 感じを概括したものであるが、實際人物の印象も
 亦之に似通つた處がある。人間の肌合といふ事か
 ら言つても似た處が多い。色彩でいふと二人共に
 赤である。前者の机には眞紅の布がかけてあつた

後者の原稿用紙には多く赤色刷のものが用ひられ
 たといふのは強ち洒落ではない。鈴木は濃艶豊潤
 な「山彦」を以て出で、森田は實際の心中を「死の
 勝利」ばりに行つて出た。たゞ前者は瘦せて居る
 筋肉の中にたえず惡あつた熱病が潜んで居るやう
 だし、後者は何處となしデブプリしたその身體を
 鐵橋の近所に置いて見たいやうな所がある。一方
 は能辯で一方はひしるゴックとして居るが、逢つ
 て見ると何となく愉快な人柄の中に、兩方とも妙
 に街氣な奇抜がりなおひやらくな、どうかすると
 鼻もちのならない感じがある。才子である事も同
 じである。

▼去つて作物の系統を見るに、その望を囑し得る
 點に於て大きな相違がある。鈴木三重吉がそのガ
 チ、くした頭を持ちこたえ得る以上、此人こそ何
 物かの比較的大きな時期を劃する人であらねばな

らぬ。實際現在の鈴木氏は正直な歩調である物に
 向つて進みつゝある形であつて、未だ決してある
 固定したものゝを擱んでは居ない。解らずに讀んで
 解らずに忘れる淺ましい我國讀書界の現状だから
 仕方もないが、今こゝで鈴木氏の相場が極つたや
 うに考へるのは大きな間違ひである。藝術家とし
 ての鈴木氏は何しても一歩々々を丹念に進まなけ
 ればならないやうに出来てゐる。記者は此自然に
 開かれて行く、當てやうとしても當てる事の出来
 ない素質を持つた鈴木氏の藝術にかなり大きな期
 待を有する。氏は非常な不器用である。思つた事
 が表へ出ないので始終モダ／＼して居る。之れが
 彼の作品に暗示としての豊富な効果を生みつけて
 居ると同時に、時に又獨りほくそ笑んで書きつけ
 たやうな可愛らしい警句に出會わす所以である。
 更にそのモダ／＼藻掻きつゞける勞作と思索状態

の中にある、新しい自らさへも之を辨ち難い貴重
な一物を望見してゐると観察する。近頃の彼は彼
の「紅い鳥」時代程に苦しんでは居ないやうに見え
る。それは自然に樂な氣分に到着したのでなくし
て、寧ろ遁れ入つて居る氣味ではなからうか。敢
て鈴木氏自身の一考を望む。それが若し事實であ
るとすれば、記者は極力その尙早に過ぎる事の甚
だしさを言はなければならぬ。

▼前者のモダ／＼に對して、森田氏の述作は明快、
器用、暢達ともいふべきものだ、従つて吾人を以
て言はしめると、その暗い影なるものも至つて散
漫淺薄な眼にしか映つて居ない。そこを潜つて行
き、こたわつて行くだけの眞面目と鈍根が足りな
い。かゝる意味に於て、彼は一種の洗練された饒
舌の士である。が、これ等はかのづから簡單なる
動機に基く批評であつて、更に熱々氏が述作上

の全局に就いて見ると、彼には敬服すべき現實的
の双眼がある。現實を描破する上に於て非常に傑
れた筆を有つて居る。之を要するに彼が近來の傾
向には、幾分すてばちな、茶氣を生じた、オツに
納まりたがるやうな風がある。

▼氣樂な氣分に陥り易い。これからが働き盛り
といふのに、妙にくだけかゝつて來たところも亦
前後兩者の共通する點である。

▼鈴木夫人は、もと日比谷平野屋支店のお通ひ
であり、森田夫人は、ちよいと鏡花氏の作品に
でも出て來さうなイキな踊のオシヨサンである。
三味線の嫌ひな人もあるまいが、特に此の日本音
樂の精神に耽溺する點に於て共通する。

▼現代の若手文士にイキな人といふものを求めた
らさしづめ此の二氏などがそれであらう。その人
柄たるや記者にとつても嬉しい處ではあるが、そ

小川未明——水野葉舟

れがその藝術を煩ひするに於てはとうも黙視する
に忍びなす。

▼小川未明といふ人は何處か小さくこせ／＼した
人である。外見こそしつかりした、神經の太さう
な人であるが、その藝術家としての態度には甚だ
落ちつきが少い、何となく際物じみた處がある。
とはいへ、同氏の昔は却々之と反對であつた。少
くも純ロマンティストとしての權威を全驅に充
たして、若やかに眼ざましい歩き方をした人だ。
然るに、嚙り散らす事子鼠の如き文壇の青二才が
擔いで來たネオロマンチズムとやらいふもの、
名を聞くやうになつてからの氏の創作には、表面
からも見透される程の不徹底と半熟とが出來て來
た。現在までの氏の創作には、決して時勢の先途

を暗示するやうな性質のものではなかつた。その新
しきが如くに見える作物の裏には、常に成心にし
て不十分な自覺しか起つて居ない理論的のある物
が潜んで居る。惡くいへば断片零碎の新報告に對
して幾分の迎合が觀察せらるゝ。小川といふ人は
幼ない、正直な、そしてある意味に於て非常に情
惻な性質を有つた人である。以上の如き勞作上の
缺點は、恐らくは内省力に於て缺くる處多きに原
由するであらうと思ふ。されば、その作物には
甚だ多くの特色があるやうで、その實小川氏自身
にとつては、餘り確實な道でないのではなからう
か。たとへば、氏自身、及び氏の周圍までが之を
氏に歸して喝采と讚美とを與へたソログーヴの影
響乃至相映説の如き、その間看過すべからざる誤
謬と八百長のあつた事を斷言したい。ソログーヴ
の藝術に對する理解を茲に主張する事は出來ない

が、ソロゲエの藝術的系統と推移とに對する小川氏の感想は恐らく可憐と噴飯に價するものではあるまいかと思ふ。好漢混沌たる事久し、首を曲つて足の脈をとるやうな事を周囲の者もちと慎むがよい。

▼やんちやらしく、氣せはしなく、詩人らしい外面を有する事に於て、水野葉舟は前者と内外相映するの觀がある。然しながら、藝術上の態度に於て、後者は遙かに前者の「新しい淺薄」を超えて居る。抜くべからざる特色といふものは後者に甚だ多くして、前者の之に劣るものあるを思ふ。自己の藝術を完成するに於て、水野氏の歩調には學ぶべき點の多い事、前項鈴木三重吉に匹儔する。繊細なる鋭感覺と洩らす處なき内觀の努力に於ても、後者は遙かに前者に勝る。如上の意味に於て、未明の藝術は輪廓的であり、あら組みであり、悪い

意味の思想的であり、葉舟氏の藝術は細かく刻みつけられて行く、織物のやうな處がある。前者は布置に墮し易く、後者は斷片に墮し易い。而して前者の表出する氣分は直ちに作者の特色であり、後者の表出する描寫には一々深くメリ込んで居る内省の價値が光つて居る。

▼小川氏は、朽ち果てた大きな材木を想像せしめ、水野氏はや艶かな薄い薔薇色の布片を想像させる。未明は大の移轉好きであるといふ。葉舟の「怪談」通は有名なものである。二者各二氏の現在と未來の進路とを表象するもの、やうに考へられて面白。葉舟の周圍には何時も何かしらの花が咲いてゐる。未明の軒には何時も淋しい風の音がきてゐる。又江戸子と北國人との相違である。

小山内薫—徳田秋江

▼小山内は強い人である。徳田は弱い人である。小山内は濁つて居る。濁つたまゝで奮闘して行く人である。徳田は濁りに堪えない人だ。キレイに世渡りをして見たい人だ。小山内はドン／＼歩いて行く。秋江は常に左視右顧執著しつゝ歩いて行く。

▼洋行前の小山内氏は絹布の紋服姿であつたが、それが非常に似合はなかつたと思ふ。小山内は絹布の人ではない、木綿緋の人である。之に反して徳田に木綿物を著せたら屑屋のやうに見えるだらう。小山内の顔も徳田の顔も一樣に凸凹して居る。身體も一樣にヒヨロ／＼して居る。耽溺家、穴つぱいりの頭目としても二者比較して居る。今はお留守の生田葵氏と共に、淺草の六區には知己の多い方である。

▼小山内の藝術、徳田の藝術、共に未だ特定の歩

現代作家對照評論

中村屋湖—長塚節

調を示して居ない。但、小山内の筆致のスツキリと細く光るに反して、徳田のには物のわるい薄出の銚仙のやうな處がある。小山内は自由劇場の經營に急しい人であるが、際さへあれば持ち合せの材料を片はしから片付けて行く。徳田又の姓を近松氏といふ、黙つて門左衛門氏から借用したものだ。小山内氏にはうんと金を有たせて遊ばせて置きたい。秋江氏には相當に氣樂な境遇を與へたくもあるし、もつと／＼貧乏に苦しんで貰ひたくもある。

▼前者には翻譯「決闘」(チエホッフ)があり、後者には翻譯「生ひ立ちの記」(トルストイ)がある。共になまなか大家の提供する骨壺にまつる事數等である。

▼話し振りなら思索なら筆致なら生活なら、中村といふ人は甚だねつちりくした人である。嘗て早稲田派の批評家某は「中村君はダルヘッドである。」と言つた。ダルヘッドであるかもしれない。然しダルヘッドであるが爲めに某氏のやうなとりとまりのない八方美人式な無中心な頭ではない。記者はまた嘗て、中村氏との對談中に不圖「此人に怪談をやらしたらうまからう」と思つた。實際氏の談話はその意味よりも様子あひで、ズシリズシリと相手の胸に入つて来るやうな處がある。黒い顔、どこか秋聲氏に似た淋しい顔、その底に光りのある顔、何處から見ても甲州出身のお百姓である。落著いた人である。文壇の仕事に、折々そのあまり豊富でない小才をきかして、飛んでもないヨタをやる事のある度びにヒヤ／＼させる。忙しい中に投げ込んで創作の批評でもやらせたら實

際ミジメで、滅茶である。「小年行」時代を振り返ると氏の創作力は勞れたといはれる。批評家前田晁も同じ甲州出身であるが、二人共非常な苦學をした人だ。併し中村は前田に較べても却々勞れた裏へたりする人ではない。例のねつちりく何處までも進む人だと思ふ。尤も大の石部金吉で、結婚するまでに藤澤とやらで一度青樓の階子を踏んだきりといふのだから、或は他の某々に較べると、解け出すべき性格や特色のコダワツて居るやうな處があるのかもしれぬ。兎に角餘り光つて見せない人だ。

▼長塚も亦純然たる野人である。元來故伊藤左千夫の根岸短歌會に屬した人で、此の派には妙に一種の硬骨漢が多い。死んだ左千夫氏を初め、アラ、ギ同人にはその藝術にも人物にも、原始的な性質かさもなければひどく俗悪な性質かに傾いた人

間が多い。長塚氏などは此前者に屬し、後者には同會の末輩歌人どもに殆ど鼻持ちのならぬ連中がある。「土」——それが同氏の唯一の創作である。そして一躍自然派の作家とならしめた動機である。前の中村氏に較べると此の「土」に描かれた自然乃至人物、思想、文章共に堅實無比な少しもルーズな處のない立派な筆致を現はして居る。二氏が作物の色彩は、甚だかけはなれて居る。中村の作物には沈んだジミな中にも何處か中歐風の光澤がある。オツに氣取た處がある。長塚にはそれがまるでない。健康な心持と、濁りのない眼を以て一つ一つの石を積み上げて行くやうな處がある。若しそれ常住中村氏につきまとい一種の放心は、細心緻密な長塚氏の態度に比して、尙多の思索的な良質を有する事を證明するものであると思ふ。

木下空太郎——秋田雨雀
——吉井勇

▼新しい時代が來てから生れた戯曲家、新劇勃興の先驅ともなり、おのづから頭株とも數へられる三人である。その癖大して新しいとも考へられぬ三人である。が、中に就いて最も藝術家らしくそして最も創造的努力に忠實なるものはどうしても倭人秋田雨雀である。次に木下、吉井はさういふ意味では最も劣つて居やう。秋田はナチュラリズムから忠實に發足した作家で、比較的通俗的な吉井、無理から特色を作つて行くやうに見える木下の二人は共に一種のデイレッタツタンツである。尤も此の無理から特色を際立たせやうとしたり、自然と奇警を銜やうになる點に於ては三者共通の點がある。殊に秋田が人生觀的のデイレッタンテイ

ズムを唱へる風のあるのを數へて、此の三人を専ら戯曲家の名目に統一し得る事は面白い現象である。

▼その「地下一尺集」に見ても、その人物に對して見ても、木下にはデイレッタントの香が最も高い。言はゞ凝り性である。醫學專攻でありながら、藝術方面にはかなり博識な、その上畫もやり詩も作り小説脚本何でも御座れといふところ、一寸小鷗外の趣がある。精力の強さうな、ぬつとした男で、そして近代の頹廢的な處には乏しい。一寸話をするにも妙に經書や何かの古い、人の餘り知らない詞を遣ひたがったり、兎角人の意表に出る事をしてたのしみとするやうな處もある。「和泉屋染物店」を出しておいてそれから「ドオパンの首」を出して見せる人だ。本當の名を太田正雄といふ。▼それに較べると秋田はかかしの程に生面眞目な

人である。清貧にも甘んじ、その若さを失ふまいとする努力も強く、眞面目に苦しみ眞面目に考へて行く人である。ある人は「秋田君は才人だ」といひ、ある人は「超越してゐるね」といふ。兩方が當つて居る。前と後の二人が人並以上にノツボウなるに反し、秋田は恐らく五尺に足るまい。そして何處か落ちつかぬ外面を有する。雨の雀とはよくその外形を表象するものだ。秋田の瞳は普通の日本人よりも色が薄い。全體の容貌にエキゾテイツクな處を見る。友誼に熱い正直な好人物であるため、ともすると八方美人視される事がある。同君は古くからの島崎藤村の門弟で、又最も師のよく感化を受けた人である。藝術座の一幹部員として働き得る人ではなく、寧ろ單獨に一步々々を進むべき人だ。静かな處に置くべき人で、決して塵務の中に効果を收むべき人でない。

▼吉井は文壇の若年寄である。従つて他の青年作家の如く徒らに高踏的でない、俗衆相手を觀念した處はその凡ての作品に表はれて居る。如才のないうそして濫滯のない文士だ。又、格別の思惑も拘泥もなく、氣樂に述作をして居る處は、流石米飯の有難味を知らぬ伯爵令息だからであらう。その名の古く廣いに比して、その藝術的能力は決して世間の一部がモチ上げる程に充實して居ない。或はそこに特別な、口に出してはならぬ理由もあるのであらう。何の苦もなく荒んでしまつた筆、持ち馴れた金煙管をチチリと見せたやうなその藝術すくも現在の吉井勇は單に一個の賑やかして、貢獻といふ貢獻も、感銘といふ感銘もない。更に特別に同君に囑しやうといふものもない。要するに幸福な一蕩兒であつて、飲む買を書くの三道樂、苦しければセンチメンタリストとなり、面白ければ

享樂主義者、唯美主義者、又は調子もの、ロマンティシストとなる人である。ただはりのない明るい屈託の少い非現實的な詩人である。

谷崎潤一郎—長田幹彦

▼記者が最も谷崎氏に敬服したのは第二新思潮の初號(?)に發表された「二つの時計に關する出来事」といふ散文であつた。その頃現はれた「常盤」や「象」では單に谷崎が大體どういふ歩き方をする人であるかを暗示されたに過ぎない。「颯風」「悪魔」「秘密」「戀を知る頃」等に到つては寧ろ一種の好奇心を押へられた事と、それから文章の如何にも絢爛濃厚な事を觀取したに過ぎぬ。とはいへ、「少年」期間の二作は恐らく今後の谷崎にさへも得難いものではあるまいかと思ふ。一體谷崎といふ人は非常な遲筆で、續きを續きをと差迫つて筆

を執れば卒倒でもしやうといふ程で、已にその作物の性質と谷崎の全境遇から言つても雑誌をめて自ら満足し得る程のものも書けやうわけがないお祭騒ぎの恐ろしさがつくづく感じられる。さて前述の「二つの時計に關する出来事」に敬服した記者は、自ら深くその感銘を内省して見ると、そこには谷崎を通じて觀察されたユーモアと、その徹底的な確實な努力、といふよりも強い筆力の光りがある。記者は此の散文中に散見するユーモアによつて谷崎の天才を見得たと信ずる。果して此の時に得た洞察は由來發表さるゝ同君の創作の凡てに流れる特色と價値の表面的な原動力である事を確かめ得たのである。此點を敢て谷崎及び世の慧眼なる批評家諸君の前に提言したい。また、記者は谷崎に於て特にその多作を諫止したいと思ふ者である。谷崎の持つて居るものは眞に、何の

交り氣もない、新しい貴いものである。だけにその外圍の勢力によつて誤られた後を想像するのは甚だ痛ましい事である。「戀を知る頃」以來暫く谷崎の勞作に接しない。記者はいつまでもある喜ばしい期待を以てジツと氣永く君が會心の作に接するの日を待つ者である。

▼「スバル」に發表された「落」によつて長田幹彦氏の「零落」は中央公論の爲めに書かれた。「落」によつて記者は充分同君の力量を認める事が出来た。長田の天才といふものをば未だに考へられないに拘はらず、書ける人だといふ程の意味に於て記者は同君を認めた、が、同時に、「落」を書き「零落」を書く事が、材料の點からも文章の點からも才分の點からも、同君の全體ではなからうかと思つた。さう／＼先きのある人とは思はれなかつた。爾來同君の推移は幾分此の觀察を證明した。

有島生馬——志賀直哉

▼深味に乏しいといふ事は先づ第一に争はれぬ。更に、半熟な叙情詩的傾向を、強ひて半熟に押へつけつゝ、彼が近頃の勞作はなされて居るやうである。長田は今日に至るまでのその耽溺生活と、放浪的な心持を重ねて来た身柄として、甚だしく閑却された一面のある事に自ら注意を拂はねばならない。現在長田氏の思索は、嫌かれた人間の死骸のやうにばら／＼である。滅茶苦茶である。平たく言へば長田氏は餘りに早く世間へ出過ぎた。本人もさぞ苦しい事であらう。記者さへもハラ／＼して居る一人なのである。

▼有島は畫家としても、文章家としても甚だ悔り難い才分を有する人で、畫としてはたゞに同君歸朝早々の展覽會で見たのだと記憶する「宿屋の裏」

現代作家對照評論

小説としては嘗て「自樺」に載せられた「獸人」、此の二つは幾多ある同君の勞作の中で忘れる事の出来ない感銘を與へられた。有島生馬に對して非難すべき何物をも有しない事は、あながち記者の寡聞ばかりではあるまい。畫にしても小説にしても何れも殆ど隙らしい隙を發見する事の出来ないばかりでなく、同君が藝術の全局にはまた言ふべからざる豊潤があつて、飽くまで人をひきつけると同時に、鑑賞する者をして快く何物かを收獲させずには置かぬ。思はず人をしてその藝術に傾倒せしめる。吾が藝術界にとつて有島君は、大切にしなければならぬ人の一人であると思ふ。

▼志賀直哉は「濁つた頭」によつて記憶される。「濁つた頭」によつて吾人は志賀の創作的實力が、社會的の意味で、今や處女作時代に近きつゝある事を感ずる。「濁つた頭」によつて、危く志賀君は世

間といふ芥箱へ投げ込まれさうになつたが、同君の文壇に對する態度の今日あるを得た事は、それが自然でも故意でも、記者は切に同君の爲めに喜ばざるを得ない。確實な描寫と、勤勉な理解と、沈著にして深味ある内省とは、小篇濁つた頭によつて遺憾なく記者を首肯せしめた。たゞそこが大切な處である。實にあふない大切な處である。

記者は今も尙暗夜に寶玉を捧げて行く人を見るやうに同君の今後の行路を案じ續けやうとする者である。丁度、揮はうとする一振の劍を火にかけ湯につけて鍛へ上げたところで、それでその作の價値は充分に分るのであるが、更に之を一個の劍として使用するまでには尙數々の隠れた仕事があるばかりでなく、鍛へ上げ研ぎ上げる事と、之を揮つて斷々許多の役立ちをさせる事とは自ら別問題であることを、志賀の爲めに、はた志賀を觀望

する批評家諸君に記憶してもらひたい。兎角日本の文壇はさながら彼の觀光團といふものゝ如くに解りもせず唯物見高い人の多いところであるから。

加藤作次郎——島村民藏
——田中介二

▼さういふ事の有るべからざる作家にも、ある一つの黨派的な臭味があるとしたら、此三人はさしづめ最も早稲田臭味を有つた人達であらう。臭味の認められる以上、その臭味はその人達によつて善悪何れかに應用されて居るに相違ない。
▼三者就中最も筆の立つ人は加藤である。加藤と島村とは勞作上の態度に大差がない。勞作上の努力と効果とに於て加藤は遙かに島村の上にあるそれ位の程度で島村の勞作には加藤よりも尖つた

處を認める。さういふ氣味を除けば、三君は揃ひ々揃つての幻滅家である。忌憚なく言へば以上三君の藝術から吾人は得た所もなければ失つた所もない。何れも鼠色の力の弱い無變哲な中に島村のみ僅かの水色を認める。水色とは此場合生き生きとした心持を現はすといつていい。三君共に相當の経過を有する割合に、甚だ未成品の匂ひが高い。どうもまだ自己本來の面目ではなさうに推測される事が多い。

▼田中介二と言ふ人は嘗て某新聞の懸賞小説に當選して一千圓の賞金を得た人である。記者はその小説を讀んで居ないからその如何に傑作であるかは知らないが、その後發表された二三種の短篇については見て見ると、それが決して云爲するに足る程のものでない事がわかる。思ふに田中君は生活方面には至つて堅實なセコイ人であるが、藝術方面に

はむしろやけな怠慢な序にやつて居るやうな人ではなからうか。折々早文誌上に見る同君の批評は同君の價値を暴落させるとも決して買ひ被らせる代物ではない。鞏縮、噴飯を要求する樂屋落、見當違ひ、粗雑は到る處にある。非常に感情の單調な人か、頭の悪い人か、中心點のしつかりせぬ人か、世わたりのうま過ぎる人か、何れにしても、早稲田派の一幹部として、藝術座の舞臺にまで立たうといふ程の人として吾人は甚だ此の経過を惜む。

田村とし子——尾島きく子
——水野仙子

▼現今女流作家中、さまざまの意味に於て鼎立せしめるに都合のいいのは此三女史である。そして各々異つた領分を有つて居る。色彩でいふと、田

村女史は桃色、尾島女史はうすむらさき、水野女史は煤んだ緑である。田村女史の特長はセンジュアルにして強いデリカシーに富み、水野女史、尾島女史は共に比較的的心理描寫に秀で、居る。新しい女といふやうな意味でなしに、人間として新しいのは矢張り田村女史であらう。他の二女史にはその觀察も描寫も文章も、前者に比してずつと古い處がある。就中、尾島女史は全く舊型の女である。而も此の最も舊型な尾島女史が最も堅實な道を進みつゝあるやうに見えるのは面白い。思想

——思索力といふ點から言へば何といつても田村女史で、殊に女史の特長が特長であるだけに、その言ふ所が如何にも懇切適確で、最も鋭いメッセルは此の人の手にあると思ふ。他の二女史はその創作力に於てこそ時に田村女史を超越する事もあるが此點では殆ど比較にならない。之から先きとい

ふ事も従つて餘り考へられない。文章も古い。而して田村水野兩女史は時に、その才にまかせてナグるといふ缺點があり、兩者とも近來著しく紅頬の彈力を失つて來た。田村女史は精力に富み、尾島女史は努力家である。就中、女らしい女は尾島女史であらう。而も三者共に、所謂新しい女のやうなガツ／＼した淺薄な自覺に止まらず、よく女性の本來と自家に包藏する愛の性質を知つて居る。此點殊に記者をして敬意を表せしむる處である。

與謝野晶子——長谷川時雨
——野上彌生

▼晶子女史も時雨女史も女流作家としての最も古株で、同時に十年一日の如く半分の虛名によつて生きて居る事も事實だ。唯然しながら長谷川女

史を除いては、何れも、無理にも根氣の強い處には感服する。三者の中最も年長者も晶子女史だが最も性來が女性らしくない——といふよりも底力のあるのも晶子女史である。又藝術的の良質を有つて居る事も三者の中晶子女史を以て最とする。而してその筆致に豊麗と潤澤と深味を有つて居るのは野上女史である。之等の點に於て、長谷川女史最も劣等の地位にある。晶子女史と彌生女史とはその藝術の趣味に於て大差があり、晶子女史と時雨女史では又甚だ大差があり、全體の毛色も異つて居る。

虚名に對する態度に於てどうしても女子の實力はエキザジエレートされて居る場合が多い。晶子女史の貞淑、時雨女史の浮名、それ／＼相當の毀譽褒貶もある事だが、それは後日を期して統一する事にする。

特色ある新進作家

▼「白樺」には尙、武者小路あり有島武郎がある。一はその徹底的な人格に生き、一はその筆力の非凡な暢達によつて知られる。而も武者君の人生觀的に甚だ堅固な歩調を有するに反してその藝術には未だ尙さはらば落ちなんとする不安定のあるやうに、有島君の藝術は今が最も自然の湧出の盛んな時代なるに拘はらず、その藝術的態度には未だシツカリとした肯定を得て居ないと觀察する。唯二者共に以上のやうな意味に於いて「白樺」の二寶

である。中村古峽君と平出修君とは共にある錬熟を以て近く文壇に現はれて来た。そして前者の圓熟に比べて後者の中に伏在するある藝術的氣魄を認めないわけに行かぬ。多作によつて名を得やうとする若輩どもに對して、此の二君の出現は甚だ人意を強うするに足るものだ。白石實三君、江馬修君は、さきに説く水野仙子女史と共に田山花袋氏の直參である。殊に白石、江馬二君の藝術は之を證する。就中、さういふ側に立つて見れば、白石君の未來にはむしろ意外な効果を擧げ得るかとも思ふ。少しくコヂれた形をも認めると同時に、ある新運動の一人として同君を豫想せぬわけに行かぬ。江馬君にはたゞその早くあくぬけのされた巧妙な筆づかひを認める外、尙ほ遠い未來を觀望したい。原田讓二君、秋庭俊彦君、仲木貞一君は共に稻門の若武者であつて、小説に於ける原田、

秋庭兩君はその粗雑な藝術と色澤に乏しい筆致に於て共に藝術家らしからざる藝術家であり、脚本に於ける仲木君は前述島村民藏君に匹敵して、近頃めき／＼腕を上げて来た。久保田萬太郎君、水上瀧太郎君、後藤末雄君、五百歌左二郎君の四君はその都會的藝術に特殊の力と眼を有する點で共通する。就中後藤君の藝術にはさういふ意味の勤勉と思索とそれから充分の新傾向を看取し得る。「下町」葉巻等を記憶する。四者の中最もコケお

とかしの淺薄な新味に乏しいものは久保田君の藝術であらう。他の二君は善惡兩様の意味で何れもこれ等の次位にある。更に下つては國枝史郎君、倉田啓明君、谷崎精二君、福永挽歌君、相馬泰三君、國枝莞二君、細田民樹君、水島爾保布君、之等の數氏はその顔の新古に拘はらず、その發表した藝術に於て、相當の特色を認める事が出来、同

時にその特色に基いて、將來の發展と効果を期待し得る、心強い新進作家諸君である。以上の諸君の特色と努力とによつて、一日も早く大正文壇の眞曙光を望み、その新運動をして例の尻のやうな終り方をせしめず、遠く十年十五年の後に於け

る藝術的大建築の基礎を完うせしめたいと思ふ。▽粗野なる長廣舌、無遠慮なる論評列ね來つて尙甚だ盡さず、而も紙數の限定を顧み、茲に問題の文士諸賢に謝意を表しつゝ、作家對照評論のチビ筆を擱く。(巽元哲人)

飛行界の人物

徳川大尉—岡、阪元中尉—日野少佐—遠野清武男—奈良原三次—白戸榮次郎
磯部鐵吉—伊賀氏廣男—都築鐵三郎—山田猪三郎—武石浩破

▼國の何れを問はず社會の所在階級を通じて、社交界の花形とし流行界の寵兒として、萬人の羨望を擅にして居るのは飛行家である。實際、佛、

獨、露、英、米の各國の紳士淑女と呼ばれる者に於て、飛行俱樂部の徽章を有せざる者は、社交界の場裡に出入の權利無きものとまで思惟されて居る。

▼斯くの如く一世の榮譽を雙肩に擔ひ空界を縱橫

に翹翔する飛行家の生活も、亦男子たる可き者の精華である。吾人は茲に『飛行界の人物』の題の下に、邦人飛行家を論評しよう。

▼本邦飛行界の大立物は、何と云つても徳川大尉を随一とする。大尉は過般濃尾三の野に於て舉行されたる大正初度の大演習に於いて、岡、坂元兩中尉以下重松、眞壁、武田の各飛行將校を率ゐて空中偵察に或は爆彈投下の新記録を作成して、此の世界の新武器たる飛行機の功果に對して著々として成功の報を齎しつゝあるは、一に徳川大尉の實と云つても過賞ではない、大尉は清水徳川の名門の出にして、元伯爵徳川篤守伯の嫡男である先年佛國に留學して日野少佐(當時大尉)と共に本邦最初の飛行家として飛行術を習得した。歸朝後直に氣球隊附を命ぜられ同時に研究會委員に上げられたのである。

二

▼日野少佐は徳川大尉と共に、本邦飛行界の元勳である。少佐は先年研究會委員を免せられ福岡隊附となり、目下大隊長として同隊に勤務してゐる。

▼日野少佐は性傲膽にして冒險を好み、飛行家として實に理想的人物たる事は、世人の均しく稱揚する如く、其の大膽勇壯なる飛行振は代々木練兵場及び所澤飛行場に於いて、屢々試みられた處である、然るに、少佐が突如、研究會委員を被免になつた事は當時一面から云へば日野大尉が少佐に昇進したのだから祝福す可きに拘らず、世人は均しく少佐に同情を寄せた。而して氣球研究會理事井上少將及び徳永氣球隊長等の間に豫て日野大尉排斥の運動があつた、大尉の昇進は事實に於いて

▼大尉が本邦飛行界に貢獻したる偉勳は已に世人の膾炙する處であるが、曩に『徳川式飛行機』を完成し、純日本産の材料のみを使用し理想的模倣飛行機として、現に大演習に参加して三軍を威服せしめたるものは其一である。又近くは故木村、徳田兩中尉を初め、岡、坂本、武田の各飛行將校を養成して、本邦最初の飛行得業生を教養したるは一に大尉の功蹟である。而も大尉や身名門の出に似ず、濃厚篤實にして學術亦深遠、練習將校に接するや慈母の愛兒を哺育するが如く懇切を極め而も嚴格にして職に徹塵の私無きは、人物として實に帝國軍人の好模範である。聞く處に據れば、大尉の復讐は已に既に内定あり、何時にても許可す可きも、特に大尉の意志の存する處に依り、其儘になり居るものなど、云ふは、愈々徳川大尉の人物名聲を高くする所以である。

左遷である、否大尉に取つては或意味に於ける致命傷であつた。

▼勿論、日野少佐としての、人格上、或は非難す可き點があつたかも知れない、併し夫は單に私行上借借の問題であつて、而も其金たるや、當時大尉が苦心憊償して『日野式單葉』を製作し、尙ほ獨特の考案に基づく『日野式發動機』の發明とに費した金である。實際、飛行機の發明は兎も角、本邦に於いて發動機の製作を企てたのは日野式が嚆矢である。(其後伊賀男爵が大坂島津製作所に依頼して製作したが、之は全然失敗に歸して了つた。)然らば、何が爲に井上少將、徳永中佐等が故意に日野大尉排斥を謀つたかと云ふに、其處に大なる策謀が計劃されて居た。井上少將は由來工兵課の出身で現に交通兵旅團長である。又徳永中佐は工兵課に屬する氣球隊長である。即ち氣球研究會

の實權は此の兩氏に掌握されて居る、云換へれば研究會なるものは井上少將、徳永中佐以下郡山少佐、石本大尉、徳川大尉に至る迄武官の殆ど全部が工兵課出身である。然るに日野大尉一人が歩兵課であると思ふ事のみで、問題は容易に解釋されると思ふ。

三

日野大尉が研究會を被免となつて單獨で『日野式單葉飛行機』の製作に従ひ、青山練兵場で飛行試験を行つた當時、日野大尉と徳川大尉との間に眞の友情は斯く有度きものであると、感激に堪えない逸事が残つて居る。夫は『日野式發動機』が愈々出來して、第一日の試験を行ふ日の朝であつた、夥多の群集は之を聞傳へて青山練兵場に集つて、十重にも二十重にも飛行機を取圍んだ、處が

此の群集の環視を避けて、二丁餘も距つた叢の中に佇んで、而も常に飛行機に深い注意を怠らぬ霜降春廣服の青年があつた。

此の洋服の青年こそ、飛行界の花形徳川大尉其人であつた。實は今日しも共に佛蘭西で飛行術を習つた友人日野大尉が初めて『日野式』飛行機の試験を行ふと云ふので、わざ／＼人眼を偲ぶ扮装で、何如かして友人の此の晴の舞臺に大成功をさして遣り度い。若し萬一の事でもあり、又は助手の手を要する事があれば、飛んで出で個人として日野大尉を扶けて遣らうと云ふので、心配の餘り今日しも未明から青山練兵場に姿を現はしたのであつた。

斯う云ふと聊か不審の様であるが、實は當時徳川大尉が日野大尉の仕事を扶けたなど、云ふ事が若も研究會の耳に入らうものなら、夫こそ徳川大

尉は何麼難問題に遭遇するかも知れない關係であつた。併し日野大尉としては、今や研究會を退いた身の、今回の飛行試験は一方から云ふと大尉の名譽恢復である。此場合徳川大尉も研究會の一員として日野大尉の事業を扶助する事は絶対に不可能である。と云つて共に異郷に命を的にして飛行術を研究した友人が死活の場合に處して、之を等閑に觀過する事は、友情に厚い徳川大尉として到底堪え得ない處である、即ち萬一他手が入用の場合があつたら、單に友人として日野大尉に一臂の力を借さう、夫までは人眼を忍んで見て居ようと思つて、借こそ徳川大尉は斯かる扮装で未明から練兵場に來たのであつた。

此事のあつたのを、果して日野大尉は知つて居るだらうか。恐らくは少佐になつた後も未だ知らないと思ふ。爾來日野少佐福岡に赴任して後も、

現に飛行界の問題の中心となつて居るのは滋野清武男である。

四

男は故滋野陸軍中將の嫡男で、夙に幼年校に入り中途退學して音楽學校を卒へし事は人の知る處である。其後志を翻して佛蘭西に渡り當代の大飛行家ガブリエル・ボアザンに師事し飛行術を研究し且同地に於いて滋野式飛行機『わか鳥』號を建造して歸朝し、後直に氣球隊に招聘され御用掛を拜命して今日に至つたのである。

由來、本邦飛行界に名門出の人が多い。徳川大尉を初め監督將校として各飛行將校監督の任に當れる石本大尉は故陸軍大臣石本新六男の近親であ

つて、剛膽なる飛行振を以つて飛行將校中に、猛烈中尉の綽名を傳へられて異彩を放つて居る岡中尉は、騎兵課の出身にして元の陸軍次官岡中將の縁者であること杯は餘り世人の知らない處である

▼滋野男も歸朝に際しては男爵飛行家とか飛行界の新星と云つて新聞紙が盛に書立て、實に素晴らしい勢であつた。元來『わか鳥』號は男の死んだ戀女房『わか』の名を其儘飛行機に命名したもので當時の新聞紙は斯麼事まで筆を揃えて有難がつて書いた。斯くて男は歸朝するや其儘陸軍の研究會御用掛として、間も無く所澤に家屋まで新築して棲む様になつた。爾來男は教官助手として練習將校に對しては自動車の一課を受持として講義する事となり、以て今日に至つたのである。

▼處が、今秋來突如滋野男は病氣と稱して休暇を乞ひ有馬温泉に遊び、次いで一端歸隊せしも去月

五日に至つて神經衰弱の故を以て三箇月の休暇を届出で、一時姿を絶つた。然るに病氣は表面の理由にて、男は之迄研究會の處置に對し憤焉たらざる處あり、夫が爲に近く御用掛を辭し民間飛行家として活躍する計畫なりと傳へられた。而して本月に至つて不意に大阪に於いて關西飛行俱樂部の設立を發表し、義捐金十五萬圓を募集し水上飛行機五臺を購入する計畫あるを陳べた。

▼滋野男が研究會を去るに至つた裏面には、複雑した事實が潜んで居る。實際近時に至つて滋野男は其歸朝當時の係無く『わか鳥』號も僅に一回の飛行を行ひたるのみにて大故障を生じ、爾來一向に雄飛を試みず、徒らに格納庫裡に惰眠を貪るのみとなつた。茲に於いてか長澤、澤田兩中尉以下各飛行將校は『トバズ式若鳥』の異名をさへ附して、漸く男の技倆を疑ひ初めた。然るに其後教

今度の活躍は果して如何であらうか。

五

官德川大尉と滋野男との間に、職工の仕事に關連して、一日格納庫内に於いて發動機に就いて德川大尉と滋野男とが激論をした事があつた、爾來岡坂本、武田の各飛行將校を初め常に大尉と私淑せる練習將校は勿論職工に至る迄、男に接近する事を避くる様になつた。

▼其後岡坂本、武田三飛行將校の卒業式に際して井上少將より『わか鳥』の飛揚を迫られて果さず、尙從來男が第二期練習將校に對して講義して居た自動車の學課及び操縦術も、突如德川大尉が代りて兼擔する事となり、或は男が近く一萬五千圓にて研究會に賣却せし『若鳥』號の發動機を取外して德川式第四號に据附けて破壊するなどの事あり、男も遂に憤慨に堪え兼ねて、田中館博士に鬱憤を漏らしたる事さへあつた。

▼斯の如くして、滋野男は遂に研究會を去つた。

▼次に、民間飛行家としては彼の『鳳』號の發明者奈良原氏が、獨り頭角を擡んで大活躍を示して居る。

▼奈良原氏は奈良原男の嫡子で、嘗ては海軍に入つて大技士の片書のある名士の出である。氏が飛行家としての經歷は已に世人の知る如くで、本邦に於いて飛行機に發動機を附して實地飛揚を試した最初の飛行家で、其効績は實に德川、日野兩大尉と共に、本邦飛行史の巻頭を飾る可き勇士である

▼同時に氏は亦、海軍出の飛行家として第一人者で、一時研究會委員として飛行機材料購入に關し兎角の風評を立てられ、遂に日野大尉と同様委員を被免となつたが、爾來奈良原氏は専心民間飛行

界の發達を企て以つて今日の名聲を博するに至つたので、先年青山練兵場に於いては、今上陛下が未だ皇太子の時、親しく喜覽飛行を賞はせられたに面目を施し、其後は九州、四國、中國より遠くは朝鮮に渡り京城、平壤等に於いて何れも飛行大會を開催して、一般人民の飛行機に對する智識の開發に功獻したのは實に尠少では無い。近くは又新に七十馬力ノーム式發動機を購入して北海道より仙臺等に赴き大飛躍を試みたこと云ふ事は、寂寞たる我が民間飛行界に在つて實に祝福す可きである。

▼併し、此の奈良原氏の民間飛行界の事業に對して、同氏の隻腕として『鳳』號の操縦者白戸榮次郎氏のあるを忘れる事は出来ない。白戸氏は元氣球隊の下士であつて、在隊當時より所澤飛行場に於いて徳川大尉の部下として飛行機及び發動機に關する。

る智識を習得し、奈良原氏の研究会を辭するに次いで自分も除隊になり、徳川大尉の斡旋に據り轉じて奈良原氏に屬し、共に『鳳』號の改善其他に盡力し、其間自ら飛行機の操縦術を習得したものであつて、此點に於いて白戸氏は亦岡、坂元、武田の三飛行將校と先立つて、實に本邦に於いて飛行機操縦術を習得した飛行家の嚆矢である。

▼斯の如く『鳳』號今日の名聲を博するに至つた一半は操縦者白戸氏の熟練せる飛行術の扶助する處大であるが、『鳳』號其物が飛行機として本邦最初の發明に拘らず、優秀なる飛行機であつたからで、實際『鳳』號の發明當時に於いては、彼の復業式にして牽引裝置の飛行機は世界に多く類を見ざる處で、又奈良原氏の考案に成れる『自動出發裝置』の發明の如きも、大に誇とす可き處である。

▼世人往々にして、奈良原氏の私生活上に關し或は其家庭の事に迄對して云々するを耳にするも、吾人は飛行家としての奈良原氏の事業功績に對し何等の名譽を汚損するものでない。否奈良原氏の嚴父の重態を報せられる今日に於いて、吾人は此の偉大なる不肖兒に對して同情感慨に堪えざるを附記して、氏が前途の大光明を認むるものである。

六

▼民間飛行家として奈良原氏と對照して一方の大立物たるは、目下獨逸伯林に滯留して飛行術を練習中なる機關少佐磯部鐵部吉氏である。

▼磯部氏は實に努力の人である、奮闘家である。氏が曩に『日本航空協會』の設立を計り其主意を發表した當時には、主唱者中には伊賀男、都築氏等民間飛行家の面々相集つて協力會の主旨を貫

徹せん事を期し乍ら、實地に著手して見ると意外に事業の困難なるを知るや、磯部氏を除く他の總ての主唱者何時の間にか影の如くに姿を消して了つた。此間磯部氏は孤り刻苦勉勵し奮闘は日も足らざる如く努力し、他の友人等の盟に背くをも顧みず往く者は往かしめよ、吾一人たりとも初一念を貫徹せざんば歇まずとして、遂に『日本航空協會』の基礎を完成し、次いで一方『帝國飛行協會』と合併するに及び、以つて今日の大成功を見るに至つたのである。

▼由來、先進諸國の飛行界發達の經路を案するに飛行機其物の發明が已に民間に起り、其の進歩發達も民間の獎勵隆盛となつて次いで陸海軍の發達を見るに至つたのである。然るに本邦に於いては最初陸軍より起り海軍に及び最後に民間の問題となつたのである。處が國情を異にした日本では、

此の民間飛行奨励は實に困難なる事業で、外國の如く飛行俱樂部の徽章の無い者は交際場裡に出入する資格が無いとか、一隻百萬圓もするツエツペリン飛行船を五隻も破壊して、尙義捐金を募集すると云ふ獨逸杯と比較して問題にならない。磯部氏は斯かる困難を突破し、一時は飛行家としての磯部氏の名を世間では殆ど忘れ去られたかの觀が在つたにも拘らず、全然自己を没却して事業に盡瘁した此點に於て、吾人は磯部氏の人物に大なる敬意を表し、且つ本邦飛行界の將來に大なる希望を囑する。

▼飛行家としての磯部氏は、曩に氏が佐世保軍港に在職中已に再三グライダーの試験より初め、次いで横須賀に轉ずるに及んで獨力水上飛行機の製作に従事した。氏は亦陸軍の徳川大尉、民間の奈良原氏と同様、本邦水上飛行家の第一人者たる事

を説かねばならぬ。此間氏は或は身體に負傷を受けしをも屈せず幾度か之を改造したが、事漸く成らんとした時には已に家財の大部を犠牲に供して了つた。此處に於いてか氏は飄然として志を決し遂に官職を擲つて出京し、民間飛行俱樂部設立の機を作したのである。

「帝國航空協會」は今や田中館、横田兩博士を技術審査員とし井上少將、井上工兵課長等の陸軍飛行界の主權者を發起人中に數へ、民間富豪より義捐せる金圓も已に十數萬圓に達し、磯部氏は現に田中館、横田兩博士の推薦に依つて獨逸に赴き、最新式單葉飛行機ルムブラー式タウベ號二臺を購入の目的を持ち、尙之が實地操縦術練習中であるが、氏は既に單獨飛行の過程も終え近く帝國々際飛行協會の卒業證書を得べしと云ふ通信に接した。而して磯部氏の歸朝は來春二月の豫定にて、其



犠牲者(蛙)
マツル 里辰丈
陰曆十月行事

小川芋鏡氏作

内の飛行機一臺は已に發送濟なりと云へば、氏が歸朝の曉は本邦飛行界は實に新なる光明に接し、之より大發展を齎す一時代を劃すべきである

七

▼最後に『飛行界の人物』に忘る可らざる飛行家が二人ある。共に故人であつて一は山田猪三郎氏にして、他は武石浩波氏である。

▼本邦航空史を繕くに當つて、山田氏の偉業は其の最初の頁を飾るものであつて、飛行機飛行船が未だ今日の發達を示さない以前、即ち世界の飛行家ミツエツペリン伯が現時の名聲を博するに至らなかつた時に、我日本に一の山田猪三郎が在つた事は大に世界に誇る可き事實である。

▼實際、日本の航空機として彼の日露戰爭に参加し、難攻不落と稱して居た旅順の包圍攻撃に際し

て我軍の飛揚した、日本式掲留氣球なるものは、實に山田氏の發明になつたものにして、同時に旅順陥落の名譽の一半は此の氣球の空中偵察の效果に俟つたのは明白なる事實である。又先年支那第一革命に對して黎元洪輩下の湖北軍が飛揚した氣球も、亦山田氏の製作せしもので、其他に一隻の飛行船をも輸出したが、之實に本邦の航空機にして外國に輸出した記録の最初で、共に山田氏の名譽を飾るものである。

▼又、氏が先年來飛行船の發明建造に全力を注ぎつては品川灣頭より東京市の空を横斷して愛宕山上まで飛翔し、或は大森海岸を愕かした事は、之又航空史の新記録であつた。惜むらくは之が完成を見ず事半にして長逝した事は、共に痛惜に堪えざる處である。

▼武石浩波氏が京阪都市連絡の大飛行を完成し乍

る機を俟つものである。(完)

ら、著陸に際して悲壯の最後を遂げたる事は、木村、徳田兩中尉の犠牲と共に、本邦飛行界に大なる刺激を與へたと同一の敬意を表す可きであるが、武石氏の人物及び飛行家たるの動機に關して特に吾人は敬慕の念を深からしめたのである。

▼尙今回、新歸朝の幾原氏は武石氏の用飛行を舉行するに當つて尙追憶の感銘を新ならしめるものである。

▼吾人は『飛行界の人物』を評論するに當つて、尙海軍側の代表飛行家を物色せんとしたが、遂に此稿中に入る可き程の人物を見出す事の出来なかつたのは遺憾に堪えない事である。又現に海外に在つて大に發展しつゝある飛行家中には、高左右、阪本、鈴木氏等の諸氏があるが、之等は未だ本邦飛行界とは直接の交渉無きを以つて、遂つて歸朝後の活動發展を俟つて、更に稿を新にして評論す

樂界の名流

幸田延子—安藤幸子—ベツツオルド夫人—ウエルクマイヌテル—ドブラウキツチ—
 島崎赤太郎—橋本重子—鷗母木駒子—神戸絢子—柴田環—杉浦ちか子—本居長世—
 山井基清—窪兼雅—久野ひさ子—原田

▼さる文壇一家の言に「日本藝術界の中に就て音楽界の現状程心元ないものはない。腐敗、摩痺、迷妄、浮薄、不真面目——これ等永年の弊害は深く日本音楽界の中樞に蝕み入つて、藝術的良心のある運動、慎重なる天才の發揮、統一ある藝術としての覺悟は、その何れの方面にも見る事が出来ぬ。樂界の中樞たる東京音楽學校は、如何なる天才と雖も一度は偕らざるべからざる一權威でありながら、同時に天才の精神的經過をして邪道に陥らしむる事も甚だ數多い。眞に現代を震撼

するに足るべき音楽は尙ほ未だ開かれぬ事の久しいであらう」と。樂界の腐敗——それは如何なる寛容の立場から見ても許し難い事實である。

▼こゝに名流として一順品臚しやうとするその名流の字義には、空疎なる智巧、淺薄なる世才、唾棄すべき虚榮、治する事の出来ない放縱と無自覺とが、時代の陰影として跋扈する俗流に乗じて、うか／＼として投機を夢みる下賤醜劣なる心事、藝術を賣るの政略に汲々たる高等幫間的態度等となつて、その一部の階級に含まれつゝある事を一

幸田延子

言して置く。

▼永年この體內に食ひ入つた惡毒は又永い間の藝術家的自覺と自重の修養に俟たねばならぬ。斯かる意味に於て記者は初めて本邦現下樂界の名流に相當の敬意を表しつゝ、一瞥上の月旦を加へやうとするのである。

▼記者の序言にして全くの餘計物であるならば、我國音楽界の前途は眞に本邦藝術唯一の誇であると共に、記者の兩眼は直ちに抉出して都門に掲げらるより外はない。

▼一郵便局員から一躍文壇の一重鎮となり、隠退して更に一躍文學博士の稱號を受けた露伴幸田成行の令妹である。明治十八年東京師範校附屬の音楽取調所の獨立して東京音楽學校となると同時

にこの正教授となつた。當時尙二十歳ミン／＼の娘であつた。之よりさき音楽取調所なるものは未だ殆ど教授子弟の別さへなく、女史は伊澤修二等と共に相互教授的の勉強をしたものであるといふ而して女史はその第一回卒業生として文部省から歐米留學を命ぜられた。米國、澳太利、獨逸、就中獨逸には最も長く留まつた。歸來直ちに教鞭を東京音楽學校に執る事となつた。女にして西洋音楽の直接輸入をなし、而もその實力の偉大を示したものの、此の幸田女史を以て嚆矢とする。そして先年湯原元一氏同校々長として赴任するまで實に二十餘年の長日月をこゝに費した。何故湯原元一氏の赴任が此の精勤者幸田延子女史を誡つたか。言ふまでもない、湯原校長が敢然として打下した大改革の斧には、流石したゝかな「上野の西太后」ひとたまりもなかつたのである。上野の西太后！

女史とても昔からそんなにはらしい婆さんになる筈ではなかつたが、女史をして上野の西太后たらしめた第一の動機は實に彼の正直にして生真面目にして努力家であつたユンケル教授の愛を享けたにある。道に聴く、ユンケル教師と幸田女史とに深き戀愛關係ありと、だがこれは虚であらう。元來が艶つばい話のありさうな柄でもなく又ありさうな年でもない。で兎も角もユンケル教授の引立は大したもの、ユンケル在日當時は、ウエルグアイスネル氏と幸田女史とを以て音楽學校の鼎と目された程に、校内に於ける女史の權柄はさながら日輪昇天のありさまで、歴代の校長亦一人として女史の前に頭の上るものはなかつた。殊にこの技藝監として臨みつゝあつた入學及卒業試験立合ひの場合に於ける女史の態度は、明々白々文字通り專横であつた。かくして湯原の斷然たる處置は

安藤 幸子

一方女史をして宮内省御用掛の一人たらしめた。目下は専ら泰宮殿下に御教授申上げて居る。從五位(一)といふ官位を戴き、今四十坂は遠く越しての獨身者である。好んで洋装をつける。

▼昔からヴァイオリン専門の人で、學校時代にだけピアノをも併せて教授した。現在宮内省でも主としてピアノを受持つて居る。爾來演奏は絶えてない。

▼ヴァイオリニストとしては、外人中に入れても決して人後に落ちるものでない。日本人中に在つては一と言つて二と下る腕でない。

▼幸田女史の令妹である。が、技量は令姉の上更に數段を超えて居る。無論ヴァイオリン専門で、その技は恐らく男女を通じた日本人中の第一位に

位すると言つても過言ではなからう。そして現今東京音楽學校教授としての第一人でもある處から見て、女史の技術の優秀なるばかりでなく、如何にたちのよいヴァイオリニストであるか、證明せらるゝ。

▼令姉幸田女史とは別に、獨逸に留學した。日露戰爭當時、その頃東京音楽學校の國文學教授であつた文學士安藤勝一郎と結婚した。安藤はその頃校中唯一の好男子であり、殊に當時音楽學校の内亂はその極點に達して居たので、軌轢、結黨、偏執、謀反の塵煙濛々たる中に逐次開催せらるゝ音楽會は、毎回幾組かの情人の群を作る事に於て實に在來のレコードを破つた時代である。二人も亦その群の一つであつた。あの情執ありげなノツペリした女史の唇は熱い呼吸に燃えて、生涯に一度の甘い囁きをしたのであつた。二人は目出度く、

高峰校長在任の下に華燭の典を舉げたが、校内外の思惑もいかゞとあつて、間もなく、安藤文學士は、波の音淋しい金澤の第四高等學校に轉任させられた。そして、戀人同志は戀人同志らしく、櫻花かやちりちりな生活を續けるやうになつた。女史はまだ三十に程遠からぬ八重櫻だ。

▼若手にして早く一代の名を走せた程のもので、女史の教へを受けぬものはあるまい。殊に社會の上流には夥しい弟子の數を有つて居る。音楽學校に在つても生徒の多くは女史の教授を愛慕する。従つて一たびその技術を聞きませば、は、あ之れは安藤女史の弟子だといふ事が直ぐわかる。弟子も大概はたちのよい健やかな發達を遂げるものが多い。女流音楽者としては珍らしく洗練された人格と圓滿な性質を有つた人である。

▼ユンケル教授去つてのち、シヨルツ、ウエルグ

マイステルの二人と共にかつて伯林に在つた記念として一團を作り、名けてペルリナトリオと言ひ時々三人演奏を催す事になつて居る。

▼ヴィオロニストにして、又ピアノに異常な天才を有つた人である。

ペッツオルド夫人

▼ピアノニストである。獨逸人である。そして世界に於ける近代ピアノニストの第一流といはれるリストの秘藏弟子であるといふ。また、ヴォカリストとしては、オペラシンガーとして永く獨逸の各劇場に立つて来た。有数の聲樂家ではあるが、もはや五十の老境に入つてその方面の技は餘程衰えたといはれる。

▼夫君と同伴で日本に来てから最早六七年にはな。現在音樂學校教授、それから帝國劇場オペラ

部の教授として、優に夫君に二倍する收入を得て居る。實際、ペッツオルド夫人の來日は在來の日本聲樂界に非常な影響を與へた。ペッツオルド夫人來つて東京音樂學校女生徒の咽喉は頓に一變したとまで言はれて居る。まことに我國樂界の一改革者として記憶しなければならぬ人である。由來音樂の本場は獨逸である。彼のウンケル教授の如き無骨一片、唯致々として音響の外に何等の打算も政略もない、言はず音樂の學究とも言ふべき勉強家が獨逸には多い。さきにウンケル、いまペッツオルド夫人、かくしてともすれば荒蕪に墮落し衰毫せんとする日本音樂界は僅かに再び蘇生しつつある。次に説くウエルクマイステルの如きは同じ獨逸人でも、餘程毛色の違つたところがある

現に中島カネ子、蘭部フサ子、竹内梅子等の秀才をその門に出して居る。が御自身の聲は前述の通り年と共に衰へが目立つて来た。而もその専門であるピアノは老ひて益々妙境に入つて来るやうである。

▼就中、ピアノニストとしての夫人は、感じの曲に於て勝れた技量を有つて居る。その演技は相當の音樂批評家がきいても、または殆ど耳のない日本の俗衆がきいても、至つて分り易くその鑑賞に入つて来る。夫人の恩師リストは已に三四年も前に物故したが、吾人の知る限りに於て、夫人はよくその遺跡を紹介すると言ふべきである。殊にその藝術上の風格に於て、酷似した點が多いと言はれて居る。テクニクのものも勿論現今の日本で此人に匹敵する者がない。

▼夫人は西洋人にも希らしいノッポウで、六尺以

上と推定される。その癖夫君は身軀極めて矮少、所謂「蚤の夫婦」といふ形がある。しとやかでそして受嬌の豊かな、親切な老夫人である。教授の如かたも甚だ親切細心で、現下音樂學校生徒が愛慕の中心になつて居る。彼の柄のみ大きくて幼稚を極めた帝國劇場のオペラの如きも、此の人の來たためにはどの位のいゝ感化と發達とを與へられたか分らない。

ウエルクマイステル

▼日本へ來てからもう五六十年にもならうが、日本へ來た當時氏は自ら二十八歳だと言つて居たが、ある消息通の考證によると氏は獨逸から日本へ來る船の上で一度に五歳ばかり年を遺失したんださうである。して見ると、日本へ來た時の氏は凡そ三十三四にはなつて居た。彼是四十になるのなら

う。伯林音楽學校の出身である。

▼此の人は初めて日本へセロの弾き方を持つて来た人だ。それまでの日本にはセロのひきかたを知つて居る者がなかつたと言つてよい。爾來セロの用途は非常な速度で我國樂界に展けて来た。

▼氏が得意とするところは専ら感心の曲で、その昔上野の演奏會で聞いた「獄裡のなげき」といふやうな意味の曲には全く新しい深い感銘を與へられた。タランテラも亦氏の得意の一つで、殊に自身作曲のタランテラは、殆ど會の度毎に演奏するが例のやうになつて居る。

▼ハインリッヒ・ウエルグマイステルはもと獨逸貴族の出で、その系統から言つても、その風姿から言つても一個の立派な貴公子的な紳士である。父は永くコントロバス弾きとして彼地のオペラ座附のオルケストラにあり、氏も學校卒業後父君と

共に同座に出演して居た。氏が父君に別れて日本へ来た動機には、甚だ吾人の空想をして昂らしめるものがあるが、それはこゝには略す事とする。

▼ウエルグマイステルを一言に評すると、助才のない伶俐な人である。伶俐なために敵を作るとも言はれる。また西洋人として稀らしい嘘つきださうである。けちではないが、蓄財にたけて居る。

日本語が上手で、女が好き——尤も女にも好かれまたちよいと人好きのする人だ。たゞその才に委せて事をする所を以て少くも日本人間には餘り評判がよくない。常に技藝の事にのみ腐心し努力するユンケル教授に對すると、氏は常に計畫する一才人である。されば、技術家としては實際稀有な大才を有つて居るが、ユンケル氏程の耳を持たぬとは、一般音樂界の氏に對する批評である。

▼帝國劇場オペラ部の顧問で、同じくオルケスト

ラの教授を兼ねて居る。日本で最初のオペラ「蝴蝶の舞」を作曲し、また最近では「釋迦の作曲」がある。そして外國物のオペラは常に氏によりてアレンジされて居る。實際此の人が居なくては帝劇のオペラは出来ないものである。帝劇のオペラはユンケルとウエルグマイステルとによつて創始され根據を與へられたと言つて差支なくない。

▼弟子に對しては、非常に依怙最良があると言ふ事である。一度白眼されたが最後、どんな事をしても挽回は六ヶ敷といふ愚痴もきいた。あれが西洋人の通有性ではあるまいかなどといふ者もある。▼目今駿河臺の鈴木町に居るが、今だに獨身といふ事で、家には若い日本人の妾が居る。酒は可なり強い。かつて帝劇の女優音羽かね子と某々の噂があつた。恐らく實際であらう。かね子もウエルグにはさんくひつばりまわされたと言つて居る

程である。

▼氏はセロの顧問として岩崎邸に出入し、音樂すきの一門に教鞭をとつて居る。そしてセロ以外には、ピアノもやり、その他何でも御座れでやつてのける。元來非常に器用な人だ。そして要するに毀譽褒貶相半ばして居る人である。

ドブラウキツチ

エツケルトの後を繼いで、宮内省雅樂部のお雇教師となつた人だけに、宮内省でも演奏する事はなく、その他年二回明治音樂會に出演する外殆ど公開の演奏がないので、餘り世間には知られない人である。殊に非常にデミナ性質で表立つた事は自らわざとさける傾きもある。希らしい大酒家でヴィオロニストとしては感心の曲に最も巧みであると言ふ位のものである。日本一の○宮殿と言は

れる宮内省雅楽部に、さきにはエツケルト、のちには此のドブラウキツチの周圍に多少の書き上ぐべき事がないでもないが、それは結局香ばしからぬ素破抜になるからわざと遠慮をして更に後日を期する事にする。

島崎赤太郎

▼オルガニストにして立つた人ではあるが、その人物は寧ろ日本に於ける和聲學の一代表者として記憶されて居る。オルガン専攻として三年獨逸に留學した。さすがにオルガンの奏者としても、現今此人の右に出づる者はない。たゞ歸朝後幸田女史のあとを繼いで東京音楽學校の技藝監にはなつたが、演奏といふものはまだ一度もやつた事がない。従つて上手下手といふ事は一概に斷じ難い。この演奏をせぬ理由をきいて見ると、日本には島

崎が手を下す程のオルガンがないからださうである。吹きも吹いたらうが、元來オルガニストは損な役廻りで、管弦樂の演奏などには殆どその存在を明らかにしない。といふ事も亦當然一つの隠れたる理由なのであらう。兎に角、斯くして歸朝以來の樂師島崎赤太郎は殆ど床の間の置物である。その名の割合に古くそして大なるに反し、樂界に於ける氏の存在は極めて薄弱である。東京音楽學校出身で、オルガニストとして獨逸に留學し、歸來偏へに和聲學の研究者と知られて居る。和聲學の著述その他二三種がある。但し、氏のオルガニストとしての立場の榮えないのは、所謂弾くべきオルガンのない日本だけの事で、少くも獨逸樂界に記憶されたオルガニスト、島崎氏は、實に有数の大家であるといふ事である。然し遺憾ながらその門にも依然として秀才は出でない。オルガニ

ストは損な役廻りであるといふ平凡な、誰でも承知の出来る一事は此場合八分の眞理を語るものであらう。敢て十分の眞理とは云はぬ。留學の手前もある事だから。

橘 糸重子

▼音樂者としてよりも、歌人として早く、そして廣く知られた人である。日本では相當に古いピアノニストであるが、未だ殆ど何度といふ程の演奏をして居ない。ピアノよりも和歌の方がうまからう等といふ人もあるが、それは吉九一昌や、坂正臣や、も少し古ければ大和田建樹等の歌ばかりに慣れた音樂者社會での話で、純文藝の立場から見たら、たゞ一時代前に生れた老嬢の古いセンチメントに過ぎない。蠟涙したゝり落つるシヨパンのパラド、老嬢の身を孤獨と哀傷の涙にひたして、

過ぎ去つたおもひ出の情火と、終に終に満し得なかつた熱烈な昔の戀の悲み、歌に泣く音を訴へた哀れな戀の物語りは、古くからの雜誌「心の花」に歌はれた。

▼老嬢——知る人ぞ知る「老嬢」といふ小説は自然派の先驅として現はれた詩人島崎藤村が散文の最も初期に屬する作である。此の「老嬢」は同氏の第一短篇集「綠葉集」に收めてある。同じ集の巻頭に「水彩畫家」といふ一篇がある。この一篇に暗示されて居る女流音樂者柳澤清乃のモデルこそ、歌の主橘糸重子女史なのである。そして當時「水彩畫家」のモデル問題として丸山晩霞と島崎氏との間に面白からぬ感情が往來したといふものは、右の戀愛に就いて丸山氏はまるで實生活上の交渉がなかつたからである。言ふまでもなく此の一篇は全然事實ではない。が、その布置に於て得來つたヒン

トには正しく橘系重女史があつたのである。然らば實際女史が赤心を捧げ盡した恋人とは誰であるか。果然、當の執筆者島崎藤村だつたのである。

▼島崎と橘女史とは、藤村がかつて音楽學校の門を潜つた當時から相知つて居つた。藤村氏、時に未だ眉目秀麗の一青年「若菜集」によつてかち得た盛名が當代の子女の涙と憧憬とを集め得た事は言ふまでもない。女史は殆どその前に華の如き佳人の生涯をも、投げ棄てるべき程の戀に陥ちたのであつた。丁度その時までに經驗されて來た島崎藤村の煩悶を再びこゝに繰返すが如く、悲しい哉、藤村氏已に人心の幾艱難を経たり、彼が心は已に人生の悲痛と憂愁と艱苦によつて満たされて居た血の出るやうな此戀は受けられなかつたのである。思はざりき東臺の病鶻、ピアノのキイに打出さるゝ諧音のすべて、やるせなくも歌ひ出さるゝ歌

八萬首は悉く、その生涯の愛を捧ぐるに至つた一個の影、文壇の第一人者島崎藤村の影の爲めにすゝ祈禱である。

▼音楽者としての橘女史は、感情の女、愛の爲めに生れた女、そして日本の女としての女史の下にある。眞實の意味に於ける悲戀悲歌の徒、吾人はこれを此の橘系重女史に見る。山犬の如き所謂新しい女とは、自らその選を異にする。

▼されば東京音楽學校主席教授橘系重女史は、その教授の親切なる點に於て、微々細々たる青春の情と涙とを解する點に於て、溫柔多感なる一婦人音楽者としての聲望をその一身に集めて居る。

頼母木こま子

▼頼母木桂吉の夫人、音楽界揃いも揃つた二の町の中に抜群の美貌と、會といふ會に必ずその美貌

を見ない事のない事と、その門下に秀才を生んだ例を更らに聞かないに拘はらず、殊に社會の上流に多くの門弟を有する事等に於て、少くも樂界の一方に頭目として重きをなして居る一人である。

▼音楽學校出身で、海外の留學なしに同校の教授となつた人である。ヴァイオリン専門ではあるが決してヴァイオリン専門といふ程の手腕を有するものではない。たゞその教授法に至つては夫人獨特の妙を發揮して、その技の發達の如何に關はらず、門弟間に於ける夫人の聲名と崇敬は却々なみ大體な事ではない。

▼兎も角、音楽としてよりも、否音楽者であると同時に非常な交際家である。女流活動家である。かつては、上野の西太后幸田女史の腹身とまで言はれた程の、ノツキリの名人である。

▼思ふに上野の森は潮流の腹である。常に淀み、

常に明澄朗らかな流の音を聞く事が出来ない。それをその藝術の特殊な副産物である。不離の情弊であるといふならばそれまでであるが、元來上野の樂堂には根本の昔から抜き難く倒し難くして、年毎にその根の深く腐れ込んで行くものがある。勿論それは誰人の罪でもないと同時に同様に關係のある凡ての人の罪である。最も西歐に直接の關係を有しながら、最も西歐の藝術の消化の足りないこと、ともすれば淺薄なる西歐藝術又は西歐藝術界の表面の美にのみ酔つてしまふこと、これ等の意味が分りかねる程に、積年の情弊惡風に對する藝術的良心は麻痺して居る。安逸を食つて居る。散り易い花の黄金に酔ひしれて、いつまでたつても豊潤不朽の果實を生む事の出来ない吾が樂界の永いく現状に對して、吾人は切にその深味ある反省を望まないわけに行かぬ。但、これ

は主題の頼母木夫人とは自ら問題を異にした岐路である。そして甚だ忽かせに出来ぬ問題である。

神戸 絢子

▼ピアノニストである。音楽學校を出て佛蘭西へ三年間ばかり留學した。まだ若い。若手の中では一と言つて二と下らない人である。丸顔の美貌であるとして已に神戸の妻である。

▼弟子にも教授仲間にも相當の敬意を以て迎へられる人だ。之れも弟子には上流の子弟が最も多く而もその多い弟子に優れたものが恐らく一人もな

さ。▼ある神經質な人は曰ふ「何處かかう大家ぶるやうなイヤな處がある」と。

柴田 環

▼柴田環女史に就いては、女史が最近の談片を證左として直ちに女史の隠退を觀念するものもあるやうであるが、またある消息通に言はせると、女史の考もなかくさう單純なものではないのださうである。たゞ、藤井となり柴田となり、その間少しく千葉臭くなり、又々三浦となつた徑路のあるだけに、此一兩年の環女史は随分と苦勞を重ねたものだ。いはれを聞いて見れば例によつて「弱き者よ汝の名は云々」と言ふ紋切形に落ちて來る▼一體、環女史といふ女は、新しくない、女らしい女である。涙脆い、情にほだされ易い、古い意味での浮氣な、従つて他から見ると、あだかも人の手折るにまかした艶ある海棠の嬌々とした女のやうに見える。彼の千葉秀甫氏との關係を云々された時だつてもさうで、一言につくせば寧ろ巧みな恐迫の下にあゝいふ事實を生じたのであると見

る方が至當ださうである。元來、三浦學士とはまだ女史が音楽學校の生徒であつた時代に演奏會の席上で、その美と聲とに戀せられたのがもとで、性來音楽好きの三浦學士とはこゝに相思の語ひが出来た。勿論藤井家を離縁になる前からの知り合であつた。さうかうして居る中に、三浦學士は新嘉坡の三五公司の雇醫師として日本の地を離れ、女史は帝劇オペラ部に出勤する事になつたが、女史はその家系上頼る人少くまたその心弱さ、反抗力の弱さにムザ／＼千葉の手中に翻弄されるゝに立ち至つた。それが種に出てパツとなりて見れば、女史の性質としてはとても日本の地に止まる事は出來ない。やがて戀しい學士の居る、旅衣寢覺に濡るゝ熱帯の新嘉坡をさしてはる／＼と一人日本を遁れたのであつた。それがオペラ「釋迦」の上場以來までもなくである。

▼女史の父といふ人は到つて舊式な嚴格一方の性質で、藤井家に婚嫁の事も黙し難い父親の命令であつたといふ。安い小説を掲げ行つたやうなその實甚だ同情すべき立場を續けて來た女である。▼今は再び學士と同様して楽しい秋を送つたが、もとより音楽の爲めにはその夫さへも忘れる程の人である。今後また如何なる旗幟を振り翳して打つて出やうも知れぬ。女史の樂界に於ける野心は隠れ居て尙更に高調しつゝあるといふ事であるから、況んや帝劇オペラ部との關係は今も尙存續しつゝあるのである。▼聲樂家としては何といつても日本第一である。殊にオペラ物は得意であるが、自身オペラの舞臺上に立つ事になると、そこにさまざまの缺點が生じて居る。現在日本の女で、聲樂に外國人と同じ合ひ得るのは實に女史と、それから一人中島か

ね子女史の二者あるのみであらう。技術に於てこそ可なりの相違はあれ、音量に於ては二者殆ど差違がない。

▼就中、甘いもの、華やかなもの、それから主としてベッソールド夫人の畑にあるやうなものは女史には向かない。むしろ詩味に豊かな、瞑想的なもの、方を得意とする。

▼教授法の巧みな事は實際特筆に價する。それは要するに女史の性格から来る、寧ろ犠牲的の熱心から来るのであらうが、一度女史の教へを受けたものは、その何とも言ひ様のない教授の巧妙と快感とに酔ふといふ事である。

▼弟子の愛慕もまた従つて非常である。中にも帝劇の女優連には甚だしい憧憬と愛慕と追惜を受け居る。

杉浦ちか子

▼ピアノ、聲樂何れをその専門とも定め難い。聲樂は天才といふわけではなく、むしろ老練家で、ピアノの方は演奏よりも教授に適してゐるやうである。演奏臺に立つ事殆どなく、教師としては、十年一日の如く質實に効果を擧げて居る。神田一つ橋の分教場に教師中の人格の高い温厚にして親切な人として、一般初學者にも、音樂界にも評判のいい人である。上野東京音樂學校の出身で、夫君は杉浦半哲學博士、中に三人の子がある。教師連中では美しい容姿を有つた側に屬する。技術は飽くまでも洗練された、缺點のない、従つて獨特のズバ抜けた妙所もない、要するに樂界の一師範として重きをなして居るだけの人である。

本居長世

▼本居長世といふ人は如何にも音樂家らしい風貌と心持とを持つた人だ。これは誰しも首肯する所であらう。温厚で篤實で一見貴公子の趣がある。侍講本居豊頼氏の息で、東京音樂學校助教授で、邦樂調査係で、そして非常な交際家である。

▼ロイテル氏の弟子中でも一頭地を抜く人で、本來のピアニストとしてよりも、作曲家としての方が廣く知られて居る。またその方面の述作も多い。腦力の貧弱を通り相場にして居る日本音樂界にはかなり希らしい人だ。

▼ピアニストとしては演奏の場合よりも、教授の方が成績がいゝやうである。

▼此の人の作曲に於ける大體の傾向は、日本音樂を西洋樂化せんとするにある。が、彼の北村季晴氏などは、餘程おもひきを異にして居る。已に書物として世に出てゐるものには「數へ歌」のヴァ

山中基清

リユエーション「ネンネコ」のヴァリユエーションそれからコミックオペラとしての「うかれだるま」等である。先頃原宿の家を引き拂つて青山六丁目新らしい舞臺上の華を養成しつゝある。そして、傍ら新作オペラ「春日の森」の作曲中である。

▼元來多藝な人で、三味線御座れ、琴御座れ、笛でも何でもやる。日本の清元、長唄、常盤津等もやる。弟子も澤山にあるが、氏の宿望は、ゆくゆく日本人ばかりのオペラも成立させるにあるといふまだ若い。前途は頗る矚目に價すると思ふ。

▼ピアノは、ソロイストとしてよりも、伴奏家としての方が優れて居る。

宮内省雅樂部にあるヴァイオロニスト、ユンケル氏

の弟子中にあつては一二と數へられる秀才である殊に感じの曲に得意の手腕を有する。音楽者として人物としてもシツカリした大印象を與へた人である。音楽者としては希らしい方正家で、教授にも却々勝つた腕前を有すると認められて居る。まだ青年期に屬する人であるから、その將來に多大の望をかけて置くだけでも、優に樂界の一頭目たる價値のある人である。

窪 兼 雅

▼ドヴァヴキツチの弟子で、ヴァイオロニストとしては、實に現代若手の第一人といふに不足のない人である。親代々の伶人で、世々官途に就いて居る。多、窪、などの音楽を有て家を立てた系統には、その祖先が支那人の歸化したものである事が多い。

▼此人は専らテクニクもの即ち指先の鍊磨によつて効果を得る曲が得意で、此方にかけてはまことに唯一の天才であるといつてよい。但、才にまかすと少しく粗末に流れる事があるやうに觀察する然し樂界一般の評に徴しても、實に稀有の天才であると言はれる。その身宮内省に屬するが故に餘り世間には聞えて居ない。此の人だけはその師ドヴァヴキツチの手に餘るといふ事を師自身から宣言されて居るといふ。現在帝國劇場オーケストラの教師、まだ二十二だといふが、少しかけて見える。温和な氣質で、非常な沈黙家だ。勿論洋行はして居ないが、ヴァイオロニストも多し中に、安藤幸子を除いたら恐らく此の人の一人舞臺でもあらう。

▼ヴァイオリン専門といふ外にクラリネットをやる。前の山井氏と共に第一ヴァイオロニストである。

る。遺傳といへば遺傳の恐ろしい力を感ずる。遺傳でないといへばたゞく此の大奇才に驚かざるを得ない。

その他注目すべき
樂界の人物

▼久野ひさ子女史はピアニストとして、神戸絢子女史以上本居氏以上の聲價がある。非常な勉強家で毎日必ず六時間以上は鍵盤に向ふといふ。それが折々過度になるため、卒倒する事があるといふ若く美しく、而も此天才と努力とを有ちながら、女史は女としては一生涯を泣かねばならぬ一種の不具者である。此點甚だその藝に捧げた生涯に涙を注がしめる。此の秋の演奏會に演奏したピアノコンサートの如きはまことに天品であるとして、一般の批評は斷定した。原田淳氏は天才肌の人であ

る。從つて奇行家、熱情家、變物である。そして多病である。氏の今日に至つた動機は一にその失戀にあるといふ。虚ではなからう。音樂學校教授帝國座附オペラシンガーとして、その長髪とバリトンに近いテノルによつて記憶されつゝある。また近代劇協會の俳優でもある。聲はあとの清水金太郎氏よりもよい。たゞ音量に於ては遙かに清水氏に劣らう。近々同劇場山本支配人の媒酌で、女優大和田その子と結婚するさうである。清水金太郎氏はバリトンである。勉強家でそして甚だ天狗であるといふ。教授法も巧みでない。内部ではあまりもてゝ居ないが、素人うけは原田氏よりもすつとよい。が、氏の聲は大きいばかりで、無器用と荒顔の批難はまぬかれない。但し非常に舞臺度胸のある人で、これが爲めに外部の人氣は却々落ちない。大のツボラで放蕩で、此點は前の原田氏

ともく、帝劇入座以來金のまわる所から、赤坂神樂坂等に盛んに發展して居る。中島かね子女史はベッツォルド夫人の直弟子で、聲は師によく似て居る。唱ひ方もよく似て居る。アルト(女中音)である。音量としては環女史に匹敵しやう。中島鐵工所の令嬢、妙齡花をあざむく程でもないが先づ十一人並位の處である。但、近々結婚するさうである。どちらかといふと天才肌の人である。竹内平吉氏は帝劇オーケストラのコンダクターである。セロイストとしては殆ど一流の妙手といつていい。然し近來已にその技も終りに近づいたといはれる。コンダクターとしては優れた手腕を認められて居る。和聲樂にもかなり深い。その技はウエルクマイステル氏に酷似して居る。かつて邦樂調査係であつただけに日本樂にも亦多藝である。帝劇へ入つてから頓に技術が落ちた。之れもツボ

ラでもひけはとらぬ男、その上好男子であるから戀女房を家に飾つておく外に艶聞は甚だ多い。向島、水神の八百松あたりへそれらしい男と、小原小春らしい女の入る處を見かけた人もあるとやらさて、此の他にはソプラノの第一流としてベッツォルド夫人直傳の蘭部ささ子女史、之れと並び稱さるゝアルトの中島つね子女史などがあるが、紙數に限りがあるから、之等の新進については更に篇を更へて書いて見たいと思ふ。(流泉子)

洋畫日本畫界の新進

繪畫界全盛としての新運動は常に洋畫によつて先立たれ、その究理的思索的な方面に於ても、いつも一部の洋畫家によつて暗示され統一されつゝあるといふ光景は、誰しもの直ちに承認せねばならぬ處であらう。而も現今に於ける繪畫の進歩と發展向上とは、一種の古典的な鑑賞以上に、繪畫界幾多の新進によつて、快い高調に達せしめられつゝある。繪畫を繪畫として見るといふ事以外に繪畫界に於ける新開拓地、新思想、新生活、新氣分は此處數年間、實に目覚ましい速度と分量で進んで來

た。今は一面に於て繪畫界の移植時代である。勿論此の移植時代は文藝に於けるそれとは甚だしくその趣を異にして居るが、更に驚くべき現象はたとへそれが形式であり淺薄な意味のものを含むにしてかゝるが、日本人の繪畫鑑賞力のレヴェルが非常な勢で昂騰して來た事である。多く洋畫を通して輸入される繪畫界の改革は此處にも亦、現時日本畫界唯一の勢力たる浮世繪の方面にも甚だしい影響を與へて來た、恐らく、名けられたる第一部第一科の繪畫は忘れられんとしつつありながら、否、已にその實權を失つた殘骸を

百歩のあとに守りながら尚、自ら日本固有藝術の眞權威であるかの如く、空疎な名の下に凡ての意味に於ける骨董となり了した。

何れにもせよ、畫界の實權——それを政略や地位上の實權と誤られては困る——といふものは日本畫界には無い。その最も新しい方面に接する機會の多い浮世繪方面に於てすら、眞にその藝術的良心に基くところの深みもなく、また深みある藝術的思索の聲を理解するだけの能力に乏しい。凡ての日本畫界は、我國に於ける繪畫界の一種のアカデミーである。習慣と形式と摸倣とイヤ味と不熟と劣人格とに於て殊にアカデミーにもたとへべきものである。極端に言へば、現時の日本畫程ミデメで混沌としてゐるものはない。少しく大局を見るの態度を以て鑑賞に努め得る見物には、一回の文展瞥見によりてさへ此の感を深くする事は出

來るであらうと思ふ。

であるから、單に問題になる問題にならぬといふ點で區別してしまへば、現代の日本畫中に眞に論評に値するものはほんの僅かである、その邊は大體に於て俗衆の鑑賞を標準とした根柢のない繪畫が多いといつていい。さういふ意味の事は、繪畫界の先覺者として、また天才として名聲の高かつた故岡倉覺三氏の藝術的生活などが、まことによく之を表象して居ると思ふ。之を古い人といひ、懶怠者ともいひ、不眞面目ともいひ、天才の濫用ともいふ。恐らく、現代の日本畫家程、世に濟度し難く導き難いものはなからう。況んや蠢蠢たる青年輩、紛々たる俗流の小才子者流に至つては、此社會を以て最も不眞面目な徒の多い處とする。

但し、これから擧げて行かうとする數名の新進

日本畫家は記者の採り來つた問題とするに足ると思ふ人達であつて、言ふまでもなく、ワイ／＼然たる多衆、陣笠とは殆ど全くその選を異にして居る。

所謂第一科の一群

には、その若手の錚々たるものとして、小室翠雲、松林桂月、田中頼章、望月青鳳、小坂芝田、徳永永陵等を數へる事が出来る。が、此人達に對しては全く言ふべき何物をも持たない。つまり賞めやうにも詞がないのである。かういふ名の人があるといふ位の程度で問題になるだけである。で一寸紹介だけをしておく。小室翠雲は帝室技藝員で足利出身田崎氏の門弟である。翠雲も亦足利市の某實業家の子であるといふ事だ。松林桂月は益頭峻南と共に野口幽谷の門弟、田中頼章は玉章の

門弟山陰道石見の出身である。因に石見出身の畫家といふものは至つて少ない。望月青鳳は金鳳の養子である。由來日本畫家の家には養子制度を採用したものが多い。之は特記すべき斯界内面の一現象であつて、これによつても如何に舊派新派に係はらず、日本畫家の心持は解ると云ものである。中には自分の勉強の仕方と心の持た方も、要するにある一人の師匠の養子として呼ばれやうために努力されて居るやうな青年畫家もある。尤もこんなのは俗臭の最も甚だしいもので斯の社會に於てさへ自ら指彈さるべきアブレ者であらうと思ふ。一言附加へておく。たとへば、荒木十畝、菊池契月、野村雪江などもやはり矢張養子中の白眉である。さて、小坂芝田はさきに物故した信州の兒玉果亭翁の弟子である。果亭翁の遺録をついで、また今後の進路にも相當囑目に價するだけの天分を

持った人である。徳永永陵は永湖の養子であり、それから吉原の引手茶屋の子である。これから少しづつ、個人評に移つて行く事にする。

り豊富だ。何にしても自分の考への樂に出て来る人のやうに思はれる。

橋本關雪

栖鳳の弟子だ。日露戦争頃には彼の地にわたつて旅順その他の畫を書いた。此の人は畫の外に漢籍の力が餘程ある。無論漢詩は得意で、従つて友人にも詩作りは多い。關雪などは日本畫家中の漢詩人としては錚々たるものである。此の人の畫にははじめ非常に癖が多かつた。よかれ悪しかれ、氣になる癖が多かつたが、近頃はめつきりそれが無なつた。人物畫でも彼の『後醍醐』やその他の佛畫等にはいやな癖が見える。兎角一癖のある人だ。好んで歴史的の人物を描く。京都仕込の腕達者で、その筆の練熟には驚かされる。頭腦もかな

芳文の弟子で、同時に養子である。信州の出身で舊姓を細野と言つた。風俗畫——人物畫にすぐれた手腕を持つて居る。社會の評判も人物畫が一番いゝやうである。文展にも最初から人物畫を出して居る。が、此頃はまた花鳥をかき出した。但し同じ花鳥でも矢張りお得意の人物は必ず出て来る。「燈籠大臣」はその作中の最も有名な作であつた。筆は非常に練れて居る。そして自在である。畫面の變化に富み、一々面白い變化を見せて來れる。而もその變化にも自ら正しい順序はある。さう大した人でもないが、漸進的に望のある人だと思ふ。

菊池契月

結城素明

美術學校出身で、故玉章翁の門下である玉章の門人としては希らしく頭腦の新しい人だ。此の人は由來支那の文物に異常な興味を持つてゐると見えて、その卒業製作「民國滅亡」以來支那に關する畫は非常に多い。畫風も従つてさういふ心持からの現はれによつて支配されて居る處が多い。兎に角此の人と平福百穂とは共に玉章門下の二逸才といふべきで、毛色の變つた二人である。平福百穂と共力して死聲會を立てた。更に珍とすべきはかつて玉章の門下として石井柏亭のあつた事である。

熊本出身の人である。故高橋廣湖によりて引上げられた一秀才で、塾實堅剛の精神をもつた天分ある努力家である。たゞ、東京仕込みであるから技術の點では京都出の某と等に較べたら劣るといふ判断を下さねばなるまい。前途有望の人であると思ふ。

堅山南風

上村松園

鈴木松年の門弟である。後に到つて栖鳳に教へを受けた事がある。彼女の繪はよく之を證明して居る、概して前期より後期即ち此頃の方が面白い。特記すべき事は、近代京都に於て風俗畫らしい風俗畫を書き初めたのは此の人であらう、元來京都は技術の練磨に於て比喩なきまでに勝れて居

結城の繪にはまことに癖が少い。厭味もなす。健全に大きくそして光つて進む人である。

るに反し、歴史畫とか浮世畫とかいふものは昔から甚だ振はない處である。さういふ土地柄に出てこれまでの研究を積んで来たところは頗る感服に價すると思ふ、もと四條風を習ひ、之に徳川時代關西唯一の浮世畫家西川祐信の風を加味した處を見る。一體東京の浮世畫家には山水花鳥研究の素養が割合に乏しい。此點に於ても上村松園は甚だ出色して居る。人物に配する花鳥山水等は遙かに東京の浮世畫家の上に出て居る。女子として東京の池田蕉園と對峙すべきものであるが、此頃では蕉園已に遠く之に及ばなくなつた。但し、大分の發展家であるといふ評判がある。現に今居る家にもおとつさんの名のはつきり言はれぬ子供が一人あるといふ。

山田耕雲

花鳥畫家芳文の弟子である。従つて花鳥が最も得意だ。純粹の四條風の花鳥だ。裝飾畫的の畫風に寫生がある。かつて白耳義海牙の平和殿にかゝけるといふつゞれの錦の下繪は此の人と川北霞峯と二人でかいたのを川島甚兵衛といふ人が織つたのだ。何れはさういふ方へ特異の才の向いて行く人であらう。兎に角花鳥研究には甚だ深い造詣を持つて居る人だ。

西村青歸

美術學校出身で、梶田半古の弟子である。自然に趣味の深い人で、またさういふ方面には自ら異常の才を有する、人間も至つて自然なわだかまりのない人である。前田青村とは久しく同様して居たから、お互ひに影響し合つた點も多からう。現に、此の二人の畫風はよく似て居るといはれる。

勝田蕉琴

主として山水人物を得意とする。此の他佛畫の製作も多い。かつて雅邦の門下であつた事もあるまた右の佛畫研究のために、印度地方を漫遊した事がある。近來は自然物の研究を追々と深めて行くやうである。その畫はいつもまことに手キリよく描かれて居る。技量はたしかに非凡であると思ふ。寺崎廣業などの認める處と成て居るらしい。世間の評判もよい。人間も却々人づきあひのいゝ心持のいゝ人だ。言はゞ畫才のある人といふのであらう。然し畫才といふものゝあるだけに大きくなつて行くかどうかは疑問であらう。何の方面にも相當にすぐれた才を有する、つまり多藝な人だ。そこに此の人の有望な前途と危険な將來を見る事が出来る。

小村大雲

春舉門下中の秀才である。深く寫生の研究を積んだ人であるが、此頃の畫風を見ると、その忠實の寫生が却つて邪魔をして居るやうに見える。何處かウヂ／＼して居る處がある。また洋畫趣味に傾いた處もある。まだ／＼後年を俟たなければ何とも言へぬ人である。大きくなれば／＼と大きくなる人だが、それには幾多の改革を要するであらうと思ふ。

川村曼舟

川村東洋の弟で前の小村大雲と同門、春舉の弟子である。従つて師のあとを追隨して居る事が明らかに見える。面白くない事だ。併し乍ら、京都出身の若手中では世間の期待も大きい方で、本

年の文展あたりでは兎に角、時に甚だ奇抜な試みをする人であるが、それが根柢から動いて来るものであるかどうかは當てにならぬ。特に近來はふるはない。文展などもムヤミに青年をエラクしてしまふには、よくない代物である。曼舟なども幾分さういふ非難はまぬかれない。

小山榮達

初め鈴木榮曉に師事し、後に小堀鞆音の門弟となつた。多少洋畫系のある人である。主に歴史畫や人物畫を書く。如何にも達者の畫である。或はワル達者な達者もある。

大智勝觀

大觀の弟子といふわけでもないが、大觀の畫風を慕つて居る事はたしかである。好んで寒色をつかふ處は特色中の特色であらう。技術よりも色彩に於て深い感能力を有つて居る。氣分を現はす事に勝れて居る。得意とする處はやはり自然であらう。今年の「雨のち」なども、特にすぐれた作であると思ふ。日本畫家中にあつては最も新しい人の一人に加へ得べき人である。

村上鳳湖

川合玉堂

楓湖の弟子、のちに川合玉堂の門に入る。初めは人物畫のみをやつて居たが、此頃餘程花鳥に傾いて來た。特に樹水の描法にすぐれて居る。まさほと問題にもならぬが之れも將來に望を囑し得る一人であると信する。

柳原紫峯

前に述べた大智のやうに、色彩を感じる力は非

島成園

常に豊富な人である。どちらかといふと研究家であつた。また甚だ熱心な人である。たとへ日本畫の前途に裝飾畫的の方面と、日本畫獨特の方面とが論せられる時が來てゐるにしても、かういふ人の將來はやはり注目に價するもの、一つであると信する。

野田九浦

まことに心持のいい畫である。北野恒富の畫風を慕つて居る。その畫にも恒富の影響はさまざまに意味に於て含まれて居ると思つてまちがいはない。兎に角全盛な事である。

廣業の弟子中では殆ど唯一の秀才であつたのであるが、塗説に曰く「九浦若うして老ひたり」とある。記者もこれに反對するわけには行かぬと思ふ。殊に本年の作品「天草四郎」に於ては、買つてやるべき點を見出だすに苦しむと思ふ。敢て長廣舌をさける事にした。

渡邊萊渚

美術學校出身である。人物畫が最も多い。就中日外研精畫會に出品した「蓮生坊」の如きは、

人物研究

雅邦翁の激賞する處であつたといふ。從來あまり振はぬやうではあるが、學校出身者としての缺點も尠く、むしろ尤物の一人である。尙々前途に多大の變遷を有する人であると思ふ。

長野草風

人物畫を主として描く。頭腦もよし、また山水花鳥等にも人物畫に劣らぬ腕をもつて居る。初め村田丹陵に師事し、のち川合玉堂の門弟となる。此の人の最も近い周圍に谷崎潤一郎のあるといふ事を特に記しておきたいと思ふ。甚だ有望な素質を有つて居ると思ふ。

松岡映丘

美術學校の出身で現にこの助教である。前の長野草風、伊東紅雲等は下谷小學校での幼な友

達である。土佐繪に深い趣味を有すると聞く。井上通泰、柳田國男の二人の弟である。此の二人兄弟がそつて文學に興味を持つてゐるのは面白い井上は歌人であり、柳田は又新文學に於ける有数の理解者である。此の人にもまたさういふ傾向がある。殊に古實を調べる事に非常な興味を持つ點の柳田に酷似する處も面白い。主として人物を描くが、その畫風は土佐風に新味の豊かなものである。小堀鞆音の教室に助教をつとめて居る。

鏑木清方

蕉園、輝方、寛方、蕉玉等と共に年方の弟子である。父は探菊條野傳平といつて假名垣魯文等と古いやまと新聞をやつた人、妾腹の子であるといふ。清方が他の同門に較べて早く市井に名をなして居たのは一つはさういふ境遇上の關係もあり

安田鞠彦

また清方の畫風にもよる事と思ふ。年方に師事して居た時代から多くの挿畫をかけた。その畫の最も評判のよかつたのは鳥合會開設當時であつたらう。以來此の人の畫でなくてはならないやうな向きは益々ふえて來た。よく流行を察知する力を持つた人で、すべての點に於てかたまる事のない人だ。年英等も殆ど同時代の人であるが、トンと比較にならない。文藝に興味の深い人で、殊に鏡花一葉、紅葉等は好きであるといふ。従つてそれ等の人は又幽芳等の小説にまで、その筆は行きわたつて居る。日外畫いた「一葉の墓」などはすぐれた作の一つであつた。島崎藤村は好んで此の人の挿繪をその小説にとり入れた。文士との交際は畫家として最も多いであらう。町畫師、風俗畫家として、おそらく現代屈指の人であらう。

小堀鞆音門下の唯一の秀才である。また最も多く岡倉の感化を受けた人である。土佐繪を土臺に出發した人で、奈良朝時代の研究は非常に深い。前田青村、長野草風等と共に法隆寺その他をよく探つてゐるいたものだ。眞面目な、そして何處となく態度の奥床しい、一點一劃も苟くもせぬ、また甚だたちのよい畫家である。横濱の原富太郎の保護を受ける一人である。原は安田の外にも尙牛田鶏村、下村觀山等の人々を保護して居る。そして保護者自身が此の道に甚だ明るいといふ事である。記者をして敬意を拂ふに躊躇せしめぬ人である。金庫のはちきれるのを樂みにして居る日本の富豪連中はちと原氏の爪でも煎じて飲むがよい。惜しいかな安田鞠彦は病弱、前途に大望をかけ

難いところがある。思ふやうに行かないものである。

今村紫紅

安田靫彦を觀山とすれば、紫紅はさしづめ大觀でもあらうか。大膽な畫、思ひ切つた畫、新味を常に失はぬ畫は此の人の特産物である。踏襲模倣を嫌ふ、藝術家らしい藝術家である。初め楓湖に師事し、以來自己一點張の獨壇場である。獨歩の姿である。

山内多門

此の人の畫には狩野派の味がある。玉堂の門下である。そして玉堂よりはその畫風が剛放奔逸な味に富む。古畫の山水を深く研究して居る。甚だ新味に豊かな畫をかく此の人は非常に著實に正

當な順序を踏んで來た人で、人物も風俗も又は土佐風の色調も皆一通りの完成を経なければさきへ進まぬといふやうな眞面目な態度の人である。今は専ら墨を骨子にした繪をやつて居る。質朴謹直な好人物で、眞に藝術家肌の人である。

前田青村

半古門下の秀才、前に述べた安田靫彦に何處か似通つた處がある。繪巻風の試みも多くまたさういふ方面の新しい研究も積んで居る。が惜しいかな病氣までが、安田靫彦に似て居る。將來を氣永く待ちたい人である。

池田蕉園

京都の松園は技術においてすぐれ、此の蕉園は頭腦を補ふに技を以てするといふ處がある。近頃

では餘程衰へが見える。女流畫家は女流小説家よりもまだ生命が短い。體質の關係もあらう。精神上的の變化もあらう。周圍の事情もあらうけれど、兎にも角にも結婚をしてしまつてはだめのやうである。随分熱い戀もしたといふ人であるが、近頃の作品には、殆ど昔の潑刺たる氣宇は見られない

土田麥僊

美術工藝學校の出身である。栖鳳の教へを受けまたその影響も比較的多い。づんぐ新しい方へ進んで行く目覺ましい若手の一人である「髪」(罰)などすぐれた作であつた。本年の「海女」も大分世間ではやかましくいはれて居る。中にはゴーガンがどうしたとか、滑稽な、愛嬌を言つて居る人もある。要するに未成品だ。大體に於て去年あたりから、寫生とはよほど離れて來た。が、この變化

北野恒富

芳年の弟子の年恒の弟子である。弟子中の第一人である。まだ甚だ若いが浮世畫家中の一天才で東の清方に對する、西方の強敵である。恐らく後年清方以上にまでぬける人であらう。「清方位のものはある」とは、年恒が常に誇として言つた事であるといふ。非常に強い調子の畫をかく。島成園の畫は此の人によりて感化された處が多いといふ途説子又曰く「成園恒富を慕ふ」と。さもあらん

恒富は又稀有の美男子である。

鯨崎英朋

年英の弟子である。確實な技術と、強い自信を把持して動かない人格を有する點に於て嶄然頭角をあらはす。然し乍ら、その畫は未だ圓熟の境に入らず、清方程にもこなれて居ない。畫が堅い。區域のせまいといふ事もいはれる。要するに畫才といふものに缺くる處があるのであらう。非常な交際家であると同時に、せまく立てこもつた處がある。挿畫畫家としては優に山中古洞以上ではあるが、まだく廣く出て行かなければならない人であると思ふ。

山村耕花

月耕の弟子であつて、月耕のイヤミなく、又月

耕の缺點もなく自由自在にのびて來た人である。大體藝術家肌の人で、頭腦の働く、畫才の豊かな人である。非常に特長のある畫風である。同じ月耕の門下でも金森南耕や、福永耕美等の師の缺點ばかりを受け亞いだ人達と違つて、充分その將來を期待し得る人であると思ふ。

平田松堂

美術學校出身で玉堂の門下である。花鳥を専門にして居る。熱心で開放で、筆を荒す事が少いから、従つてのびやかな豐潤な畫風である。抱一式とでもいふであらうか。平田東助子の息である。

鴨下長湖

楓湖の弟子で、感じを出す事には實に非凡な手腕を持つて居る。その上畫才が自由自在で、大き

洋畫界の分布

を一通り瞥見する事にした。此の方面に就ては、問題も多し、又言つて見たい事も澤山にあるのであるが、紙面がゆるさなから、それは又後日を期する事にして早速個人評に移る事とする。

石井柏亭

石井柏亭に就いて何より先に報告しなければ

洋畫日本畫界の新進

ならないのは、本年の文展に出品された氏の海港に關する二作の何れもが、之れまでにとりして感ずる事の出來なかつた或物を以て、記者のみならず一般の鑑賞者にまでも異常な感動を與へた事である。記者はあの二つの色と光とに接して實に何ともいへない驚きを起した。實に氏が近年の進歩といふものは目の覺めるやうであつた。今更で探して居たものに最も近いものを偶然につきつけられたやうな氣がしたのである。思ふに石井氏の畫には從來の他の人々の藝術に比して、甚だしく日本的、東洋的なところがある。そしてその底にはまた力強くせまつて來る豐潤な情緒がさながら波の大揺れのやうにたゞよひつゝ、まれて居る。細い／＼糸を一束にしなやかに編み上げたやうな而も何等の抵觸なしに吾人の感能をふつくらと包み擁するやうな味を忘れる事が出來ない。天才

—どうもそう説明するより仕方もない。

南 薫 造

荒い、強い、そして温い、香の高い藝術である。それで居て、情趣の豊かな事と東洋的な特色の多い事とは前の石井によく似てゐる。併し、同氏が歸朝當時の作品等から見ると、圓熟といへばさうもいへるかと思ふが、どうも食ひ足りない、ある屈托のやうな氣分に引込まれるやうに思ふ。南自身の内部の力が又はその作品の内部の力が、以前程には吾々の胸を打つて来なくなつたやうに思ふ。旅——旅——その昔の旅の空の濃緑を思ひ出して今の滞りと暗さとがやるせなく思はれる。此人にも裝飾的な、原始的な處は充分にある。心の火が暗くなれば、人は自然の假面にひざまづかねばならない。それは悲しい、チレッタイ事である。

有 島 生 馬

有島の作品で最も印象の深かつたのは、「宿屋の裏」といふ外國で製作したものであつた。快活な、摯實な、鮮かな、その中に溢れるやうな近代の動搖、理解、情趣、そして得も言ひ難い力のある氣品、溢れてつきない藝術の深い、瞑想、それをあの一幅の畫の中に見る事が出来た。また島崎藤村の綠蔭叢書やその他の集の爲めに書いた挿畫等からも、さうした同感と喜悅とを得る事が出来た。落ち著いた、しなやかなその藝術の裏にはまた捨て難いある貴いもの、あるのを見る。本年の「藤村氏の肖像」などを見ると、さういふ意味の落ちつきは尙一層強くなつて来たやうに思ふ。歸朝當時の氏を銀のナイフとすれば、今の有

ある。

島氏は香りの高い酒を盛りあふらせた光澤のある大きな器のやうに考へられる。

齋 藤 與 里

ある意味に於て、齋藤與里氏は最近繪畫界に於ける一先覺者であるといふ事が出来る。實に從來吾國洋畫界の有様は、繪畫製作の上に外面の摸倣と、色彩の配置とそれからある物語をそのまゝ、形而下的に紹介する以上の道を知らなかつた、心靈の方面から及ぼす繪畫の生命の如何といふやうな事はまるで考へては居なかつた。自覺に乏しい個人的意識の乏しい、遊んで居る、言はば畫かきといふやうな頭腦のものが多かつた。さういふなまけた生命のない藝術に對して、兎にも角にも強い反省と新氣運の暗示とを與へたのは、此の人であつた。日本人として直ちに呼吸し得べ

洋畫日本畫界の新進

き「吾」の藝術の口を切つて見せたのは此の人であつた。さういふ意味に於て境界の明らかでない、恰も繪畫を一つの細工物のやうに考へて居た我國繪畫界は蘇つた。これは氏の爲めに特に記憶せねばならぬ事だと思ふ。

かやうな立場に立つた齋藤の藝術は、強烈な主觀と色彩の重視によつて、極端な力強い一傾向を示して来た。吾人は物の形でもなくまた色彩でもない、全體のあるものを透して直ちに作者の精神生活、作者の靈の響をきく事が出来るやうになつた。吾人は、感銘といふ點に於ては、本年の文展に現はれた氏の作品よりも寧ろフューサン會前後に現はれた氏の作品の印象が深い。實際、讀賣社樓上に開かれた一小藝術の袋は、今までに經驗した事のない満足をも吾人に與へた。特に此のフューサン會が生んだ

岸田劉生

の藝術は齋藤の主張に具象を以て相應するものであつた。フューザン會分散後に於て岸田君の繪畫は更に甚だしい進歩を示して來た。その進歩は一に自覺の深味といふ事であつた。思想の戰慄といふ事が若し言へるとしたら、岸田の繪畫から受ける印象には皆此の強い力がこもつて居た。岸田は忽ちの中にロマンティックなカリストの殻を打破つて更に便利で更に痛烈な立場に到着した。此人に關聯してフューザン會分散後を受けたともいふべき四人展覽會がある。それは此の人とそれから

るもので、見通す事の出来ないグループであると思ふ。別に齋藤の個人展覽會が、企畫されつゝある。高村の立場も岸田氏の立場も大凡は同じやうな處にあつて、又等しくカリストである。新運動の先驅者ではあるが、おのづから右の三者共に未だ岸田程の成果を擧げ得ないで居ると思ふ。かやうに、色彩上の表現を主とする方面に集まつて來た人達の中にはまた多くの新進氣鋭の畫家がある。それは

山下新太郎

それから梅原良三郎、中村彝、山脇信徳、正宗得三郎、安宅安五郎等である。これ等の人々は一々相異つた感覺を有しながら、その生命を色彩に託するといふ事に於ては一つである。中村、山脇等は近頃餘りその作品を見せないから何とも言へな



坂道

坂道 森田恒友氏作

高村光太郎

及び木村莊太、岡本歸一の四氏によつて組織され

いが、山下の藝術等には、畫面に溢れる色彩の絢爛なる舞踏によりて、眩惑しつゝその畫面の中に吸ひ込まれてしまふやうである。梅原良三郎の畫も。以前から見ると餘程定著した自己の面目を露はして來た。これからが面白い處であらうと思ふ。さういふ一種の浸透的な感じからいふと正宗の作品はむしろ、その強烈な色彩によつて見る者の感覺を刺すといふやうな心持がある。言ふ迄もなく舊フューザン會に系を引いた連中の藝術から見ると、同じカラリストではあるが、餘程趣味が異つて居る。

津田青楓

の藝術である。特にその靜物に於ては暢達流麗して淀む處なき美の結晶である。此人や、

森田恒友

富本憲吉、坂本繁次郎等は各相異つた特色と考へて持つては居るが、等しく認める事の出来るその素朴な味ひとさういふ意味の努力とに於ては

阪本繁次郎

緊張した個性を描出する事に於て、若々しく堂堂たる態度とすぐれた手腕を有つてゐるのは阪本である。此の人はその技巧よりもむしろ思想の早

發揮とに多くの希望を囑し得ると信ずるのは

倉田白羊

である。一貫した感銘に於て、先づ倉田の藝術から得るものは、天眞といふ事である。あらゆる意味に於て同氏の藝術から流れ出るものは此の人格的天眞と自然とである。たゞそこに氏の特色として、徒らに他の摸倣に走り難い、牢乎たる藝術的鬱屈がある、倉田の藝術が吾人に與へたある強い感銘は、何の衰へを示す事なくして永く吾人の鑑賞慾をして、豊かな期待を有たしめる。如何なる藝術に於ても、吾人はかゝる鬱屈に對して敬意を拂はずには居られない。

更に一轉して現代の風景畫家として吾人は

山本森之助

共通して居ると思ふ。殊に森田は漫畫といふ畑に於て異常な特色と權威とを有して居る。漫畫に於ける氏の手腕は、その温みと鋭さとを併せて居る深刻なる人生觀察眼と、それを描出する際の巧妙を極めた手腕に至つては、我國現代の漫畫挿畫かきとして他に追隨を許さぬ幾多の力を持つて居る。森田について思ひ出されるのは

長原止水

である。裝飾畫家としての長原止水の名は決して新らしいものではなく永く吾人の目にあるものではあるが、その異常な創作の天分と特色とには敬意を拂はずに居られない。日本畫に於ける籟木の立場に似て、その名の古きに拘はらず、尙甚だ將來のある人と考へる。長原に關聯して、その名の深く感銘されつゝあつたと同時に、將來の變化と

洋畫日本畫界の新進

吉田博、中川八郎、石川寅治、河合新藏、加藤静児、田邊至、跡見泰等の八九氏を數へる事が出来る。此等の人の藝術は、その最も自然に忠實なる點に於て殆ど獨壇場に活躍して居るの概がある。さりながら、之等の忠實なる風景畫家は、專念自然模倣、自然再現といふ事にのみ努力する人達であつて、眞の意味の藝術的見解から言つたならば、それは専ら外面的に批評されるべきものである、殊に山本森之助は之等の一群中に就いて最も大きな努力家である。

吉田博

である。中川氏に似て尙一層の特色と趣味とを見せて居るのは

である。彼の畫には妙に若々しい華やかな處が消えないで居る。そしてその自然を模寫する技量に於ても殆ど完璧に近い。尙、さういふ意味の群の中に、和田英作等も互角な力量を有して居るといはねばならぬ。

中川八郎

も亦已にある落着いた確實な境地に達して居る。言つて見ると文壇での平面描寫といふやうなものの極致に至つて居る。穩やかな筆づかいに些の無理がなく如何にも動搖のないおちつき拂つた形

中澤弘光

である。此人の作物には常に何等かの劇的なものがその背景に潜んで居る事を感じる。勿論、中村不折や、鹿子木やの中にある劇的のものとは自ら全く別種のものである。只此人達はその劇的な表

藤島武二

の藝術は前述山下新太郎の藝術と共通する所がある。新味もあり又色調上の天分に於ても異常な長所を持つて居る。その内容はとても比較にはならないけれど、美しい畫をかくといふ點で思ひ出されるのは

岡田三郎助

であるが、肖像畫家としてはまだ和田英作に劣る處があるであらう。此人はむしろ、感じを現はす上、於て優れた腕をもつて居ると思ふ。さういふ點では和田にまさる事數等であると思ふ。此人は寧ろ感傷的な人だ。

小杉未醒

現を常に寓意に避難して、決してその物の中程に入るといふ努力を見る事がないといつていい。他の大家連はいさしらず、さういふ意味に於て、吾人はある望を中澤にかけるものである。といふものは中澤の畫には自ら全體としての深味がある。たゞそれが氏の深い自覺に捧げられて居ないといふのが同氏の現状であるからである。中澤の藝術とは全くその赴くところを異にして居ながら妙に聯想を起させるのは

和田三造

の藝術である。彼の強く荒々しくして大膽な畫風も近頃では餘程渾然たる一つのものに變化して來た。全體あまり感じの深くない畫をかく人であるが、何かまだ展開し提示しつくさぬものを有つて居る人であると思ふ。

は石井、南の二氏と共にその裝飾的な畫風に於て互ひに相ゆるらぬ力量を有して居る。たゞそれがどうも外面的に持ちあつかはれる傾が多いのは遺憾である。とはいへその漫畫に至つては、森田にまさるとも劣らぬ練熟を有つて、現代の珍であつたと思ふ。小杉はまた文學の方面にもある一面の好尚を持つて居る。一種のロマンティストである。

今年の展覽會に「ハチスとシオニ」を書いた

五味清吉

はその手法に於て著しくアカデミックな處のある人ではあるが、あの畫などで見ると、色彩の力の強さには驚かされた。それだけで充分人を畫中にひき入れた。その内容乃至物語の表現如何は、さういふ立場から見ればおのづから第二の問題で

ある。

柳敬助

といふ人の畫は餘り澤山も見て居ないが、臆ろげな記憶によるとのびやかなそして冷たい美しい畫であつた。全體としてまだ尙甚だ前途のある人であると思ふ。此人の肖像畫には滑らかな光りのある中に何處か陰鬱な氣分がつきまとつて居る。

尙有望なる新進畫家として

山本鼎

をざつと考へて見たい。摺實——先づそれを思ふ山本の畫にはしんがなかつた。一點一線を考へ考へつけて行く人で、而も現實味の非常に勝つた畫をかく。畫も自然であるが人間も亦至つて自然兒である。まぢり氣のない心持を持つて居る。その

赤松鱗作

心持はまた甚だ豊かなデリカシーをもつて居る。版畫に就ては特に才分を有して居る人であると思ふ。油畫よりもむしろ此の方に光明を認める。以上で大體を終つたつもりであるが、尙、現代の傾向として見通す事の出来ないのは前に述べた中澤弘光等と同じやうな歩調を取つて居る人に

足りない點も非常に多く、殊に擧げなければならぬ人でまた擧げ切れずに終つた人もあるやうに思ふ。取り亂れ勝ちな點は、偏へに讀者諸君の諒を乞ふ次第である。(紅之助)

白瀧幾之助、矢崎千代二の三氏がある。之等の人に對しては今格別に之れといつていきまゝ程のものを持たない。むしろ三氏が今後の内部的努力の效果に期待せなければならぬと思ふ。之等の三氏や中澤の前途に對しては慎重な注意を拂ふと同時に、行つて見て失望に終つてもひどくあきらめられぬといふ憂もなからうかと思ふ。

匆卒の間、筆を呵して、順序もなく、また言ひ

洋畫日本畫界の新進

新聞界の中心人物

▼吾人の爰に論せんとするもの、新聞其ものにあらず、唯今日、如何なる人物が、其の中心として將た其の實力として、斯界に働きつゝあるかを觀んと欲するもの。

▼近時、新聞界の趨勢は、時代の推移と共に變化し、文章と議論を生命として、少數の識者に讀まれんと欲するの時代は過ぎて、今や少數者を犠牲とするも、多衆に喜ばるゝを目的とするに至れり。

▼斯く營利的報道的となりし結果、記者を迎ふるの標準、又従前と異り、名より實を取る。随つて勤務の内外に依つて位置の高下を別たす、上下

一様に足と手と耳と目との働をなして、常に活社會に接觸す。

▼是を以て今日新聞界の實力となりて活動せるは、概ね無名の士とし、適々虚名ある者なきにあらねど、之れが爲め必ずしも勢力あるにあらす。

▼随つて昔日、福池櫻痴、福澤雪池、矢野龍溪等を中心として未廣鐵腸、藤田鳴鶴、末松謙澄等の諸豪が椽大の筆を振ひて論壇を飾りしが如きと、其趣きを異にす。

▼『東京朝日』の編輯長兼社會部長北江、佐藤眞一は、公平無私にして、是非を苟も口にせず。寔

に一個の適材たり。

▼同社經濟部長としての哲壺松山忠次郎は近江土山の産にして、彼の穩健なる經濟論は世既に定評あり、然共人物手腕に至りては、到底弓削田の敵にあらざるが如し。

▼同社の中心人物中見逃すべからざる一人は、大阪通信部長たる弓削田精一なり。彼は同志社の出身なるも基督信者にあらず、頗る豪傑肌にして、志士的風骨を存す、事に臨むや一切の情實を打破し盡さずんば止まざる底の勇あり。

▼近時文壇に名を得たる者を楚人冠杉村廣太郎とす。同社に調査部長たり。「七花八裂」「大英遊記」「半球周遊」厲人厲語等の著あり。彼の文を行るや勁健にして自在、新聞記者中の文章家を以て稱せらる。

▼外報部長米田實は、米國に苦學して、社會學に

造詣するところあり、マスターオブアーツの學位を得るや、一時『日米新聞』に主筆たり、四十一年朝日社に入りて、目下外國電報及外國問題に關する社説を擔當しつゝあり。

▼此外社會部次長に山本笑月、電務部長に獨醉西田雄説、政治部に石川半山、宮部敬治、荒木貞雄軍人部に無人冠黑澤十太、經濟部に根岸信、社會部に松崎天民等皆斯界に名ある記者にして、實に同社の實力的中心人物なり。

▼『時事』は故福澤翁の息捨次郎を社長とし、石河幹明を以て主筆となす、此外編輯に植松良藏、一色信一、社説部に安岡秀夫、小山完吾、板倉卓造、政治部に櫻井轍三、經濟部に對島機、外報部に川面弘、地方通信部に金子千十郎、大阪部に熊崎健一郎、社會部に永島今四郎、文藝部に柴田勇、少年部に安部季雄等あり。

▼石河は温厚の君子人の如くなるも、何處やらに水戸風の氣質あり。同時代に入社せる高橋義雄、伊藤欽亮、北川禮弼等は既に皆去つて久しく、彼のみ一人殘留して、今日耆宿としての位置を保つ豈偶然ならんや。

▼小山は一個の才物にして、新聞記者には珍らしき程の謹直家也。今日に至るも未だ吉原の方角すら知らずと云ふ。彼の論説は極めて平凡單調にして、英國の知識の頗る貧弱なる英國通なり。然共社内にありて何程か幅を利せる、彼が福澤一太郎の女婿たるを知らば、何ぞ深く怪むに足らんや。

▼對島は人格技術俱に疑ふべきものもあるも、確に伶俐なる男也。新井内閣に不遇なりし彼も、石河内閣の成立と共に經濟部主任に榮轉せり。

▼川面弘は同社内中の精勤家にして、眞面目なる人物也。現に外報部の重鎮たり。

▼安岡は土佐の名士安岡雄吉の弟にして、世に著聞せざるも、常に論説を擔當し、人物の温厚にして有能記者の評あり。

▼社會部長の永島は、曩に朝野新聞に在るや、小説及軟派の記事を擔當し、艶麗の筆頗る紙上に光彩を添へ、江湖の歡迎を受けたたり、現に敏腕の稱なからず。

▼『大阪毎日』は近時驚くべき勢力を以て關西を風靡し、更に餘力を關東に延して、正に新聞界の覇者たらんとす。即ち曩には電報新聞を購ふて毎日電報を起し、更に四十四年春東京日々を買収して毎電と合併し、著々大發展の歩を進めつゝあり。

▼『東京日々』の筆勢を主宰せるは渡邊巳之次郎なりと雖も、先の主筆盧吼相島勸次郎が代議士となりたるの故を以て辭せしも、只名義上たるに止まり、依然客員として執筆しつゝありて、恰も隠然

主筆の觀なからず。

▼東西聯絡部長玄川羽田浪之紹は隠れたる敏腕家にして、巴爾幹の事情に精通す。通信部長竹亭福良虎雄、社會部長冷洋松内則信、經濟部部長元山大岡保、支那通の石洋中西淳亮、編輯部に竹内金太郎、硬派主任に小松八郎、社會部主任に木村豊四郎等あり、俱に同社の實力的中心人物として、缺くべからざる働役者たり。此外編輯長朝霞大原里靖は人物の圓滿なると健筆とを以て推さる。

▼徳富蘇峰は『國民新聞』社の社長兼主筆たり。彼は朝比奈硯堂、陸羯南、三宅雪嶺、福本日南等と共に其の聲名を馳せたるもの。

▼然るに羯南は既に館を捐て、雪嶺は雑誌「日本及日本人」に楯籠りて隠然閩族政府の爲めに一敵國をなし、日南は身を政界に投じて、今尙筆を抛たざるも、最早新聞界の人にあらず。硯堂に至り

ては病を獲て以來漸く論壇に遠かり、亦昔時の盛名なしと雖も、時々『サンデー』誌上に現はるゝの文、例によつて道勁蒼古、流石に昔とつたる杵柄たるを思はしむ。單に文豪として見れば實に天下

一品たり。唯だ依然舊に依つて健在なる者を蘇峰とす。其の文絢爛の域を出で、平淡に入り、獨り官僚派の城砦に立て籠りて萬軍を叱咤するの狀、坐ろに人をして及び易からざるを思はしむ。

▼編輯長伊藤源一郎は、同社より新聞研究の爲め歐米に派遣せらるゝ事一年有半、斯界新知識の英雄たり。又事に熱心なる、一度其緒に就けば必ず其奥儀を極めずんばやまず、彼の植物學に於ける知識の如き、一例にして其の造詣の深き事、専門家と雖も、往々後へに瞠若たらしむることあり。▼副編輯長石川六郎、政治部長杉中種吉、外報部

長粟屋關一、經濟部長河上哲太、地方部長宮島眞之助、社会部次長太田茂、通信部長阿部鶴之輔等あれど、同社は由來社長專制にして、如何なる記者も自由に手腕を發揮する能はず、恰も社長の機關に過ぎざるの觀あり。

▼『報知』の前社長箕浦勝人は、其社長たりし當時既に虚名を擁せるに止り、編輯に營業に百般の全權三木善八の手里にありき。箕浦が大正の政變に際し、所謂國民黨五領袖の一人として退黨同志會に入るや、社長を辭したるを以て、今や三木は名實共に同社の主腦たり。

▼三木は萬朝の黒岩と共に、新聞經營界の二大天才と稱せらるゝ、稀に見る手腕家たり。

▼三木の命令に従ひて編輯を宰せる村上政亮は、現代の新聞編輯に於て獨特の手腕ありと稱せらる性質濃厚篤實の人たり。

▼政治部主任上島長久は『報知』の元勳にして人物濃厚、君子の風あり。唯病羸にして活動意の如くならざるを惜む。奈良の生れなるを以て笠山と號す。彼は新聞界稀に見るの能文家にして、曩に『釋元恭』の著あり。報知の一讀物たる十把一束は彼の筆に成る。

▼論說部主任默堂須崎芳三郎は二十二年の帝大政治科出身にして、岡山にて中學校長を奉ずる事三年、後大朝及日本に論說記者たり、後歐米を漫遊し、四十一年報知社に入る。彼の文章は尤も圓熟せり。

▼此外地方版主任生駒象藏、經濟部主任に森泰介、財政部主任に徳久武治、三面主任に高田知一郎、田中萬逸、二面主任に和井内喜徳、片切勝彦、相場主任に北川幾之輔等あり。同社内諸々の人物たり。

▼『萬朝報』は、頁の上に於てこそ小新聞の觀あれど、其勢力ある點に於て、優に大新聞の域に入れり。社長涙香黒岩周六は土佐人にして、慶應を中途退學するや、明治十四年改進黨記者を初陣として、爾來日本タイムズ繪入自由新聞、今日新聞都新聞を経て、遂に獨力奮闘『萬朝報』をして、今日の隆盛を致したり、彼は文壇の一將星以外、新聞經營の天才的手腕家としても世既に定評あり。

▼斯波貞吉は、圓城寺天山の後を承けて、編輯の頭目となりし者、語學に堪能にして、思想穩健著實なる學者肌の人物とす。

▼論說記者として名ある者、茅原華山、伊藤龜雄あり。茅原は洋行歸の才子、伊藤は圓満にして編輯の才幹ありと稱せらる。現に伊藤は、編輯部副長兼政治經濟部主任の重任にあり。以て彼の凡ならざるを知る。

▼茲に見逃すべからざる一人あり。古一念古島一雄とす。彼は新聞界の先輩故池邊三山、福本日南三宅雪嶺等と共に舊日本新聞にあるや、編輯長として驚くべき能力才幹を發揮し、一時古島新聞たるの觀あらしめき。彼の文章は奇警殊に雜錄の筆に至りては、將に天下一品の稱あり。然共今日彼は『東西南北』に隠れて、僅に其一端を示すに過ぎず。四十五年總選舉に際するや、理想選舉團の推す處となり、今や國民黨にありて縱横の奇才小犬養を忍ばしむるものあり。

▼此外に文藝學術部主任に緒方維嶽、政治部主任に代理に川尻東馬、同外交部長に高畑定次郎、社会部主任に中内蝶二、田村松魚、大倉桃郎、通信部主任に石井一二三、英文部主任に今井信之等の外尚有名なる實力記者として、谷壽衛、坂口二郎、田邊恒之の三者あるなど、寔に多士濟々の觀な

らす。

▼「讀賣新聞」社長本野英吉郎は、佐賀人にして本野大使の實弟たり。早稻田大學に教鞭を取りし傍ら同社の編輯を佐けつゝありしが、四十五年高柳豊三郎館を捐つるや、其後を襲ひたるもの。

▼主筆法學士の笹川潔は、餘程の伶俐者なるらしく、如才なき男と云へば足る。

▼此外田村全宜の二面主任、上司延貴の三面主任人見圓吉の五面主任、横山達三の日曜附録主任など、必ずしも新聞界に重きをなされ共、其社の實力たるや必せり。

▼「やまと新聞」社長の松下軍治は惡辣なる一個の相場師なりて、外、新聞界の人物として評論すべき價値ある男にあらす。然共彼の手腕の一種不可思議なる、山縣系を標榜して、大膽なる大提灯を吊ける處、然も一度夕刊を發刊するや、斯界の著

宿「報知」をして顔色なからしめしが如き、又彼が如き、經歷人格を以てして、二度中央に於て代議士の月桂冠を得しが如き、侮るべからざるは、一種不可思議なる彼の辛辣なる手腕也。

▼主筆高木信威は、女性的なるが故、陰險とか奸諂とか誤解さるゝの人、彼が如才なき處世振りは己れ以上の者の股間の一物を握るに妙を得たり。

▼此外編輯長理事に日田卯一郎、經濟部長理事に安田與四郎、政治經濟部外交部長理事に福田常松、社會部長理事に小川多一郎、同外交部長に加藤進、地方部長に梅原喜太郎等の幹部を以てなる。

▼政友會唯一の機關新聞たる「中央」に社長たるは元大阪市長として何程か手腕の見るべきものありし鶴原定吉也。理事の吉植庄一郎は政友會代議士中饒舌を以て名ある男、曾て北海道札幌に新聞を創刊し、更に北海タイムスに理事たりしが如く、

新聞經營に關しての智識は幾分有之るらし。

▼主筆高橋光威は原敬大臣の腰巾着にして、近來大に大家氣取りとなり、盛んに大駄法螺を吹きつゝあり。始め福岡日々にありしが、後ち米國に遊び、原敬に招かれて「大阪新報」に入る。其米國に在るの時、姑らくカーネギー家に客たりしが令嬢の袖を牽きて十二吋砲を食ふの大失敗を演ず以て彼の自惚強き男たるを知るべし。

▼田村三次は新聞記者として稀に見る勤直家なり二十七年同社に入りて以來十有餘年、其間政治外交記者となり、編輯長となり、營業部長となり、理事となり、目下専ら社會部を擔當して傍ら政治記者たり、記者として營業部長たりしが如き、以て彼の萬能の手腕を察するに難からず。

▼社會部主任碧川企救男は早大政治科出身にして曾て報知にあり。年齢未だ三十四の新進也。

▼二六社長秋田清は、徳島人にして曾ては司直の府にあり。二六社に入りしは三十六年、福田和五郎の下風にありしが、何時とはなく勢力を得て、遂に秋山に代りしなり。何程か手腕の認むべきものあるが如きも、人物の點に至りては彼は福田に遠く及ばざるもの、如し。

▼「都新聞」言論部主任大谷誠夫は、二十七年同社に入りて茲に二十年一日の如く社務を執掌し、今や同社唯一の元老たり、年齢漸く不惑に達し、筆舌又漸く圓熟し來る。

▼山本信博は三十六年赤門出の法學士にして、爲人狷介、苟も所信を枉げず、文章に簡勁にして、寸鐵殺人の妙あり。都社夜勤に編輯主任たり。

▼此外論說記者として令名ある原成吉、一面編輯主任に麗水遅塚金太郎、政治主任に相原熊太郎、外政及市政主任に後藤長榮、經濟主任に黒木嘉市、

軍事主任に服部健三、社会部主任青々園伊原敏郎、文藝美術主任に春潮林田源太郎等同社の幹部として缺くべからざる人物也。

▼『毎日新聞』は古き歴史を有すること、本邦新聞紙中第一位にあると雖も、往年の盛名なく、微々として、漸次社会より忘れられつゝあり。然共、近來、紙面を萬朝式の簡勁直截の體裁に改め、記事に評論に渾て新意匠を加へ鬱勃たる意氣見るべきものありと雖も、如何せん年來の衰運は遂に挽回し得べくもあらざるが如し。

▼前社長武富時敏は、頭腦明晰、辯論莊重、風采既に紅木屋侯爵の名あり。殊に彼の豫算通は民間稀に見るのもの。

▼社長兼編輯長三浦勝太郎は、舊日本新聞社の經濟部主任たること十餘年、三十九年三宅雪嶺等と共に連袂退社せる一人にして四十年『報知』社

に入り、四十二年毎日の改革に際し轉社せるもの社会部主任に平井晚村あり。

▼本邦唯一の實業新聞としての『中外商業』に社長たる者に野崎廣太あり、主筆に島田重就あり、野崎は一面實業界に關係し、現に三越呉服店取締役及鐘ヶ淵紡績會社の監査役であり、陰に實業界に敬重せらるゝ操觚界の一異材たり。

▼同社の實力的中心人物に村上幸、築田飯次郎の二人者あり、前者は米國仕込にして機才あり、専ら外務省通商方面を擔任して、野崎社長の股肱たり。後者は現に經濟部長にして理事たり。資性穩健にして、斷じて輕舉喚動の風なし、東都經濟記者界の雄を以て稱せらるる故なしとせず。

▼三宅雪嶺等連袂退社以後に於ける『日本新聞』は、社運次第に傾きて昔の面影なし。

▼社長伊藤欽亮は嘗て『時事新報』記者として名

ありしも、『日本』社長としては餘り成功せざるが如し。唯彼は長州の出身なるに似ず憲政擁護、藩閥打破の急先鋒となり、火の如き論評に氣を吐く所、珍とすべく、又威とするに足る。

▼社説擔當記者林毅陸は慶應大學の教授として、政友俱樂部の領袖として、近來漸く頭角を上げ來れる少壯政客たり。

▼編輯長小山内大六の生地弘前は政黨熱盛んにして、黨争激甚を極む、爲めに彼又政黨問題の趣味を有し、議論風發、筆端又火を吐くの概あり、彼は社中の重古參者なり。

▼海外經濟の部面を主任せる石川義昌は三十六年米國コロンビヤ大學に遊び、マスターオヴアーツの學位を得、更に同大學の懸賞文に當選して三百圓を得たり。彼の豊富なる學識と、海外經濟事情に精通せる操觚界の重鎮の一人たり。

新聞界の中心人物

▼大阪言論界の權威たるものに、『大阪朝日』あり、大阪毎日あり。兩社は相對立し、相雁行して、互に下らず。常に大阪言論界の權威として、正に斯界の分野を裁斷せるのみならず、優に關西の言論界を風靡しつゝあり。

▼『大阪朝日』の社長村山龍平は夙に新聞王の稱あり。彼が資産、彼の片腕たる上野理一と共に、今や壹百萬を越すと稱せらる。凡そ昔日の一窮措大と稱せられたる如何はしき貨殖方法に依らず、又何人の保護にも倚賴せず、尤も經營難の稱ある新聞事業のみに依りて此の富を累ね、頂天立地獨行して言論界の權威たる地歩を占むるもの、彼れを除いて他に何人を求むべきぞ、彼は此の點に於て既に偉なり。

▼『大阪朝日』が都てを以て、彼が人格の表現と見るもの、未だ全然首肯すべからざるものありと雖

も、『朝日』を離れては彼あらざるが故に、彼を知らんと欲せば『朝日』を見ざるべからず、『朝日』が常に商賈に拔かりなきと共に、時には又算盤勘定を度外視したる快舉に出で、世人を驚かすものはれ村山の性格を語るもの。彼は一個の商才なると共に士魂を有するものに庶幾きが如し。

▼『大阪毎日』の本山彦一は、村山が『朝日』に始終して、『朝日』を離れては彼なきが如きとは、全く其趣きを異にせり。乃ち本山は普通商事會社の社長と殆んど選ぶ所なし。近來毎日が代理部を置きて、營業稅免除の商法を營める、是れ本山の本色を發揮せるもの也。彼は全くの商才一片の男たるが故に身を處すること巧慧なるも、村山の如く士魂を有せざるが故に、儲けにならぬ所には力瘤を入れざるが如し。

▼然れ共『毎日』が常に問題を捉へて、社會の表面

に活動するを怠たらず。特に新思想に觸れ、新潮流を汲むに努力を惜まざる、縦令淺膚なりと雖も尙多とせざるべからず。此點に於て『朝日』は往々受太刀となりつゝあるの觀あり。即ち生氣の潑刺たるは、本山の或は村山を駕すと見るべきに似たり。

▼兩社編輯局の幹部を見るに、『大阪朝日』は、元老西村天囚を初めとして鏘々たる記者に主筆鳥居素川、渡邊霞亭、土屋大夢、長谷川如是閑、牧野放浪、磯野秋渚、石橋白羊、岡野告天子、丸山侃堂、本多雪堂、木崎好尚、高原蟹堂等あり。『大阪毎日』には、主幹渡邊巳之次郎、營業部長高木利太、社會部長菊地幽芳の元勳を初めとして、實力的記者に高石眞五郎、奥村不染等の豪ものあり。而して茲に面白き對照は、前者の記者に旋曲りの連中多く、後者に常識家若くはハイカラ記者多きこと

是れ等

▼『大阪新報』は明治三十三年八月山田敬徳の創立になる、現内務大臣原敬は此所に社長たりしことあり。前白耳義公使現貴族院議員たる加藤恒忠社長兼主筆となるに及びて、銳意紙面の改良を圖り、新進の俊髦を網羅し、漸く大阪言論界に重きをなし來れり。幹部に中山太郎、古内省三郎あり。

▼大阪新聞界の二大王『朝日』『毎日』既に東京に逆襲し來りて『朝日』は『東朝』を、『毎日』は曩きに電報新聞を買収し、更に『東京日々』をも併合せり。東京の新聞中、豈に一矢之に酬ゆるの氣概あるものなからんや。

▼勢力、信用の點に於て、東都第一流の名ある『時事新報』は明治三十八年三月、其分身たる『大阪時事新報』を創立せり。同紙發刊以來其經營の任にあるもの、多年『東京時事新報』にありて老練

新聞界の中心人物

の名ありし高見龜、堀勘一の兩人者にして、堀は現に同社の代表者たり、高見は主筆として編輯を主宰せり。

▼『大阪日報』は淡紅色の用紙を以て特色あり。大阪評論、大阪通信は其前身なり。白眼吉弘義茂は創刊以來の社長にして、主筆山路愛山、正岡藝陽、法學士柴原龜三郎、法學士藤村守壽を経て文學士白河鯉洋現にその任にあり。

▼其他大阪には、『大阪日報』の分身に『大阪日々』が今夏國民黨副領袖直彦を迎へて、社長兼主筆とし、銳氣發展を試みつゝある外、小田垣哲四郎を社長とし、主筆に多田生三を戴ける『大阪朝報』等あれど、未だ大阪言論界に重きをなすに至らず。

(新馬劍魂)

國技館内赤裸の人

▼兩國橋畔に於ける龍闘虎搏、年を逐ふて人氣愈々沸騰し來る、角瓶は遂に米の飯となつたる觀あり。年に一度の興行を、何度見ても飽かぬ興味は口になづまぬ米の飯と一般也。

▼國粹妙技の大扁額、これぞ斯道の金看板として其の筆勢の雄渾壯逸、仰いで胸のすくものあり。寔に現代は角力道の大全盛、古今の天下に獨歩の概なくんばあらず。

▼鐵骨國技館の大建築に入りて、先づ眼底に映ずるものは、天井裏に於ける全勝力士の額縁寫眞なり。年に二回の優勝者を掲ぐるを例としてより、既に九枚を掲げ終る。殘す處の餘地、尙二十三箇所あり。

▼之を年月にして正に十一箇年半、光陰は矢よりも速かにして、國技館の土俵に、業に已に四箇年半の歲月を経たるを知らず。

▼此間に於ける力士界の榮枯盛衰、人は不識不知の中に變遷す。梅と常陸、太刀と駒とは、好對照者としての記録を新にし、太刀山遂に傑出し、風は挺然として其頭角を尖出せり。

▼出ると負け、破もぐりのヘナチヨコ力士は、此運命に支配せられて、觸て枯草の如くに朽ち果つるを覺らず。斯くて今後十二年は、如何に運命の手の翻弄を見るべきぞ。之を懼れずして土俵に立ち、鬘力を恃みとして、徒らに大飯をバクツク者實に憫むべき限りならずや。

一 西 方

▼之を團體としての東西の盛衰に見る。舊時東方として全盛を極めし常陸山軍の、今は西方として萎靡沈衰、殊に今夏五月場所に於ける敗戦の跡、草離々として月冷かに照すの感あらしめし、其の盛衰の餘りに際立てるは吾人角通ならざる者と雖も感慨無量なるものなきを得ず。

▼西軍の總大將常陸山谷右衛門は、最早問題の人たらざるが如しと雖も、大將は大將だけの器量有す。如何に老いたりと雖も鯛は鯛だけの價値を存す。彼は慥に鯛也。

▼三横綱の立合に於て見る、太刀は驕慢にして其角力振野武士的、草相撲式也、梅は自重に過ぎて勇足らず、餘りに星を氣にするが故に引分相撲を取ること多し。此點に於て常陸は正に横綱の貫祿

國技館内赤裸の人

を示す。彼の衰宕、敵を受けて怯まぬ立會、突いて來れば之を剣返し、押して出れば之を押へて取る、貫祿の重味、須彌蒼海の如く廣大にして、天下無敵の極印付、今更ながら彼は名力士也。彼の立會の貫祿は恐らく東西筆頭第一ならん。

▼斯く彼は土俵上に於て、角力道の開祖野見宿禰以來の第一人者なるのみならず、土俵以外に於ても、又技倆卓絶、識見超群、意氣豪邁にして、常識の圓滿に發達せる古今の力士中、未だ其比を見ざる非凡なる力士也。

▼目下東西を通じて、幕下力士中の有望と稱せらるる者に、千葉ヶ崎、大錦、太刀の花、九州山、綾川、對馬洋、栃木山、我洋、苅藻川等あり、是等は殆んど出羽ノ海部屋に屬するもの多し、寔に常陸の門下は多士濟々にして、將來の役角力たるものを多く有する、彼を措いて他に其比を見ず。

此一事を以てしても、彼の超邁なる手腕を見るに足らん。

▼風雲急に龍虎を起して、山崩れ地裂けんとするの光景は、是れ駒ヶ嶽が太刀と相雁行せる盛時、太刀との取組に名乗を受けて登場せる刹那のことなりき。

▼然るに今や、太刀駒時代も夢と過ぎて、春秋幾變遷、彼は武運に副ふこと多く、これは薄倅に追はるゝ事繁し。太刀が運慶作りの金剛神よりも、更に雄大なる異體を土俵に示せるに反し、駒は肉落ち氣枯れて、心も淋しげに歩み來る、此の對照を見るだにも、榮枯盛衰の理、眼前の夢幻と漂よみ茫々然として、過去を思ふの情、幾多角通の涙を誘ふものあり。嗚呼駒は正に衰へたり。

▼今日の太刀が一角、駒を粉碎して餘りあるの勇を見て、太刀の猛勇剛力を三嘆するは、これぞ駒

の衰境を申すの聲也。單に太刀の盛事を讚賞するの徒、これ一を知つて、未だ十を知らざる迂見也。駒は正に衰へたり矣。

▼彼に、悠々迫らざる應揚なる態度あるは、是れ大男總身に智慧が廻り兼ねたるが爲めなり。彼は馬鹿駒を以て呼ばる。

▼然共彼の薄野呂なるは世事に於てのこと也。土俵上に於ては中々他力士の知らざる智略を有せり。彼が手取角力を弄殺するの技倆は、東西三役出其比を見ざる也。

▼殊に不思議なるは、彼が見掛けに寄らぬ神經質なるにあり。彼が苦手殊に風に對する其前夜の如きは、平素の無頓着なる彼には非ず、其の策戰に苦心懺悔する狀、正に別人の觀を呈す、其結果遂に昂奮發熱するに至ると傳ふ。更に意外なるは、今夏場所風を倒し得て以來、愈々彼は神經を惱し

居ると。

▼西軍の副將、正位の大關たる西の海灘右衛門は體軀愈々堂々と、恰も錦繪に見るが如き、錦繡燦爛の肉體美を備へ來り、強味又一段と加はり來れりと雖も、土俵際の腰案外に脆く、横綱問題は遂に彼に來らざるに似たり。

▼殊に彼が近時の角力振を見るに、大關らしき程大なる所を示すものありとは云へ、其意氣に於て昔時錦洋時代の堅豪を缺ける處あるは、最早彼をして老衰の第一歩に入らしめたるに非らざるか、彼が近時、稽古に勉ならず、申合せを避くと傳ふが如き、彼にも既に早く蓋が立つたるなり。

▼關脇小常陸由太郎、未だ貫祿に不足あり。彼は以前一度小結を得し事あるも、荷の重すぎたるが爲め、一場所にして早くも破綻を來し、陥落の悲境に沈淪したり。彼は精神の氣に富み、出足の敏

捷を利用して、獅子奮迅する處、正に土俵上の生氣潑潑たるものありと雖も、四つ身の角力に些の術を有せざるが故に、到底役角力にあらず。四つ身に勝味なきは、彼に上丈なき自然の缺所を有する爲めなり。然共彼をして中樞に位置せしめば、正に西軍の人氣力士として、働きのたるや必せり。

▼彼は江戸ッ兒にして、舉止活潑、伶俐にして頗る愛嬌に富む人氣力士なり。而して自己の責任を解せる、心掛けのよき力士也。彼が稽古に熱心なると、土俵上に潔きよきこと、現今の伊勢の海と共に東西の双璧なり。

▼彼が未だ所謂由坊なりし時代は、某年寄の彼を以て、精々貧乏神上りと評せる位なりしに、兎も角五尺二寸てふ小軀を以て、今日の健闘振を示し得しもの一に彼の稽古熱心に由らすんばあらず。

▼小結龍ヶ崎松太郎は、東軍の玉手山と同型の曲者也。互に誦詐虚構、眞實の表に奇計を備へて、敵手を陥穽せんとする處、彼の妙味は此所にあり。

▼彼は業師たると共に、膂力又相應に之を備ふ。彼の戦法は、恰も日露の役敵將黒鳩が、滿洲の野に豫定の退却を試みたるに似て、逃げ廻りつゝ敵の破綻を待つて、電光石火の如く逆襲をなし、奇効を奏するにあり。

▼然共彼の角力振り、餘りに洒落なるが爲め、一部人士よりは弱卒の譏りを受けつゝあり。或は小結としては、其貫祿にあらずとするも、前頭二三枚所の闘將たるや必なり。

▼朝潮太郎は、東軍に取つての唯一の大敵なり。彼や近來、技術漸く老熟の域に進み、大々豪の風采を備へ來る。其愛嬌ある目付、角力らしき青髭愛嬌ある口元、力士中の好男子也。男らしき男也。

▼彼が兵を行ふや、必ず正々堂々、正前より改め進み、其行く處大丈夫の途也。彼は眞に正機良師の器也。彼が強行的の突張は頗る猛烈を極め、右四つの上手投げは、東軍中主將太刀を除けば未だ強味あるもの非ず。

▼然共、惜い哉、彼は餘りに自己の腕力に恃んで強引を行ふが故に、屢々敗を取ることあり。若し彼に自重せしめたらんには、正に大關の器なれと彼の氣性として、或は望むべからざるやも知れず。

▼梅川五郎藏は、高無双の名手千年川の弟分也。彼は小錦に足のなき角力と云ふ型也。近時彼は稽古を怠るが故に生氣の見るべきものなしと雖も、未だ捨つべき力士にあらず、彼の双差は既に定評あり、彼の缺所は腰の運用拙劣なると、出足の鈍きにあり。

▼來春場所には小結の榮位に昇進すべき近江富士

初治郎は、大膽不敵なる角力也。相手選ばず足取りと云ふ香ばしからぬ慣用手段を註文する怪からぬ力士也。氣合を尙ふ角力の勝負に、甚だしく陋劣を感せしむるは彼也。

▼然共、其の口口の巧妙にして、角力上手なるは東軍の土州山以上の堅實なる處あり、且つ土俵際に於ける腰の運用など、素晴しきネバリを有せり。彼が勝つとも人氣あらざる所以は、彼が土俵上の人格缺如せるが爲め也。彼は餘りに理智に過ぎて意氣の高潔を缺く、正に彼は汚く勝つも、奇麗に負くることを知らぬ男也。

▼彼は、所謂近江商人の本場、一升と稱する八番櫛を平氣に使用する狡猾なる長濱人也。彼が人格に缺くる處ある、大に故あり。

▼醜男の第一人大野其太郎は、待つたなしの奇麗なる立合振り、角力度胸あり、且つ總身打鼎の力

量、東軍の闘將伊勢と並び稱せられたることありしも、惜い哉、彼に四つ身の精彩なく、只千遍一律、突いては引き、引きては突くのみなる野猪的攻撃振りは、最早敵の知る處となりては其効を爲さず、近時成績の見るべきなき大に所以ならず。

▼然共彼の所謂上突張りは、尤も要領を得たるものにして、其名手に太刀を第一に、駒、柏戸の四人者あるのみ。

▼八甲山は、濃厚篤實緘黙の性なるが故に、稍もすればお人好しの輕蔑を受く。彼は堅實樞樞の如くなれども、時にポツキと折れ安きと同様、四ツ身の術に不鍛鍊なるは、彼の昇進を見ざる未熟なる所以なり。

▼四海波太郎には恰も逆鋒流の上き處あり。土俵際の踵に目を有せるもの、如し。出足の神速にして輕快、四ツ身の手口に乙なる妙味を有し、さばき

て取る冴えに、却々侮り難き勢を認しむ。大湊とは其行ふ處差異あるもの、如きも、恰も兩國に彷彿たる處あり。彼にして、今一段の江戸前式稽古を積まば、西軍の老練として異彩を放つや必せり。彌高山万五部は、今夏場所初めて九枚目に附出れたる大阪脱走力士の一人也。今は水潜り専門にして、下より攻むる手口に、ネバリ氣の強味あり。恰も玉椿式にして未だ及ばざるの力士也。

▼綾浪源逸の角力は、手堅き商人と云ふ取口也。彼には些の山氣なきを尙とすべきも、餘りに首を捻り過ぎて、土俵上の活氣を失ふ。實に彼は頭腦の人なるが爲めに、勇足らず、判斷明晰に失して神經質也。

▼四ツ身に強身充分あるのみならず、背丈けもあり、且足癖は尤も敵を恐怖せしむるに足る武器、東軍の元帥太刀も、大關鳳も、關脇黒瀬も、曾つ

ては、此武器によりてやられたる歴史を有す。彼にあらしめたきは活氣也。

▼彼は力士中稀に見るの健脚家、二十有八貫の大軀を軽々と二十里の長途を徒歩して、些の疲勞を感せずと、是れ彼が日露の役、野戰砲兵として出征し鍛鍊せるもの。彼は金鷄勳章功六級を有す。

▼朝日松清次郎は、性質粗暴、傲慢不遜、寔に度し難き氣障力士也。嘗て井筒部屋に三段目たる時駒とソリの合はざるを理由とし、大阪に脱走し、彼地に於て又も朋輩と不合を生じ、再び舞戻れる歸新參也。

▼彼は今次の歸參に際するや「心を入替へました」と稱せるも、今夏場所に於て、桂對浪の大物言ひに協會の規則を無視せる行動に出でたりしが如き未だ所謂誠意を疑ふべきものあり。恐らくは彼れ三度大阪に脱走するの者か。

▼口唇の厚く大なるを以て「慕」の綽名ある宇都宮新七郎は、今夏場所多大の囑望を荷ひて入幕せるにも不拘、甚だしき不成績なりしは、是れ彼が堅くなり過ぎたるが爲めなり。彼は儘に新進氣鋭の上、勇姿爽颯金鐵鳴るの慨、彼が金剛力に敵手を吊る處、爲めに天地震動し、海潮の逆に上る底のものあり。彼は儘に未來を有す、大關の未成品也。

▼若夫れ、彼に缺點を求むれば、常に對手を引張ることのみ知りて、自ら進むことをせざるが爲め偶々弱敵に附け入らるゝ也。彼は大なる未成品なる丈け、角力に杜撰なる處あり、自力を恃み過ぐるが爲めに、沈著を缺く處あり。

▼彼の將基は力士界の大關也。少くも田舎初段に値ひす。又上手ならずと雖も、常に朗々詩を吟じて樂む、力士としては寔によい道樂也。

▼山田川清太郎は、宇都宮と共に入幕せる新進氣

鋭、將來侮り難き曲者也、彼の土俵には凄味あり強腕強腰なれ共、角力は未だ若し。血氣の勇はあれど、防備に甚だしき間隙あり、總てに於て、彼よりは宇都宮の方、數段の素地を有す。彼は恐らく中軸邊の闘將ならん。彼に増して遣りたきは身長と體量也。

▼小錦八十吉、彼は前名山泉時代に於て、出足の捷きと上突張の猛烈とを以て囑望されしも、四ツ身に術の乏しき、生氣を失へる近時の彼として、其不成績なる、寧ろ當然也。未だ二十七の若き彼が早くも若輩の氣味ある、大に戒めざるべからず、彼の師匠は、天下を風靡せし横綱小錦なり。反省一番師匠の名を汚す勿れ。

▼酒癖の惡るき、喧嘩好きの男は、東西力士中、立役勇次郎を以て第一とすべし。曾て八甲山と口論し、出刃庖丁を掲げて、土俵の上に八甲を傷つ

けし事あり。

▼由來青森縣人は頑迷點猪のもの多し、津輕生れの彼は其一人也。飲めば必ず狂亂痴態、喧嘩を賣るを屁とも思はぬ無頼漢也。喧嘩をすれば直に刃物を振舞す、極めて物騒なる男也。

▼碓潟は最早問題の力士にあらず。されど、立合は頗る早きものあり。是れ立合の早きにあらず、無造作に過ぎて寧ろ疎放なるが爲めなり。場所毎に成績不良、漸くドン尻に納り得しが如きは儼倅也。

▼彼常に豪語すらく「番附が昇りや取るが、下れば負るよ」と、彼果して廢業するかと思の外、未だ嘯り付き居る處案外口程になき男也。彼は既に人氣より遠ざかれるの人、待合に脂下るべき時機の力士たり。

二 東 方

▼梅ヶ谷藤太郎は、常陸と相離る能はざる歴史的力士也。常に常陸と共に、兩々相對峙して互に譲らず、相雁行して鎧を削り來れる内に、幾多の歲月は流れて、最早彼に昔時の盛事を見る能はずと雖も、今日角界の隆盛を促せるもの、彼は常と共に、其功第一に居るべきの力士也。

▼梅は常より後る、こと二年、二十六年初めて序の口に入る。而して彼は、僅に二十三歳にして早く大關の榮位を張れる。二十三歳の大關は、實に前代未聞の事にして、彼が如何に早熟の人たりしかを知る。

▼然共、早成なりし彼は、常陸の四十歳に比し、未だ三十六歳の若さなるにも拘らず、早く既に老衰凋落せり。彼が退隱に遅ること既に數年、東

軍現代の將帥は梅にあらずして太刀也。梅あるもあらずるも、東軍に何程の影響をも與へざるが如し。

▼梅は越中富山の産、由來、北國人は狡猾、冷血吝嗇の者多し。吝嗇家に情の人は擧げられ共、金満家は多し。是れ他人は如何あるも、我關せず的なれば也。梅此點に於て寔に申分なき性格を有す。

▼只に、梅のみにあらず、郷を同おせる、太刀も黒瀬も同一性向を帯ぶ、故に彼等には、土俵上の手腕以外、遂に何物をも求め難き人物なり。此點に於て梅は到底常陸の敵にあらず。されども太刀の如き傲慢不遜の態なく、表面至極優しげなる男也。

▼家庭に於ける梅を見るに、子を愛する以外、何等の趣味なく道樂なし、是れ梅が只に養子たるの故なるのみならず、正に彼の性格が然らしむる處

異技館内赤鯉の人

若し強ひて道樂を求むれば、煙草と觀劇ならん。

▼雄姿堂々、天下無敵の稱ある太刀山峰右衛門、彼は寔に其の名に背かぬ天下の横綱也。強いことにかけては、天下彼に比較するもの、未だ之有らず。

▼太刀は關脇に居ること五ヶ年十場所、駒に後ること五場所にして漸く大關を張れり。是れ彼が駒よりも弱かりしが爲めにあらず、一つには先輩荒岩、國見山等の實力が席を塞ぎ居たりしに因る外、彼が晩成の人たりしが爲めならずんばあらず。實にや彼は大關となるや、間もなくして更に飛躍横綱の榮位を贏ち得たり、現代の天下は太刀のもの也。彼は正に獨歩也。

▼彼に獨歩の稱あらしむるものは、彼の鐵砲也。彼の鐵砲は正に十二吋の大巨砲なり。▼彼が其巨砲を發するや、一彈を放てば、直に腰

を下して再發の準備をなし、再發し終れば又直に腰を落して第三彈の用意をなす。其の周到緻密にして、要領を得たる、敵手をして逆襲の隙を與へず、向ふ處、何物をも粉碎し盡さんす概あり。

▼近時、雷電の張手にならひて、太刀の鐵砲を禁すべしと云ふものあり。然共、彼近來大に四ツ身の術にも鍛錬し來れる處あり、加ふるに彼の怪腕強力、大抵の力士にては彼の揮にだに手を觸れ得ざるまでに捻り倒さるといふ。彼の剛岸猛勇、唯驚嘆の外あらず。

▼東軍の大關たる風谷五郎の人氣たる、寔に大したもの也。彼は愈々角力の變化に富み、強味も益益ゆたかになり來れり。白智豐顔、彼には一種菩薩式温順なる氣分の漂ふを見る。勝負の如何に關せず、眼を細くして、常にニコ／＼然たる所に、彼の面目、彼の價値は存す。

▼彼の取口は突進的一氣にありて、體と出足と力量とは大關の貫目に不足なきが如しと雖も、二の腰の用意に、未だ不鍛錬の所あり。昔時荒岩が土俵際に於て、横にガツチリと足を止めし用意の周到精練の、未だ彼に於て缺如せるが如し。是れ彼が、一氣に攻め行くや、時に大なる危懼を感せしむる所以也。

▼今夏場所駒の注文に依りて、土俵際に搦み投を喰ひたる、大に其故也。彼にして今一段二の腰の用意に精練を加へ、所謂得意の一氣押し光彩を加へたらんには、寔に完全無缺の大關たらん。

▼根岸部屋の變物、來春の新張出大關たるべき伊勢濱慶太郎は、其角力振の堅牢なること、正に金城鐵壁、一度自己の勝手に入るや、決して敵を逃がさぬ處、彼の特長也。而して彼が、敵を押へて持と行く力は、東西其比を見ざる處、腕に百貫を

扛ぐる項羽の勇も、巖を投げ返す淺利の剛も、今大力無双の伊勢に於て、認むるを得ると云ふべきか。

▼然共、此種の力士には免れ難き、自力を恃みて強引を行ふの癖、伊勢にも又あり。故に彼は往々自ら破綻を招くことあり。

▼彼は江戸ッ兒にして人格の力士也。故に力士の弊なる妥協八百長は微塵も之を許さず、且つ立合の潔きこと、東西稀に見るものたり。

▼彼の道樂は百人一首と望遠鏡にあり。殊に百人一首は三度の食も尙忘るゝ程なるが、望遠鏡も又愛玩數十金を投じて惜まず、地方巡業には、常に之を首にして、得々然たるところ、彼の角士らしき稚氣、寔に愛すべきものなからず。

▼玉椿は依然として玉椿也。西方の朝汐が番附の如何に依らず、三役の眞價を有するが如く、東方

國技館内赤襦の人

の玉椿は、正に三役力士にあるべき怪力たるを失はず。

▼僅々五尺一寸の小軀を以てしたる玉椿の如きは角力道の開創以來、稀に見るの怪力士にして、到底、通へ一遍の手取者、尋常一様の業師、所謂曲者も以て目すべきにあらす。彼は、荒岩、逆鋒等と共に、併稱せらるべき一代の名力士、土俵に永久不滅の光を照すべき者たらすんばあらず。

▼彼は婦人に愛さるゝなきにあらざるも、耽溺することなし。彼が未だ幕尻なりし當時、新橋叶家の静枝、彼に戀慕し、切に思ひを焦すこと切なり玉を最良にせる某旦那、大に粹を利かせて取持ち互に交情濃かにして、人知らぬ憂き思ひをなしたるもの、是れ玉が女に耽溺せし始にして終り也。▼點取り主義による三役力士は、必ず一場所に於て、其化の皮を剝がる。西軍の小常、東軍の黒瀬

共に其例を示す。

▼黒瀬前々場所以来、頗る面目を革め、吾人角通をして聊か彼の爲め意を強ふる處ありしに、何事ぞ、比較的腰に研磨を積りてお彼が、かのフアラ然たるヘツビリ腰を以て、對手選ばず吊を試みんとして焦る態、見苦しくも、亦實以て慨嘆に堪へざらしむ。彼が得意の二丁蹴りも、對手を引き付けて、後ち蹴る間の時間の長さは、直に敵手の看破を受くるのみならず、敵手選ばず、之を亂用するに至つては彼の愚や教ふべからず

▼斯く彼は自ら死地に求めて入るの愚を敢てなす彼は兵法機略を知らぬ力士也。兵法機略を知らぬ力士は、遂に大器に非ず、従つて三役力士に缺如せる彼の所以也。

▼彼は、大鳴門、浦の濱と共に東軍の三色男、誰れやらが『印度の丹次郎型』なりと云ひしは、餘

りに酷評に遇ぐ、彼は荒くれ力士中稀に見る温順なる優男也。

▼浦の濱榮次郎は今が油の乗りし頂上なるらし。従つて彼が土俵上の元氣潑潑、寔に景氣よき角力振を示す所、恰も一時の野州山を彷彿せしむるの觀あり。

▼男振りよく、氣前又前身の魚屋を思はしむるイナセなる處あり、立合亦冴ある、是れ彼が人氣を博する所以、萬事素人すきのする男也。是れ彼に街氣あるが爲めに非ざるか。

▼前髪を故意に剃り落して、之れが元祿式なりと得意がれる鶴渡清治郎、彼は江戸兒丈けに、萬事洒落氣の多い男也。極めて暢氣なる彼は、年中藝妓の尻を追ひ歩くにあらざれば、花合戦に憂き身をやつす、ツボラ角力の標本也。到底生れ代るを要す。

▼尾車部屋の朝寝坊として有名なる金の花吉太郎は些か偏狹の譏なきにあらずと雖も、濃厚篤實黙々然たる態度に、實力以上の人格を忍ばしめつつあり、寔に彼は緘黙沈著の勇士也。而も拔能俊逸、土俵上の働き、四ツ身に堂々の餘ありて、手捌きの妙、腰の運用又自在なり。

▼然共、彼は猪突の勇あるが爲めに往々稽古を怠り、今尙朝寝坊を悔ざる、彼の爲めに遺憾也。

▼力士も蓄財家と云はる、様になりては、最早終なり。鏡川正光は、吝嗇なる蓄財家として、力士間に評判よからず。然共、彼は吝嗇なればこそ、彼の身上を以てして、大枚三千金を投じ、年寄株(大鳴門)を購はしめし也。彼は老後の準備に餘念なき代物丈けに、星を屁とも思はず、随つて奮發心は微塵もなし、最早力士として評論の價値を有せず。

▼玉手山と共に、雷部屋の有望力士たる石山具之助は、大蛇と同年の二十三歳、幕内力士中最少年者として、生氣ある人氣者なり。

▼彼は自己の力を、己れ以上に活用して、土俵一杯に働き得る力士也。機略に富み、應變の用意あり、敵の裏を掻く逆の機法を會得せり。

▼然共、彼には博つ、買ふ、飲む所謂三道樂の癖あり。殊に賭博狂に至りては、義理も人情もあらず、他人の衣裳を入質る位の事は、彼に取つて茶飯事のみ、今土俵入に缺くべからざる化粧揮毫へ入質して、一六勝負の資となす、彼が質請の任に當るもの、常に玉椿也。

▼尙彼は鏡川と共に、脱走前科數犯のヤクザ力士也。

▼地取場(稽古場)に於ける横綱の稱あるもの大蛇湯柔藏也。天性の剛勇を備ふる彼にして技倆圓熟

せば寔に未來の大關たるべし。
 ▼彼は秋田縣能代の産、由來東北人は外懇柔順の様なれ共、其實點猜嫉妬妬奸の性を備ふ、され共彼には些の惡癖なく、至極淡泊なる、恰も江戸兒の氣風あり。

▼趣味なき彼は酒を愛する外他事なく、時偶、柳橋の小指の所に、忍ぶ戀路を謠ふ位のことなり。

▼前名八國山時代の柏戸宗五郎は、英氣剛邁、力量拔群、體格雄大、太刀山第二世として未來を囑望されしに、途中脚氣と胃病に悩みて、萎靡振はざりしが、近時、病の退けるや、漸く舊時の面目を現はし來れるあり、吾人彼の爲めに意を強ふせずんばあらず。

▼玉手山七五郎は、四海波と共に大阪方の附出し力士にして前名を小嵐と稱す。他の大阪方のヤクザ者と選を異にし、場所毎にノキノ腕の冴を示

し來る所、角通間既に定評あり、西軍の龍ヶ崎と同型同種の業師なり、曲者なり、彼が半身の構へ鴨の入首式は流石に妙味ありトコロテンの練名、故なきに非ず。

▼彼は大酒家にして、斗酒を傾け、酔に乗じて狹斜の巷に没頭すと雖も、未だ耽溺せず。何時も十日の相撲が終へてからを口實に、柳橋の小指を焦烈すと云ふ、彼は又自轉車を好みて、東西に駆け廻り以て大に得意振れど、其實頗る技倆拙劣にして、既に破壊せるもの數臺。

▼精英正しく神變不則の妙あり、手捌の鮮かなる足の運用と體のこなし、二つながら輕快、其要を得たるもの土州山役太郎なり。

▼彼が土俵の活躍は、宛然と首を懐中にせる刺客の凄味を現はし、萬事に小取り廻しに行く工合、玉椿の次位に据ゆべき名力士たり。

▼彼は性急なれ共、豪快磊落、其の土佐訛は頗る愛嬌あり。又彼は義俠を以て生命とせるが故に、「ようでんす」の一語、よく金鐵の重きを示せり。彼の常に赤貧なる、強ち愚昧なる實弟あるが爲めのみにあらざる也。

▼大鳴門は寔に不運の人と云ふの外なし、痼疾を受けて以來の彼は、何處となく力の抜けし角力振りとなれり。最後の一息氣と云ふ處に、強襲的生氣を缺くの感最も深からしむ。彼は遂に折角の利器を天折したる、氣毒なる力士也。

▼性質極めて内氣なると共に、形貌見るからに可愛く、且つ舉止心事又何となく鷹揚なる風ある、是れ生地京都を證するものならずや。

▼彼は以前、新橋叶家の菊子と、土俵以外の取組に、實母や師匠八角の妻女に、勘からぬ苦勞をさせし事あるも、今は昔の夢物語、近時頗る眞面目

國技館内赤裸の人

となれり。

▼明石龍兵太郎は、梅ヶ谷の龍臣、酒と女に有名な男也。近來頓と振はざる、是れ鬢のホツレの罪也。彼が星を氣にせざる風ある、又其處なり。

▼桂山勘五郎は皮肉な角力を取る男也、頗る愛嬌に乏しく、白い齒を見するは、女の話でもする時位なるべし。性格越後ッポを發揮して評判よろしからず。

▼前名瀧の音時代には、中軸所の闘士として腕の冴えありし五十嵐敬五郎も、放埒の爲め、猛烈なる梅毒に罹り、近來兎角不振也。

▼トツタリが十八番を以て、却々侮り難き妙味あらしめし平の石辰次郎も、最早凋落の下坂、何れは幕下に陥落すべき代物なるらし。玉垣を襲名すべきは、彼にあらずして、弟分なる幕下の評判力士大淀のものたるや必せり。

▼東軍幕内中の厄介者は、平の石と寒玉子也。十雨時代に見しとは飛んだ目違、熟々愛想の盡きし代物也。彼は長上に媚び、小才を弄する輕薄なる氣障漢也。身體は圓く玉子の如くなれ共、心情頗る下劣にして、圓満玉子の如からず。彼が實力以上を買破られしは、街氣的勇あるが爲めのみ。

「三」 未來を有する幕下力士概評

▼幕下力士中未來を有する有望力士を擧ぐれば、曰く綾川、曰く對馬洋、曰く朝緑、曰く苜蓿川、曰く栃木山、曰く大錦、曰く戎洋、曰く九州山、曰く千葉ヶ崎、曰く太刀の花と數へ來れば、殆ど枚擧に遑あらず。

▼寔に現時の幕下は賑か也。秀幹林の如く、天才雲の如し。斯くて江東の天地は、益々盛隆を極めんとす。盛んなる哉角力道。

▼十雨中の四大剛として、正に未來の大關たるべきものを朝緑、對馬洋、苜蓿川、綾川の四人者となす。内にも綾川尤も頭角を顯はせるものなからず。

▼綾川が四ツ身の上手は、流石に學生相撲の先生として、東都の學生間に持離さる丈けあり、吊に強く、寄身に捷く、投げに冴を有せるなど、十雨中彼を以て第一人に置かざるべからず。

▼朝緑は體格力量共一段の秀逸にして、其段品苜蓿の上であり、苜蓿は一兩年以來有望を以て目され來りし者なるが、一時病氣の爲め、意氣沮喪せし觀ありしが、近時更に大に捲土重來し來れり。彼の手口には、重濫なる意氣漂ひて、何となく生硬を感じしむるものあり。

▼對馬洋は、海坊主の如く龍大也。胴の間の延びやかなる處、一種の意味を認めずんばなからず。

而も左右の腕の發達、尤も小手投を慣用するに適す。彼自ら之を知つて、動もすれば此荒療治を用ふ。相手の震撼する實に此の荒療治にあり。

▼然共對馬の技は未だ未熟なり、之を前三者に比し、其最下位に据ゆべきものならんか、而して又此四人者の未來を見る。綾川を第一とし、次に對馬、朝緑、苜蓿の順序ならん。

▼此外十雨株中に、岩木山、兩國、藤の川、加勝山等の秀才あり。藤の、加勝は奇才黨として、正に幕下中の土州山とも云ふべき業師也。彼等に於て、元氣を失せざる以て近く幕内の花形たるや必せり。

▼更に幕下大頭以下に於ては、千葉ヶ崎、九州山、栃木山、大錦、戎洋等最も異彩を放てり。

▼千葉ヶ崎は二十山門下の天才、將に將來の大立者、現在の發達を以てすれば、殆んど測り知るべ

からざるものあらん。彼が小刻みに持ち行く突張りの如き、昔日高砂部屋が力士が慣用して、當時角力社會を蹂躙せしもの、此恐るべき技巧、正に彼によりて復興されたるが如き、以て彼の天才的たるを知らん。

▼九州山は、初めて附出されてより、勝放しの好成绩を以て今の地位に据へられしもの、然も其間僅に二場所に過ぎざるを見れば、彼の未來恐るべき大剛者たるや論なかるべし。彼は力士としての體格に完備せり、殊に四肢の發達と肩幅の發達は、四ツ身に適し、突張りによし。

▼栃木、大錦、戎洋等は、各長所、短所あり、從つて發達すべき素質あると共に、又案外挫折すべきやも知るべからず、然共戎洋は大々剛の者なり。栃木は角力となりて以來、只の一回負けし事あるのみなる勇猛者なり。

▼見れば現下の幕下は、寔に是れ多士濟々也。然も其大部分が、出羽海部屋に屬し、纏て西軍の

好戦士闘將たるものなれば、東軍たるもの、今にして大に之に備ふる所なからざるべからず。

舊劇若手五人

市川左團次—尾上菊五郎—中村吉右衛門—澤村宗之助—市川猿之助、

▼藝人の人物研究だつて？難かしいや、外の先生へ行つて書いて貰つちやアどうだい。俺れなんざア芝居は若い時分から好きだから、随分見もしたし、今でも隙さへありやア幾敷の人になつてゐるんだが、研究といふやうな、むづかしい事ア出来な

ねえよ。

▼エ、何でも好いから喋舌れつて、困るなア、ウヤア纏まらねえ事で好けりやア、否や纏まらねえ處ちやアねえ、勝手放題を喋舌るかな、だが滿ら

▼先づさうさな、今の舊派の役者を見渡して若手の頭株を拾つて五人とすれば、第一が市川左團次よ。それから尾上菊五郎、中村吉右衛門は動かないね、次へ来て帝劇に居る澤村宗之助を取るかな。モ一人は市川猿之助としなけりやなるまいか女形専門は別にしてだよ。

市川左團次

▼そこでだな、左團次はどんな役者だといふことになる。皆さま先刻御承知の一件だが、四五年前までは大した役者じやア無かつたね。親父が死んで明治座を背負はされた當座は、小團次や今の門之助などのお蔭で漸と、小屋の蓋を開けるに過ぎなかつたものだ。

▼松居松葉といふ先生に引摺られて、洋行をしたり、翻案劇を試みたりなどしたやつが、當時は惨めなさまであつた。併し今の左團次になる意氣はもう其頃からあつたので、極く少數の一部の人に將來を囑望されて居たらしい。

▼岡本綺堂といふ先生が、彼れの爲めに書いた漸進的といふ新しい脚本は、不思議に彼れに嵌つて常に喝采を博するといふことになり、自分でもつて世間の評判があんまり好いのに驚ろいた位だらうと思ふやうな事が度々あつた。

▼小山内薫といふ先生も亦た彼の爲めに、自由劇場といふ新しい運動を始めて彼をして今日の盛名(?)を得せしめたといふことも出来る。▼舊劇舊役者の中で新しい役者は、第一が左團次であるといふことは争はれぬ事實になつて了つた。

▼ヴェニス商人が始まりで、中頃のボルタマン、それから最近の『夜の宿』に至るまで、随分新劇では賣つたものだ、評判を取つたものだ。

▼小山内先生のお蔭だ。それから一座の松葉といふ美しい女形のお蔭もある。左升といふ忠實な番頭の方もあるが、實は潮ぼつて松葉先生のお蔭が芽ぐんで来たともいへる。今一つ實は時勢といふ大なる後援者のお蔭である。併し、それもどうやら此頃は型に嵌つて来たやうすだね。

▼新しい芝居は左團次に及ぶものが無いと反比

例に、舊劇のデレ、物などになると左團次より下手に見せる役者は先づあるまいといふことがいへる。どうだい、甚過ぎるかい。

▼岡鬼太郎先生などが以前——今でも——幕内にあつて随分舊劇も出すが、時々は困り物だと思ふことがある。

▼最も舊劇といつた處で、親譲りの『血達磨』とか『丸橋』とか乃至は『大盃』などと來ると見られぬ事はない、勇氣凛々たる處に——荒廻る處は——烈しい立廻りをすれば確に大向うの喝采を呼んで居るのは事實だ。併しそれも俺なんぞは先代のを見て居るので、今の左團次のそんな物を見ると、先代を追憶して一種の趣味を覺えるのだ。此優の舞臺がおもしろい譯では無いのだ。

▼況んや熊谷だの、光秀だのを見せられちやア堪らねえや。

▼左團次はやつぱり新しい役者になるんだ。明治座の本陣も手放して松竹の役者になつたやうだが、此の新しい方で前途の多望なることは疑う餘地も無い。

▼トニカク綺堂先生の新脚本などで見せる此優の藝は驚くばかり味があるから不思議だ。第一彼のイヤな調子がスツカリ直つて、身體にも貫祿が付いて來たのも不思議、俺も全く近頃は最優役者の一人に仕て居る。

▼明治十四年生れだからまだ、三十を出た計りの役者盛りだ。下谷の藝妓榮さんといふ戀女房との仲も可からうし、品行方正といふのが又た此優の特色だ。

尾上菊五郎

▼さアお次が丑之助時代からの最優役者六代目の

尾上菊五郎

女優

今じやア親方だ。

▼好い役者だね。五代目菊五郎の二粒種の一つで、明治十八年に産聲を擧げたのだから、まだ三十に成るやならずの勘平さんと同い歳か一つ下だ。

▼もの心のつか無え中から、舞臺へ出て樂屋で飯を食つた男、凝り性といふ親父の氣風を受ついで第一記憶力がよく、平生書生肌の男に不似合な、藝にかけては用意周到だから不思議だね。

▼委しい生立は略仕つりましてだ、最近四五年といふものは年毎に、イヤ見る度に舞臺が上達つて行くのは頼もしいや。今二長町で演つて居る魚屋宗五郎だの、髪結新三だの、昨年來大分お目にかけて親譲りの生世話物は、市村も及ばねえと思ふほど動いて退ける。

▼それで居て、左團次とは行き方は無論變つて居るが、新らし味のある史劇や、殊に女形で不思議

の成功を収めることも度々あるのはといふ豪いと思ふよ。

▼關白秀次といつた風のもの、乃至は此春木挽町で見せた『鼓の里』とか、今度の『丁字みだれ』とか(筋のよしあしは別だ)女形では例の近來の當り藝ともいへる『櫻吹雪』の勝子なぞだね。一寸眞似人も無さうだね。

▼また數やらぬ故でもあらうが、左團次のやうに型に嵌らないや、新しいことの工夫も性質でよくする役者だ。

▼新しい芝居が出来ることに於ても此優には前途がある。古い芝居にしては又た立派な腕を有て居て、決して、木挽助の幹部連にだつて負ちやア居ねへ。

▼第一『踊り』といふ鐵棒がある。段四郎を除けば直ぐにも此人と三津五郎に落ちて來やうかと思ふ

ほどの踊り人だ。現に今帝劇で梅幸が演つて居る『土蜘蛛』などでも昨年の六代目の方が餘程おもしろいや。

▼踊りの本筋は振付けにでもあらうといふ三津五郎の方が心得ても居るし格に嵌つて居るが、菊五郎の踊りは單に達者な計りでなく、奔放自在、才氣潑瀾とした所に擻んでた長所を持つて居る。それは新らしく出来る淨瑠璃ものに於て現はれて来る舞臺に證據がある。

▼此點に於ては實に當代第一人である。

▼斯う數へて見ると、將來の劇壇に多大の望を有するものは我が六代目菊五郎だと、オアサ最負の眼からは思はれてならぬえよ。

▼菊、吉といつて並べもするし、商賣の廣告に使うために昨今吉右衛門と二人の投票を募るなんて奴があるが、俺はもう、未來のある役者として菊

五郎の方に團扇を上げるよ。

▼まごくすると近へ内に羽左衛門を乗越すかも知れぬえとさへ思つて居る。

中村吉右衛門

▼前に素ッ破ぬいて了つて、吉右衛門には誠に氣の毒になるやうでなア。

▼併し吉右衛門も大した役者になつたものだ。勿論小供芝居全盛時代の吉右衛門は比較から云へば今よりモツと豪い役者だつたと思つたせ。

▼年は六代目より一つ下だと覺えて居る。今の歌六の長男で、故人九代目が吉右衛門の舞臺を見て、將來豪いものになるといつたとやら、は誰れも知つて居る話だ。

▼全く豪いものになつた。シカモその團十郎畑のものに成功して居る。劇によると同じ團十郎畑の

人で波野よりズツと先輩の藤間金太郎事松本幸四郎などより好いものがある。

▼一つだけ例を挙げれば『高時』の如きものである。天狗舞の所はともかくも、彼の一幕を通して觀たら、——實は幸四郎の先達つの高時が餘り甚かつたので——確かにいつぞや二長町で見た吉右衛門の方が地下の團十郎が見たら賞めるだらうと思ふ。

▼地震加藤なども幸四郎には到底も出来まい、と思ふ。吉右衛門は立派に演つて退けて居る。

▼今度市村座の『盛綱』などは立派な藝術品になつて居る。シカモさすがに團十郎が見抜いたほどの腹のある盛綱であつた。遺憾なき陣屋の首實験を見せて呉れた。

▼この盛綱を見て波野最負は實に堪らなく嬉しがつて居る。

▼俺なども殆んど舌を捲いて驚嘆した一人だ。併し、彼の人の藝は彼れ以上にはいくらか圓熟する位のもので、斯う見た所が、發展するといふ藝風で無いと思はれるがどうだい。

▼或は今度の盛綱などが、吉右衛門の藝の『時』では無からうかと危ぶまれる。さうすると聊か心細い。

▼菊五郎問題の終りに言つた段違ひといふのは無論將來のことで、現在では其の趨向が見えるといふまでだといふことを附足して置かう。

▼歌六はもう取る年だ。役によつては若へ役者の知らねへ藝を持つて居て舞臺に見せることもあらうが、先づ御馳走役のツマに表はれる人になつた。

▼波野には米吉といふ弟がある。此の米吉も最う成年に近くなつて來て、殊に子柄が好いから女形に仕立て、も好い。

澤村宗之助

▼帝劇に澤村宗之助を置くのは、同じ劇場に尾上松助を干からびさせるのと同じやうに、惜しくて堪らねえ。

▼訥子の伴に宗之助のあるのは澤村家の誇りであるといひたくなるね。訥子の藝は弟の長十郎に引受けさせて了つたら可からう。宗之助はどうにか大正の役者にしなきゃア嘘だ。

▼帝劇といふ所は役者を晒館のやうにして、幸四郎なんていふ人が彼座へ行つてからの舞臺を見て呉れ、情けない位な譯のものだ。

▼よく藝が荒むといふことを近頃の人はいふが帝劇の幸四郎などは荒むのじやア無い、延びもしなけりやア潰れもしない、變なものになつて行くのだから困るよ。

▼其の間に立て宗之助は一人病然として寧ろ進歩の蹟を認めさせる、まアサ、難かしく言はなくても済む、藝が上つて行くやうに思はれるのは奇蹟だ。ホイ又た難かしい言葉が出た。

▼花柳で叩き上げたトントンもあり、嘗て荒川博士と共に東京座でシーザーを演つたほど語學といふものも出来る。立役には柄が小さいので、向かないがそれでも相應に武士にも大將にもなつて見える。

▼俺は此の優の女形が好きだ。近い頃の舞臺でいへば『關の扉』の小町も好かつた。此間の『三七信孝』の静緒も好かつた。自由劇場のホルクマンに勤めたグンヒルド夫人なども評判が好かつた。常に立役よりは女形で成功して居るのは争はれねへ。今度の道行の静も好い。

▼女形ばかりじやア無え。此優が女優輔導で毎度

市川猿之助

▼巫山戯て見せる喜劇の人物。これが又た不思議と成つて居る。宗十郎も同じやうに輔導で能く女優を相手に巫山戯るが、どうもシツクリと行かぬ臭い所がある、態とらしい所が見えて嫌味で仕やうが無え。宗之助のは天真が見える。不思議と可笑しい。探りにならぬは藝だ。

▼現に帝劇で演つて居る女天下の春木など少し法學士といふ柄では無いが抜群の出来だと思ふ上梅幸の拙さ、宗十郎のつまらなさ。

▼斯くの如く、宗之助は帝劇の役者中で俺の一番氣に入つた役者だ。

▼ウンと働かして呉れ、後生だから。

▼そうして新しい時代の役者になつて呉れ、倭魂漢才だ。鍛へた藝を以て新しい芝居に應用して呉れ。此頃の素人芝居に初てから愛憎を盡かして居るのは俺ばかりぢやアあるめへ。

▼さてドン尻に控へたは喜劇の坊ちゃん市川猿之助だ。

▼團子の昔、團十郎が子供芝居へ出るのは可けなといつたとやらで、學問の方へ凝つたのが世間の噂に上つて、役者で中學を卒業したものは乃公位なもの、彼の優は學者よ、といふことになつた。オイ、新派の鈍優福島清は帝國大學に居たことがあつた。

▼役者にそんな學問が要るものか、物が判りや可いのだ、堅く云へば理解力があれば可いのだ。とまアいつて置いて。

▼さて、猿之助は親仁が段四郎になつて歌舞伎座の幹部になつてから、改名の『鎌鼬』以來まだ日が浅く、言はゞ一人前になり立てのホヤ／＼な優

だ。

▼前途は洋々たるものだ、實はまだ見込が付かぬ位の若い修業盛りの人だ。

▼さすがに、蛙の子は蛙だといふと何だか悪口のやうであるが、段四郎の伴だ、踊りは達者なものだ。

▼唯だ少し荒つばい處がある。それは若いからだ最負はいふ。踊りに味が出て来ない。それは追々と出るだらうと御最負はおつしやる。餘裕が無いのは困ると通の人はいふ。さういへばさうで。菊五郎の踊りほど才も無い。三津五郎の踊りほど鮮やかでない。無論親父ほどの味が出ない。勉強と工夫が肝腎だ。

▼まだ近來の當り藝だと取立て、いふ大役を見ないやうだが、毎時も相當に儲かる役を振られて相當に儲けて居る。

▼土曜劇場の上置きとして有樂座で、イブセンものや何か變な芝居を見せた事もあり、今度なども自由劇場で、夜の宿の主人公ともいふべき役を買つて相當な評判を得たやうすだ。

▼とにかく此人も兩刀使ひだ、大成するかどうかは疑問だが、當分新しい時代の役者として存在はするも、今一段の成功はすることであらう。

▼唯だ此優に最も惜しい處は身長が足らぬ事だ。モウ二寸計り引延ばさないと奮劇でも堂々たる役には向かず、新劇では更らに洋服姿のウツリが悪

▼イヤ、これで五人だけ責塞ぎにならべて了つた。芝居道については言ひたいことも少くないがね。ハイ左様なら。(五笑老人)

花柳界の流行ツ妓

菊村音丸(十七)

▼生れは横濱で雛妓からの藝妓去年の暮頃からメキ／＼賣出してか今年の夏一本の襟替へに二千圓宛五人から取つたと言ふ評判、併し見ると聞くとは大した相違で當人の音丸は顔の通り極く／＼の無邪氣な性質、踊りも可成出来るしお客も茶屋請も至極好い、だが此頃は些し一ト頃よりお座敷が減つたと云ふ事である、そこで當人の未來の希望は實業家の細君に成りたいのださうだ。

新叶家照葉(十八)

▼生れは大阪、四本半しか無い指！音峰との艶事花柳界の流行ツ妓

で賣れて／＼賣れ抜いた、近頃は些と落ちたが未だ未だ大した賣ツ妓、性質は勝氣でお俠で大の浮氣者一生藝妓で暮して、藝人でも素人でも好いた人と苦勞して見たいのが當人の希望、餘り勝氣過ぎるので生意氣だと一部では言はれて居る、藝は下方も踊りも出来る感心なのは斷れたお客でも情人でも決して悪く言は無い『みんな儂が悪いのやわ』と却々味を遣る。

菊三升榮龍(十八)

▼萬龍以後の賣ツ妓として天下に名高い踊りも出来るし顔は繪葉書よりも素顔の方が好い、生れは美人産地の名古屋性質も剛巧だが惜しい事には生意

氣で意地が悪い、人を下目に見る癖があつてお茶屋の請は餘り好くない、朋輩には尙更。浮氣も仕度だらうが姐さんの常子が頑張つて、鑑錢一文も未だ自由にならないから今の處餘儀なく慎んで居る。希望はお金を溜める事が第一だとか。

河辰中老松 (十八)

▼無邪氣で極く愛くるしい性質、生れは焼蛤の名物で名高い桑名、三味線も踊も相應に出来て朋輩にもお客にもお茶屋にも評判が好い、菊五郎に死ぬ程惚れて居るが榮龍同様、才六姐さんが眼を光らして居るから、お金は一丈も儘に成らず『早く自前になつて彼人と苦勞が仕て見たいわ』と言つて居る、同じ家の小夜子はお座敷が落ちたが無邪氣なので此妓は相變らず流行つて居る。

本花家小まん (十六)

▼此間漸と一本に成つた許り近頃メキメキ賣出したが未だく、生れは生粹の江戸ッ妓で新富町生れ、見掛けは至極柔らかなが底意地は悪いと云ふ噂さ、踊もあるが今の處は只綺麗で年の若いだけで賣れて居る。之から賣盛るか之が行止りかは本人の心掛け次第、然し新橋の五本の指に入る流行ッ妓である。

問題の女優噂の女優

川上貞奴と森律子

▼旅役者として洋行した貞奴は、旅役者で押通して歸つて来た。歸つて来て本郷座の舞臺に現はれた時は、満都の人氣を集めた。技藝が練れておた新し味が加はつて居た。美しかった。是れ以外に彼女は何物をも齎して来なかつたが、唯夫れだけの事でも、當時の劇壇を刺戟するには十分であつた。彼女の戀は、川上音次郎に依つて成熟したが彼女の技藝も音次郎に依つて光を放ち、音次郎と同様するに依つて潤ひを持つて居た。其の音次郎を失つた後の彼女は、急に白粉で塗り隠せない程の年波が寄つて来た。帝劇を最後の舞臺として立

問題の女優噂の女優

つたのでもあるまいが、彼女の姿は華やかなる背景を持つて居る、東都の劇壇から消えて了つた。藝者から女優に、女優から旅役者に、さて旅役者から墮ちる先は何處、貞奴はまだ技藝を以て、姿色を以て、曾ては其の門下であつた律子に劣るものでない。

▼律子は洋行から歸つて来た。旅役者でなく、一個の見學者として、歐洲の劇壇を覽て歸つて来た。唯單に觀たゞけで歸つて来たのである。其の眼は多少肥えたかも知れぬが、其の技藝は洋行前に何等加へる所がないのである。彼女の洋行前の評判こそ素晴らしい、其の服装は餘りに見窄らしかつた。新調したのは、三越に注文して作つた二十五

圓の上衣一枚だけで二著の洋服は皆古著を仕立直したものである。即ち其の古着は、愛宕下の飯島婦人洋服店から買ったのなさうだ。夫れのみならず彼女の貧弱な財政は、五千圓盜難に罹つたと某通信をして虚偽の事實を報導させる迄に苦しかつたのである。表面上華やかに見えた彼女の洋行は、其の準備に色んな小策を弄さねばならなかつた。

▼半年の洋行に得たのは、新橋驛で贈られた花東位のものだ。貞奴程の技藝も、情調も持つて來ない、其の大きい口の利用法が巧みになつて、一種の表情が目尻に漂ふに至つた迄である。やはり何時までも太郎冠者の喜劇役者である。併し策を弄することは、帝劇の女優中第一である、人氣を取る新しい試みをやるとか、連中を作るとかそんなことには抜け目がない。技藝よりも、斯う云ふ方面で生命をつなぎ、而して華やかに生活して行け

るのである。前代議士、辯護士の娘、跡見女學校出身と云ふ事は、如何程彼女の顔を美しく見せたか知れぬ。

村田嘉久子と初瀬浪子

▼律子や浪子の人氣はないが、帝劇の女優中で腕達者なのは嘉久子である。日外、梅幸が病氣で休んだ時に「宗任」の或役を代つて勤めたが、其の時に梅幸に代つて勤める者は、彼女より外になかつたのである。此の一事で見ても、嘉久子の腕達者は空虚な評判でないことがわかる。

▼嘉久子は、品川の或造酒家の娘で、教育は小學だけであるが、藝事の仕込があるので、歌舞伎劇の下地が何程か出来て居た。其の上に更に女優として仕込まれたから、好きこそ物の上手なれで、技藝の點に於ては群を抜くに至つたのである。名

は角でも、顔が圓く、引立つほどの舞臺顔では無いが、技藝で以て夫れを補つてゐる。現代に生きてる若々しい女の氣分には乏しいが、技藝から生れた昔の女に接するやうな美しさがある。而して自分で技藝を造り出して、嘉久子式と云ふやうな型で固めてゐる。夫れが彼女の特色でもあり、又短所でもある。斯様な型に固まり過ぎれば、彼女の藝術は是れで行き詰つて了ふ。所謂舊劇の女優者と云つたやうな所で、夫れ以上の發達を望むことが出来なくなる。正宗の二合壘を叩つて酔うた時の氣分で、小さな型から脱して、更に或大なる力を把握せねばならぬ。

▼浪子は顔と、姿の女優である。顔の長いのが、嘉久子の圓顔よりは舞臺で引立つ、殊に悲劇役者としての天分を持つてゐる。併し唯夫れだけである。舞臺顔が美しい舞臺姿が美しい、美しさに酔ふ

て居る者は其の巧拙は分らぬが、少し眼のある者は、其の技藝の空虚な、自信力のない舞臺上の態度に、失笑を禁じ得ないのである。でも、流石律子と雄を競ふた花形であるだけ、嘉久子杯逆録立になつても、逆も及ばぬほどの人氣はある。大阪に出稼をやつた時は、連中を作つたり、景氣を附けたりする爲めに、千五百圓も掛かつた相だが夫れが藤田某の手から出てゐる。大倉喜七と兎角の評判はあるが、喜七の母や人は浪子の肩を持つて、陰に陽に援助して居る。浪子たるもの、何ぞ大に技藝を練つて、新しい劇壇の寵兒とならざると云ひたい。

松井須磨子と園花子

▼藝術座の須磨子と、有樂座の花子は、素人演劇界の女優の一步を進めた者だが、何處か現代の空

氣に觸れて居るので、艶かしい風聞もあれば、評判もある。若やかなる生命と、華やかな色彩とを織り込んで、其の美しい姿を戀の舞臺に投げた處が面白い。須磨子は抱月——花子の浮いた噂は幻影に過ぎない、が、腕の方は須磨子よりも花子は凄い。顔も容も花子は清艶である、技藝の點に於ては須磨子は舞臺に落ち着きのあるだけ夫れだけ勝れてゐる。

▼月を抱いたは昔の夢よ今は須磨子の腰を抱く——と評判の俗謡を、其の藝術の中から造り出したのは須磨子である。彼女は抱月をして抱腰たらしむべく、文藝協會をして藝術座たらしむべく、大學教授をして舞臺監督たらしむべく、其の熱に渴いた唇を以て、石を溶かして飴となした戀の妖女である。夫れだけ彼女の技藝は單純である、彼女の聲は現實的である、彼女の態度は肉感的である。

る、藝術的快感を與へる事の出来ない彼女の天分は、翻譯劇以外には一步も踏み出し得ないのである、須磨子の爲めに立てられた藝術座は、須磨子の無内容な藝術に依つて人氣を落しつゝあるのを惜まざるを得ない。

▼花子は、連雀町の都館の娘である。虎の門の女學館を中途で廢して長唄や踊などを習つて居たさうした歌舞伎劇の下地を作つて居た彼女は、華やかなる女優の生活を試みるべく、若やかなる血潮の躍るのを抑へ得なかつたのである。戀に活きんか、藝術に活きんかとは、或夜彼女の悶ゆる所であつたが、遂に藝術に活きんと決心したのである。華やかなる藝術的生活の中に、一種の飽滿を得やうとしたのである。有樂座の舞臺に出たのは、ほんの二三回に過ぎないから、海の者とも山のものともつかぬ。唯美しい女優——斯う云ふ觀

察よりすれば、浪子の向ふを張る位なことは出来やう。

小原小春と衣川孔雀

▼第二回大阪出稼の帝劇女優で、着いた其晩から待合入りをやつたのは、小春であつた。松本愛子や木村重子は唯一度待合山口で秋元春朝に呼ばれたのを名譽と心得新聞に書いて貰つて嬉しがつて居たものだが、小春はそんな事を何とも思つて居ない迄に世馴れてゐる。根がお妾さんの娘で、幼少の頃から眞砂座の子役に出て居て、習ふよりは馴れて居たのである。顔は十人並以上で、可愛い素振こそして居れ、腕の凄さは二期生中で雙ぶものがない、日本の踊も、西洋のダンスも旨いダンスは尠からず日本趣味が加味されてゐる。斯う云ふ風に、自分の藝術を作り出して行く所に、

開國の女優の女優

彼女の踊の將來はある。で、踊子としての小春は其の腕を認められて居るが、女優としての小春の技藝は危ぶまれてゐる。素顔の可愛らしい割に表情に乏しく、其の聲と來ては干蜜柑の皮に觸れるやうな感じがする。

▼孔雀は、上山草人と何やら噂を立てられて、技藝よりも其の方で名高くなつた。女優としてよりも三面の女として新聞に歡迎された。舞臺に出たのは、唯の一度で、まだ素人放れのしないものだけれども、上山浦路、林千歳、酒井よね子杯と云ふ、新女優よりは、亭主は持つて居ず、悪ずれがして居ず、年が若いだけに幾分か未來はあるやうだ。あの潤澤のある聲、夫れとなく漂うて來る新しい藝術の匂——他の女優に求め得られぬ或物を持つて居るから、今後の修養次第で、須磨子などよりは、ぐつと善くなるであらう。

河村菊枝と白井壽美代

▼青大將の壽美代と云へば、誰知らぬ者なき、大酒飲みの、蛇好きの女優である。そんな所が好きと云ふでもあるまいが、洋畫家の和田英作等が主唱となつて、壽美代嬢後援會を起し、總見をやつて景氣を付けたことがある。が、本人は一向そんな事には頓著せず、連中を作ることは頓斗骨を折つて居ない。人氣がないので、好い役も振られな
いが、おれは變物だといふ顔付をして、爛徳利と青大將を伴侶として慰藉を得てゐる。英語の學校を出ただけに、英語は堪能であるが、技藝は圓熟しないうちに、最う荒んで了つた。西洋婦人に扮するには、背恰好と云ひ、腰のひねり工合と云ひ、詭向に出來て居るが、其の他は何をやつても餘り引立たない。半鐘泥棒など、大向から

冷笑を浴せられて、其の儘朽ちて了ふのは聊か惜しいやうだ。
▼菊枝は、半井桃水の姪で英語の學校を出たのと黒頭巾が馬鹿に提灯を持つて『筆札に巧み』だ杯と云つたものだから、女優中の尤物とまで買被られた。買被られては居るが、身體が大きくて、餘りこせつかないから、買被られるやうな技藝を見せる事がある。連中を作ることや人氣を集めることには、人一倍苦心する方で、應接振は柔かた、ふつくらしてゐる。是れで、鈴木徳子ぐらゐな腕達者であれば、なかく持てるのだが……どうも、一人で何も彼も兼ね備へた女優は、當分問屋で卸さぬものに見える。

同名異人傳

△島田三郎(代議士)

▼活字の上に、島田三郎の四字が現はるれば、誰しも帝國議會開設以來の名士、能辯家、衆議院議員島田三郎——と、直ぐさう思ふのである。處が新聞紙上に、一年に一度位は『島田三郎の科料』と標題が出る。讀者は島田代議士の科料だと早合點して讀んで見ると、ナンだ、本所邊に居る車夫島田三郎の科料である。新聞紙が讀者の好奇心を挑發する爲めに、こんな標題を三號活字で並べるのも罪なものさ。

▼一體島田三郎は二面種の人で、三面の男ではなし、が、今年新政黨遊説の砌、北海道で十數年前

に離縁した先妻に邂逅したので、端なくも三面種に上つた。其の後、間もなく科料の三號標題が出たので、讀者の眼を痛いほど刺戟したのであつた。此の同名同名の奇縁を以て、科料車夫の島田三郎を島田代議士の抱車夫にしては何うか。

△中野初子(工學博士)

▼見た所では同じであるが、其の讀み方は違つてゐる。博士はハツネで、女はハツコである。ハツとか、オハツとか呼ばば無難なのであるが、初子と書く爲めに、名刺だけを見れば、工學博士か新しい女か判別がつかない。夫れに、今日は新しい女の全盛の時、工學博士の中野初子よりも、青

靴社の中野初子が世俗に知られてゐるから溜らな
い。博士の名刺を見るや否や『是れは、女郎買に
行つた新しい女だよ』

△山本三郎(役人)

公桂が首相當時の秘書官で、臨終の際まで秘書
役として左右に侍して居た山本三郎は、世人の耳
に新なる所であるが、文士の山本三郎を知つて
者は、彼は號を露葉と云つて、餘り人の目
にも留まらない『モザイク』(雑誌の名)に小説を
書いてゐる。中根岸で山本義上と云へば有名な金
満家で、露葉は其の伴なうである。夫れを知ら
ぬ新政黨員某が、山本三郎も近頃は餘程閑散と見
えて、小説ちやうものを習つてゐると、怪んでゐた
ツけ。

△佐々木安五郎(浪人)

此の程佐々木安五郎が従六位に叙されたと云ふ
ので、浪人仲間ではヒヤーと、魂消て居た。處が
夫れは蒙古王の佐々木安五郎ではなく、鐵道院參
事の夫れなる事がわかつて大笑になつた。顔を見
れば、蒙古王は漆黒な長い髻を蓄へて居り、男ッ
振も好いし、前代議士の肩で風切るふうがあるの
で、小役人などに見違へられるやう事は毛頭ない
夫れに近來は鶴崎寛城、伊東知也、工藤鐵男等と
共に、犬養毅と肝膽相照して居るやうで、支那問
題でも餘り騒がない。其の埋草と云ふでもあるま
いが、『六連報』では怪氣焰を吐いてゐる。

△西野元(課長)

大藏省の豫算課長に從五位勳六等の西野元が居
れば、海を隔てた殖民地は臺灣の事務官にも西野
元と云ふ男がゐる。位階勳等も多分同じだらうと

△小寺謙吉(代議士)

一字違ひの小寺謙吉で、一は代議士の小寺謙吉

△加藤由太郎(速記者)

東京日々新聞の速記者に加藤由太郎と云ふ男が
ゐる。或人が、其の男に用があるのので、電話を掛
けようと、電話帳を繰つて見た處が、深川の廻米
問屋の加藤由太郎と、本郷の蕎麥屋の加藤由太郎
とが出てゐる。こりやテツキリ彼奴の出店に違ひ
ないと思つて、モシ／＼とやると、ハイ／＼私は
蕎麥屋です、速記屋さんでは有りませんと來た。
電話者爲めにギヤフン。

△藤井健次郎(京大教授)

理學博士の藤井健次郎は東大の教授で、文學士
の藤井健治郎は早稲田の講師であつた、其の讀方
が違はないのみならず、書く方でも治と次と混同

△山縣伊三郎(政務總監)

一字違ひと云へば、朝鮮政務總監の山縣伊三郎
と、内外出版協會の山縣伊三郎も一字違ひであ
るが、親類でも縁戚でもない。伊三郎は公爵の養
子、伊三郎は高師の出身。

一は洋畫家の小寺建吉。今秋の文展に出てゐる、
第二部第二十室の『秋近く』を見て、オヤ神戸の代
議士がこんな畫を出して、吐月峰でも書ば可い
にと云つた見物人がある。成程氣を付けて見れば
一字違ひで、無學者の見違へるのも無理はない。

人物研究

するので、手紙が時々戸惑ひして舞込んださうである。處が、藤井健治郎は京大教授に轉任したので、東京丈では間違られる憂がなくなつたさうだ

△小笠原貞子(貴婦人)

▼伯爵夫人小笠原貞子は、華胄界稀れに見るの美人で、社交界に其の名を謳はれてゐる。化粧部屋に入つて鏡に向ふ時は、何とも形容し難い姿色美を發揮するので、女中などは恍然と見とれて、手に持つ物を落すことが屢々あるさうである。今一人の小笠原貞子は明治二十五年から二十七年頃まで代議士になつてゐた小笠原貞信の娘で、高等女學校卒業後母と共に上京して、大塚邊で素人下宿を營んで居たが、今は夫れを廢して、某美術品店の事務員をして居るさうだ。性來文藝が好きなので、小説を書いては、『青鞜』や女子文壇に載せ

て貰つてゐる。一時は水野葉舟などもチャホヤして居たが、今は何うだか……。先づ關秀作家の卵としてお目を止められたい。

△横山達三と源之助

▼同姓異名であるが、同姓で共に人物評論を試みて居る所から、世間では同一人と思つてゐる。同名異人の號外として、少しく辯じて置かう。
▼達三は長州人で赤門出身の文學士源之助は越中富山の人で、日本大學に學び、操觚界に入つた。達三の號は黒頭巾又は健堂で、源之助氏には有磯逸郎又は天涯である。

祝サニデー五周年

- 東京電燈株式會社
- 日本郵船株式會社
- 合名 藤田組
- 大阪商船株式會社
- 日本銀行
- 大日本製糖株式會社
- 株式 東京株式取引所
- 株式 芝浦製作所

- 日本活動寫眞株式會社
- 日本勸業銀行
- 日本皮革株式會社
- 合名 鈴木商店
- 東京瓦斯株式會社
- 株式 臺灣銀行
- 株式 日本興業銀行
- 株式 南滿洲鐵道株式會社

祝サデ一五周年

四谷見附外
牛鳥料理
三河屋

上野三橋
魚すき焼御料理

①
電話園下谷八八八
樓

割烹
位置至便
座敷瀟洒
料理清新

淺草公園
松嶋
電話下谷八〇三

割烹
新橋
鳥森
湖月樓
電話新橋四九三番外一

日比谷大神宮境内
割烹
新館
大松閣
電話(四一四番
新橋)八六八番

◎大正式割烹新橋花月樓廣告

花月儀 昨臘歸朝後自家割 大正式と名け坐り食卓を以て色氣を抜きにして友人と會食するには此の大正式に限との御好評を蒙り日に月に隆盛に赴き難有御禮申上候尙一層勉勵會費の如きも舊習を打破し可成廉價を以て御引受申上候間何卒昔日に倍し御用命仰付被下度伏して奉希願候也
東京新橋 竹川町
花月樓
電話三〇五二二〇七八
新橋三〇六二〇〇八

樂器目錄

賃貸、月賦

規定贈呈

山葉大八ルカシ

山葉ピアノ

鈴木ヴァイオリン・マンドリン

東京市京橋區銀座通竹川町

日本樂器製

造株式會社

東京支店

共益商社

電話新橋三三三〇、同三三三二、振貯二〇七〇

宮内省
御用達

ロハて東京見物

地方から出て来た觀光客二人、如何にも物珍しそうに銀座通りを見まはしながら話して行く――

甲「吾等杯は心掛が違ふ!!」

乙「なぜ?」

甲「なぜつて、今度東京見物に来るたつて、

金がイラねエ」

乙「金がイラねエとは變だね」

甲「ナニニ保険金を取つたからよ、有隣生命には『祝壽養老』といつて割増金付の保

險がある。ソノ割増金で東京見物に来た譯だ、どうだな心掛は」

乙「ウム、それは甘い事をした、どうれ己も一つ保険を附けて行くべイ、ソシテその

會社はドコだね?」

甲「日本橋の南茅場町よ」



祝サンデー五周年

風流會席 鳥料理
丁子風呂

富嘉川

京橋區元數寄屋町一ノ二
電話京橋 二二三九番

本社

東京市京橋區銀座一丁目六番地
電話京橋 六四四二番
振替貯金口座東京二〇、七五〇番



○生命保険界の一新機軸
東海生命保險相互會社
○最も進歩せる相互組織

支店
大阪市東區高麗橋一丁目二十三番地
電話東區 二二二五番
振替貯金口座大阪 一〇、三〇〇番
福岡市博多市馬場新町八番地
電話福岡 三五八八番
振替口座福岡 三〇一〇番

資本金參百萬圓

積立金 貳百四十拾萬圓
定期預金 六ヶ月以上 年六分
當座預金 百圓ニ付 日歩九厘
小口當座預金 同 一錢二厘

東京市日本橋區南茅場町十二番地
合名 鴻池銀行 支店
電話浪花特 三六九三 三七〇

宴會 特別 強勉 引受



珍日新高尚優美
味に新式經濟
時に豊富美味進
滋養豐富出前強
新士淑女の食は適宜
雷門よか樓電下
洋食

王子名主瀧出張店

歌舞伎座前

御料理 仕出し 辨松

電話新橋三一五

資本金一千萬圓

日本橋區小網町鑄橋通り
電話渡花(五〇、二七〇、二七二)

豊國銀行

頭取 淺草 吉野 町支店
 専任 芝三田 通リ 本郷 支店
 取締役 新堀 市 新堀 支店
 取寄 末延 道成 店
 總支配人 遠山 市郎兵衛 實



株式會社 **東海銀行**

日本橋吳服町 本店
 日本橋堀江町 堀江町支店
 本郷三丁目 本郷支店
 赤坂田町 赤坂支店
 本所龜澤町 本所支店
 京橋尾張町 京橋支店
 芝三田一丁目 三田支店
 淺草並木町 淺草支店



横濱 東京 神戸

登録商標



- 男女大和腰卷 (白及茶無地) 金二圓以上
- 同大和バッチ (絹無双) 金三圓以上
- 同季節向大和肌衣 金八十錢以上
- 巴里流行新柄縞シャツ
- 大和屋のソフト縞シャツ
- バケーエルシウエレ
- ネツクタイ
- 麻手巾
- 及洋服附屬品種々

シヤツ類製造販賣
 横濱 **大和屋商店**
 東京出張店
 京橋銀座三(東京一八七二)
 神田小川町(電話三三三)

祝サデー一五周年

京橋南鍋町二ノ三

風月堂

米津恒次郎
電話一六〇八番
新橋一八六番

鰻 蒲 燒
京橋新富町
電話京橋一七二八番
尾張町新地
電話新橋六一二番
歌舞伎座内
同賣店

活動寫眞常設館
京橋豊玉河岸
豊玉館
電話京橋二〇九〇

淺草公園

日本政府專賣特許
天然色キネマカラー
活動寫眞常設館
キリン館
電話下谷四三〇七五

淺草公園
活動寫眞常設館
電氣館
電話下谷 三六二二

淺草公園
活動寫眞常設館
大勝館
電話下谷 八四四番

淺草公園
日本政府專賣特許
天然色キネマカラー
活動寫眞常設館
帝國館
電話下谷二二三

日清生命保險株式會社



社長 中野武營

二重の配當
を得られよ
詳細は保險
案内にあり

東京丸の内

特色 保險料は低廉にして而も八年毎に大決算を行ひ剩餘金の一部を契約者に配當すべし

本社 大阪市東區今橋
電話東二三、二四、二五

日本生命保險株式會社

東京支店 日本橋區瀬戸物町
電話本局一九九番
四二九七番

支店出張所 京都、名古屋、福岡、仙臺、
金澤、廣島、横濱

祝サデン一五周年

京橋區銀座一丁目
金ふら
御料理 **大新**
電話京橋 六三三四番
三八八七番

浅草
金田

茶料理
つきぢ **喜多野屋**
京橋一四九五番

龍宮館の
處はツヒ目と鼻の先き品川臺場脇の海濱自然の風景は
京濱第一等地▲閑静で人知れず一日の清遊は妙、ワケ
てお座敷は粹な離れ座敷ばかり▲鑛泉御入浴は朝から
御勝手次第▲萬事お手輕親切叮嚀が専一▲御料理御旅
館御鳥料理▲電話芝三〇九二番▲下ノ様な寒い時でも
お座敷へ這入れれば汗が出る東京瓦斯會社の特製にかゝ
る自動的暖爐の設備が有ります

祝
新橋
辰中村
辰中村

今回増築工事竣成大小食堂の外餘興室及展望臺
新設仕り尙其他附隨の設備にも種々改良を施し
調理方及御接待方一層周到の注意相加へ申候間
倍舊御引立御用命被仰付度奉希上候
大正十二年十一月
東京九段 **富士見軒**
電話番町五三、二一七四、三四〇五



大東火災保險株式會社

東京市麴町區内幸町一丁目三番地
電話新橋長二二〇〇、二二〇一番
振替貯金口座東京一八、九〇〇番

- | | |
|-------------|-------------|
| 社長 中村 靜嘉 | 取締役 左右田 棟一 |
| 専務取締役 楠 秀太郎 | 取締役 舟木 鍊太郎 |
| 取締役 村井 貞之助 | |
| 取締役 内野 五郎三 | 監査役 潮田 方藏 |
| 取締役 前川 善平 | 監査役 左右田 信二郎 |
| 取締役 倉知 誠夫 | 監査役 中田 敬義 |

西支店 西區立賣堀北邊五
南支店 南區鹽町通二
難波支店 同難波元町三
堺支店 堺市熊野町
和歌山支店 和歌山市本町二
西宮支店 兵庫縣西宮町

株式浪速銀行

大阪市東區淡路町二丁目

神戸支店 神戸市榮町三
東京支店 東京市日本橋區通三
彌殿町支店 同彌殿町一
鹿兒島支店 鹿兒島市築町
川内支店 鹿兒島縣川内
大島支店 同大島

創立明治九年
資本金 五百萬圓
積立金 參百四拾萬圓

株式第三銀行

東京市日本橋區小舟町

監督 安田善三郎
頭取 安田善四郎
常務取締役 安田善八郎

電話 漢字 四五六一
電話 漢字 四五六一
電話 漢字 四五六一

一資本金 四千八百萬圓 (內拂込濟參千萬圓)
一積立金 壹千八百五拾五萬圓



橫濱正金銀行

電話 漢字 五九七二
電話 漢字 五九七二
電話 漢字 五九七二

支店 東京、大阪、神戸、長崎、倫敦、里昂、紐育、桑港、ロスマンセルス、布哇、孟買、カルカッタ、香港、上海、漢口、天津、北京、牛莊、旅順口、大連、遼陽、奉天、鐵嶺、安東縣、長春、哈爾濱

出張所 代理店有之候間爲替、荷爲替、信用狀其他内國手形割引、貸付、保護預

此外内外樞要ノ地ニ付御都合次第御來談被下度候

●東京市麴町區内幸町壹丁目

電話長新橋一、九六七番
振替貯金一六、四九九番



神國生命保險株式會社

取締役社長 飯田延太郎
取締役男爵 平野長祥
取締役 森岡次郎
取締役 加治嘉吉

監査役 杉本卯吉
監査役 三浦泰之
相談役 安立綱之

●國家金融界の唯一機關！

營業 諸公債有價證券の賣買
 有價證券擔保貸付 社
 課目 國債の簡易販賣 長 男爵園田安賢

東京國債株式會社

東京市日本橋區本材木町河岸(海運橋際)
 本 電話本局四七六番三五七五番
 店 振替東京二〇三三三番路(トコ)

●支部出張所代理店は 全國到る處樞要の地區にあり

●國家經濟界絶好の原動力！



帝國公債信託株式會社

東京市京橋區日吉町十一番地
 社長 齋藤 直二
 副社長 關田 與造
 監 督 齋藤 直二
 法律顧問 藤 郎

祝サンデー五周年

新吉原 河内樓

電話下谷四八三番



株式會社 十五銀行

東京市京橋區木挽町七丁目

同 市日本橋區新乘物町

同 日本橋支店

資本金 貳千五百拾萬圓
 積立金 七百九拾萬圓



株式會社 第一銀行

東京市日本橋區兜町
 同 市日本橋區大門通

同 新大阪町支店

支店所在地

東京伊勢町、東京新大阪町、東京深川、大阪西區、大阪南區、京
 都伏見、橫濱、神戸、兵庫、名古屋、四日市、下關、長府、函館、小樽、札
 幌、釧路、根室、京城、釜山

祝サンデー五周年

淺草公園

活動寫眞
常設館

淺草館
電話下谷四九七七番

冬物斬新珍柄御勅題模様

半ズリ帶揚類

大島緋、秩父銘仙、節絲織、米流緋、玉紡績、京御召
光貴織、絹綿交織縞、緋類、友禪縮緬、同羽二重、各
色絹裏地、紅板、絹、瓦斯裏地、紅絹、肩
裏地、染別緋、兵兒帶、片側帶、腰帶、襦
袢袖、伊達巻、富士絹裾廻し地等流行品

吳服太物各類

新橋竹川町十二大通り角

ゑり治商店

東京市日本橋區坂本町七番地

田中銀行

會社

電話 壹九〇九番
浪花 貳四〇九番

定期預金六ヶ月以上

年 六分

當座預金百圓ニ付

日歩 九厘

特別 當座預金百圓ニ付

日歩 一錢二厘

祝サンデー五周年

男爵 藤田平太郎
金子直吉
松木幹一郎
早川千吉郎
木村清四郎
安藤保太郎
若尾民造
淺野總一郎
高松豐吉
安藤兼吉

男爵 利光鶴松
神田鑄藏
岡崎邦輔
中村是公
男爵 澁澤榮一
中橋德五郎
佐竹作太郎
團 琢磨
大倉喜八郎
男爵 近藤廉平

348
111

大正二年十二月一日印刷
大正二年十二月五日發行

著 者
權 利
所 有

發行者兼
著作者

右代表者
兼印刷者

印刷所

製本所

定價金五拾錢
特製金壹圓

東京市京橋區築地三丁目十五番地

サンデー社

電話 京橋 二七三九番
振替貯金口座東京 二七五三番
二九〇〇番

東京市京橋區築地三丁目十五番地

福良浩一

東京市京橋區宗十郎町十五番地

會社 東京國文社

東京市日本橋區箱崎町四丁目一番地

小島久男

10.3.14

+

サンデー
発行元社

281.04
J 52
①

終

